首巻き春貞
松平春貞一代記
祝言
二
松田純一
mactechlab.jp

首巻き春貞　松平春貞一代記

祝言

表紙デザイン　junichi Matsuda

主な登場人物

・松平春貞
通称首巻き春さん。本名は松平春貞。尾張藩三代藩主徳川綱誠が市井の女に生ませた子。尾張第六代藩主徳川継友とは腹違いの兄弟。尾張柳生新陰流免許皆伝。

・沙代
春貞の乳母

・小川笙船
小石川養生所肝煎。本道(内科)の町医者。江戸の町に住む貧しい病人の現状を目安箱へと訴え出たことが八代将軍吉宗の目に止まり、小石川養生所開設が命じられた。

・小川丹治
笙船の息子。養生所の医師

・永井幸江
尾張藩江戸上屋敷、江戸家老永井主水の一人娘。柳生新陰流の遣い手。

・永井主水
尾張藩江戸上屋敷の江戸家老
・大岡越前守忠相
南町奉行。
・伊丹鉄太郎
南町奉行所、定町廻り同心で春貞の親友
・佐竹弥五郎
南町奉行所与力。伊丹鉄太郎の上司
・徳川吉宗
第八代征夷大将軍
・徳川継友
尾張藩第六代藩主。松平春貞とは腹違いの兄弟
・林良適／岡丈庵
養生所の小普請医師(本道)
・村山自伯／村山元格
養生所の外科医

・笠原養瑚
養生所の眼科医
・堀田万之助
江戸藩邸剣術指南役および江戸家老永井主水の用人
・定吉
小石川金杉水道町を縄張りにする地元四代目の十手持ち
・お勢
定吉の女房
・お佳
定吉とお勢の娘
・政五郎
室町一丁目長濱町高砂新道沿いに鳶の店を張る「い組」の頭
・お志津
政五郎の女房
・弥三郎
養生所の下僕として働く。実は吉宗自らが送り込んだ腕利きのお庭番

・太子堂長兵衛
日本橋元鳥越仏壇仏具商の当主
・相模屋清右衛門
日本橋両替商相模屋当主
・三井八郎右衛門
駿河町の呉服商越後屋隠居

首巻き春貞　　祝言

目次

第一章　幸江の夢　八頁
第二章　春貞の秘密　五八頁
第三章　洲崎弁財天の大捕り物　一〇五頁
第四章　八丁堀の意地　一二八頁
第五章　事の真相　一八五頁
第六章　祝言の夜　二三二頁

第一章　幸江の夢

一

享保八年もあとわずかとなった師走の夕暮れ、幸江は久しぶりに尾張藩上屋敷内の剣術道場で汗を流していた。

剣術指南役堀田万之助の熱心な指導で、道場内はこれまでにない熱気に包まれていた。

堀田は尾張藩の不満分子が江戸家老永井主水とその娘永井幸江の命をも奪う覚悟でことに及んだとき、幸江を庇いその命を救ったことから江戸家老永井主水の信頼を得、剣術指南役はもとよりだが、江戸家老の側近としての地位を得ていた。

道場には永井幸江も熱心に袋竹刀を身のうちとなるよう日々努力していたものの、腰の金創はまず治ったというべきなのだが、時にその傷が引きつるので難儀していた。

「幸江どの、足運びはまだ無理をしてはいかん。養生所の笙船先生からも無理を

させてはいかんと注意されておるでな」
堀田は幸江の動きには満足しながらも万一の用心だと注意をした。
「ご心配をおかけします。無理はいたしませんので稽古をさせてください」
幸江も命の恩人でもある堀田の言葉には従順だった。
そのとき、
「御免」
と声がかかり、春貞が現れた。
堀田は、
「それがしがお願いしたのだ。久しぶりに稽古をつけていただこうとな」
幸江の顔がぱあっと明るくなり、察した堀田や師範代の酒井清之助の頬も緩んだ。
彼らは春貞と幸江のこれまでの経緯はもとより、なによりも幸江が春貞を慕っていることを知っていたからだ。
「師範のご依頼もあったで、久しぶりに仲間に入れて貰いたいと罷り越した」
春貞の表情も今日の青空のように澄んでいた。

あのとき、幸江が三十人ほどの藩士に襲われ、家老の主水自身も毒殺の危機から辛うじて逃れた騒ぎは南町奉行大岡忠相はもとより八代将軍徳川吉宗の配慮でお家騒動としてではなく市井の犯罪として処理された。

しかし尾張藩としては首謀者らを徹底的に洗い、首謀者と断じられた江戸上屋敷の次席家老酒井金右衛門と奏者番の小野寺昌之助、そして一番の黒幕だった国許の家老、中山大膳が詰め腹を切らされた。そしてこの藩主を引きずり下ろそうとの計画に加担した四十一名が追放を始めとする重い処分を受けた。

無論表向き、酒井金右衛門や小野寺昌之助の死は病死と幕府に届けられたし経緯を承知の上で吉宗はその届けを受理した。

ただし国許にいる藩主徳川継友の主導で藩政のありかたを再吟味の上で不穏な空気を一層すべくさまざまな働きがあったからか、この江戸藩邸の剣術道場においても目に見えて開放的で積極的な稽古ができるよう変貌していた。

堀田が春貞に、

「春貞どの。本日は一対一の立ち会いではなく当道場の若手五人と同時に相対していただけまいか。結果は見ずとも分かっているがその道理をここにいる五十数人の門弟たちに見せておきたいのです」

と願った。
春貞は相変わらず着流しに首巻き姿だったが、すでにその氏素性が知れ渡っていたこと、前回の立ち会いで春貞の実力を皆が知ったこと、そしてなによりも春貞が江戸家老と剣術指南役の願いによってこの場に立っていることを承知していたから誰も粗略に扱う者はいなかった。
「堀田どの、承知した。ご期待どおりに運ぶかはともかく立ち会いさせていただこう」
春貞は道場正面にある見所の神棚に拝礼し中央に立った。
「神谷新太郎、小平一之進、中尾虎吉、吉村吉兵衛、田村定勝の五名出ませい」
堀田の力強い声に押されるように名指しされた五名がキビキビと道場中央に進み出て春貞に会釈した。
五人は皆二十歳前の若者であるだけに意欲満々だったし、誰もが五人でかかれば遅れを取ることはないだろうと高をくくっていた。
春貞も軽く会釈をした後、
「では、まいる」
そう口に出しながら春貞としては珍しく袋竹刀を青眼に構えた。

春貞の中央にいた中尾虎吉が大胆にも上段に構え、間合いをはかった。と同時に他の四名はじりじりと春貞を囲むようにして青眼に構えた。皆良い面構えだ。

しかし春貞は微動だにしない。

春貞の背面にいた吉村吉兵衛と正面の中尾虎吉がほぼ同時に裂帛の気合いを発しつつ切り込んだ。後の三人は春貞の動きを読んでから動こうと思っていたが、春貞がわずかに右に動いたと思った刹那、中尾虎吉の袋竹刀は空に飛ばされ田村定勝と神谷新太郎が胴を抜かれて倒れ込み、背面から切り込んだはずの吉村吉兵衛はどこを打たれたか一間ほど吹き飛んでいた。

残った小平一之進は気後れしたか平常心を失っていた。

闇雲に袋竹刀を振り回しながら無防備に春貞の面を狙って間合いの内に入った途端、気を失った。春貞の竹刀が手加減をしながらも左肩口に打ち込まれたからだ。

「それまで」

堀田の声が道場に響いた。

立っていたのは袋竹刀を飛ばされた中尾虎吉だけだったが、仲間がまだ立ち上が

れない様子に呆然としていたものの、当の四人は自分がどう倒されたかも分からなかった。
しかし堀田はあらためて春貞の凄さを見せつけられた思いがした。
結果、春貞はほぼ勝負が始まる立ち位置にいたし、息も切らしてはいなかった。
「おみごとでござる春貞どの」
堀田があらためて頭を下げた。
そのとき、試合を遠巻きに見ていたうちの十数人が、
「春貞さま、一手ご指南を」
「いや、それがしに是非ご教授を」
と春貞に手合わせを願って迫った。
その輪の外には幸江がいまにも「私こそ」と声を上げようとしていたが、さすがに自分は日々養生所の片隅などで春貞と立ち会う機会に恵まれていることを思い出して声を上げるのを思い留めていた。
「こらこら、稽古がきらいなお主たちが珍しいことよ。しかしまずは春貞どのから離れよ」
師範の堀田が苦笑いしながら門弟たちを諌めた。

その後、道場の離れに場所を移して春貞は堀田と幸江に向かい合っていた。
「傷はほとんど治られたようですな」
堀田が春貞の肩に射手から受けた傷を思いやった。
「おかげさまにて、傷は治ったはずですが雨の日などはときに痛むのが厄介です。そう、幸江の傷は俺より大事だったからやはり痛むか」
春貞は自分の事より幸江の傷を心配した。
「春貞さまがおっしゃられるように時々痛むと言うより引きつる感じもしますが稽古ができる幸せをありがたく感じています」
そんな他愛もない話しをしていたとき、いきなり人の気配がして江戸家老永井主水が入ってきた。
主水は幸江の実父だ。
堀田は席を空けつつ、平伏したが家老は「そのままそのまま。年寄りの気まぐれじゃ、少しお主らと話しがしたくてな」
と座り込んだ。
「お体の具合はもうよろしいのですか」

春貞は幸江から家老が以前のように政務を意欲的にこなしていることを聞かされていたが、すっかり老けた姿に思わずそう言葉を掛けた。
「心配かけて済まぬが、お主たちのおかげで懸念を払拭できたでな、心置きなく政務に向かえるものの情けない話し、一度緩んだ気持ちの箍はすぐには元に戻らんのじゃ。いや、気持ちは前向きなのだが体が動かんのじゃ。やはり歳はごまかせんな」
それでも藩主継友の覚えがめでたく信頼厚い主水にはまだまだ課せられた責務が多かった。
「お茶をお持ちします」
幸江が立ち上がった。
「誰かに命じればそなたが動くこともあるまい」
父親の主水がそう諭したが、幸江はそのまま奥に引っ込んだ。
「そうそう、この機会に堀田、そちに聞きたいことがあるのだ」
「なんでございましょうご家老」
堀田は家老に向き直ったが、主水は堀田と春貞二人の顔を見ながらいった。
「正直、幸江の腕前はどの程度なのか、忌憚のない話しを聞かせてくれ」

堀田は春貞にちらりと視線を送ったが、意を糺して、
「以前よりずっと腕を上げられました。いや、まことの事です。
それがしが見るところ、春貞どのと日頃の稽古の成果でしょうが、一番はやはり
先の騒動で命を捨てる覚悟を体験したからではないでしょうか。
春貞どの、いかが」
堀田師範は春貞にも意見を求めた。
「確かに。師範のいわれるとおりだと思います。刀を抜く覚悟のようなものが幸
江さんに備わったと思われます。それが一層の稽古熱心に繋がったようですし、
事実当藩師範代の酒井清之助殿につぐ実力が名実ともについたと存じます」
ふうっと深い息を吐いた主水は、
「父親として喜ぶべきなのかのう、春貞どの」
複雑な表情を浮かべて主水は春貞の顔色をうかがった。
そのとき、慣れない手つきで盆を持った幸江が現れ、
「父上、ため息などされ、また何かご懸念がございますのか」
と聞いた。
男三人は苦笑いでその場を誤魔化した。

春貞が尾張藩邸を辞そうと立ち上がると幸江も、
「お伴します」
と手慣れた手つきで大小を腰に差した。
主水は諦めとも喜びともつかない複雑な顔で二人を見送ったが、堀田は、
「御家老、僭越ですがお二人は実にお似合いではございますまいか」
と遠ざかっていく後ろ姿を眺めた。
主水も無言で頷いた。

二人は藩邸を出て小石川養生所へと足を向けた。
安藤坂まできたとき、先方から数人の男たちが駈けてくるのが見えた。春貞と幸江は何ごとかと一瞬身構えたが、それは金杉水道町の十手持ち、定吉と同心伊丹鉄太郎らであった。
「どうした」
「へい、押し込みの知らせで駆けつけますんで。どうやら殺しのようで」
定吉の物言いに伊丹も頷いた。

春貞は後ろにいた幸江を振り向いて頷き、
「迷惑でなければご一緒しよう」
といった。
「こりゃあ、鬼に金棒だ」
定吉の子分、金次が喜び、伊丹も賛意を示した。
幸江も含めて全員が走り始めた。
定吉たちが向かった先は、音羽町にある亀屋という質屋だった。
その商売柄、間口は狭くて地味だが少し離れて見渡せば敷地に建つ漆喰の土蔵の数は多く、手広く商売をやっていることが伺えた。
すでに南町奉行所の役人たちが手際の良い調べを進めていた。
伊丹は早速店の玄関口から目を光らせていた。
「親分、これはひでえ」
先行して現場に入り込んだ定吉の子分金次が顔を歪めて出てきた。
「皆殺しか」
伊丹が呟くと金次は頷き、
「旦那、親分、まずはご覧になってくだせい」

と質屋の奥座敷へ案内した。
春貞は店に入らず、勝手口に回ってみようと幸江を誘って土塀に沿って歩いた。
先に奥座敷へと入った定吉や伊丹も仕事柄随分と耐えがたい場を経験していたがこの一室で繰り広げられた惨劇は忘れようにも忘れられないほど惨いものだった。
主夫婦が血の海の中に倒れ、返り血は床の間の天井近くまで達していた。
「やられたのは何時頃だ」
伊丹の問いに金次は、
「となりの下駄屋の女将が悲鳴らしきものを聞いたというのが子刻の二ツ時あたりだと言ってます。声はその一度だけのようです」
「なある。まずそんなところだろうな。主と女将は一刀両断だ。こりゃあ二本差しの仕業に違えねえ」
伊丹の指摘を受けて腰を屈めていた定吉が呟いた。
「旦那、隣の部屋に倒れているのは息子の為次郎、そして廊下と奉公人部屋の五人は匕首のようなもので滅多刺しですぜ」
「ということは賊は二本差しが一人と少なくとも後二人から三人匕首を使った野

郎がいるという理屈だな」
「旦那、なぜ匕首使いが二人から三人とおっしゃるんで」
金次が聞いた。
「まあ長年の勘働きよ。先ほどお前は隣の店の女将が悲鳴らしき声が聞こえたのは一度といったな」
「へい」
「これだけの惨劇だ。悲鳴を上げる間もなく、あるいは悲鳴をあげさせないようにしてのけたに違えねえ。とすれば一人では無理だ。ほぼ同時に殺したに違えねえ。だとすれば最低三人ほどでなければできん相談だろう」
そのとき、庭側から春貞と幸江が現れた。
幸江は室内の惨状から視線をはずしていたが、気丈に春貞に従っていた。
「伊丹さんの申すとおり、賊は五人ほどのようだな」
「春さん、なにか証しが見つかりましたか」
定吉が問うた。
「賊は勝手口を壊して出入りしたようだな。返り血なのか傷を負ったのかは分からんが、戸や土塀の一部に血痕が付いてる。それに昨日は夕刻に小雨が降ったこ

とが幸いしたか、賊の足跡が重なっている箇所が見える。伊丹さんに判断してもらうべきだが一人は土蔵に向かっているし、やはり五人はいたようだな」
春貞はそういいながら、着流しの裾を引きつつ室内へ上がった。
そのとき、庭にいた幸江が、
「金次さん、殺されていること、誰がいつ知ったのでしょうか」
「そのことよ」
金次が言葉を発する前に伊丹が腕を組みながら、
「今朝のことだ。日本橋に分家の店があるんだが、その手代がいつものように商いの報告のために立ち寄ったものの店が開いてないのを不審に思い、番屋へ知らせたようだ」
「ふうむ。日本橋の店が本店ではないのか…」
春貞が呟き、金次が答えた。
「へい。日本橋の御店(おたな)は六年前に開いたばかりでして、ここに亀屋という質屋ができたのはかれこれ三十年ほど前になりやす」
「ところでここにいる亡くなった八人の他に奉公人や身内はいねえのか」

「さきほど分家に人を走らせやしたが、小女がひとり母親の具合が悪いとかで三日ほど前から親元に戻っているそうです。命拾いしましたな」
定吉はまだ殺された奉公人たちの傷口を調べながら答えた。
「伊丹さん、奪われたのは金だけですか」
春貞が問うた。
「こればかりは全容を調べるのは時が必要だが、先ほど春さんが土蔵に向かった形跡があるといったな。確かに蔵のひとつが鍵を壊されている。質入の品々も金目のものは持って行かれたと考えてよいだろうよ」
悔しそうに伊丹が呟いた。
そのとき、
「親分、こちらの仏さん何か手に握ってますぜ」
と金次が興奮した声を上げた。
「なにっ」
定吉が伊丹に目配せしながら使用人の左手の指を一本一本開くと薄汚れた守り袋と思われるものが現れた。
「刺されたとき、夢中ですがりつき、手に触れた物を引きちぎったに違いねえ

が、こりゃあ手入れが悪いというか紐が弱くなっていたんだな。それに下手な鼠の刺繍がしてあるぜ。賊は子年なのかな」
伊丹がため息のような声を出した。
「状況から考えてこれは賊が首から下げていたものと考えて良いだろうな。後は金がいくら盗まれたか、質入れ品の中で持ち去られたものはなにかを調べないとらちがあかんな」
伊丹同心は十手の先で血が飛び散った床の間飾りの小さな扉を開けながらいった。

南町奉行所の取り調べが終わり、八人の死体が運び去られた。
「伊丹の旦那、春さん、幸江さま、話しをまとめたいと思いますので宅へ寄っていただけますか。それに腹に何かいれないことには思案ができませんや」
定吉が願った。
大晦がまじかになった冬場だ。日の落ちるのも早く当たりはすでに夕闇が迫っていた。
伊丹も頷き一同は金杉水道町にある定吉の家に向かった。

そこは定吉の女房お勢がきりもりする飯屋のような場所だった。
当初は役人たちの溜め所のつもりで空いた酒樽を数個おき、その間を厚い杉板を渡して座れるようにしただけの空間だったが、近隣の人たちにとっても夜遅くまで簡単な食事が取れる場所として繁盛していた。
「お勢、帰ったぜ。旦那と春さん、幸江さまもご一緒だ。酒となにか見繕ってくれ」
暖簾を押しながら定吉が声を上げた。
奥から気っ風の良い声で、
「お前さん、皆様お疲れ様でした。ただいますぐに」
と声がした。
「旦那、春さん、お嬢さま、まずは適当にお座りくださいな。お疲れでしょう」
定吉が皆を酒樽に渡した杉板に座らせた。
そこへお勢と娘のお佳が熱燗と大根の煮物を入れた丼を持ってきた。
「まずはこんなものしかないけど、体を温めてくださいな」
「いつもすまんな」
伊丹同心が軽く頭を下げた。

「いやですよう旦那、もったいない」
勢は赤い顔をして奥に引っ込んだ。それと入れ違うように金次が小さな手あぶりを抱えて出てきたが、
「お嬢さま、ここは吹きっさらしでお寒いでしょ。お使い下せい」
と幸江の隣に手あぶりを置いた。
「あ、ありがとうございます」
幸江もかじかんだ手を擦りながら手あぶりに近づいた。
酒が入り、腹も満たされると眠くなるが、皆眠ってはいられなかった。
春貞は静かに飲んでいたがなにか思案をしているようだった。
「春の旦那、なにか気がつかれたこと、ありやすか」
定吉もほんのり赤みを帯びた顔で問うた。
「いや、現場のありさまからでは残念ながら賊たちへ結び付くものがないようだ。で、な、伊丹さん、親分。ここはひとつ賊たちをおびき出してはどうかと考えていたんだ」
「そんな妙案があるのか春さん」
伊丹は酒に伸ばした手をそのままに聞いた。

「伊丹さん、先ほど仏の一人が握っていた守り袋の中を確認しましたな」
春貞の問いに伊丹は、
「おお、先ほど開いて見たが、へその緒らしきものときっと名だと思うが『ともぞう』と書かれた紙片と汚れた将棋の駒の片割れがあったな」
と言いながら春貞を見た。
「伊丹の旦那、へその緒はわかるが将棋の片割れって何の意味があるんでやしょうかね」
定吉が首を傾げたとき、春貞はふっと顔を上げた。
「それってもしや、割り符と考えられませんか」
春貞のひとことに伊丹同心と定吉親分、子分の金次の表情が引き締まった。
「春貞さま、わりふってなんですか」
永井幸江が眠そうな目を擦りながら聞いた。
「長崎にいたとき聞いたことだが、例えば抜け荷といった場合、身も知らぬ相手が間違いなく抜け荷仲間の相手であることを確認するための符牒となるものらしい。花札とか将棋の駒あるいは御札のようなものを二つに切り分け、それぞれ片方ずつを持ち、それを合わせて相手を確認するためのものだ」

「ふむ。それなら俺も聞いたことがあるな。盗人同士の確認にも使われることがあるようだぜ」
伊丹の眼に光が宿った。
「で、春さん。なにか妙案でもあるのか」
春貞は深い呼吸をした後に声を落とし、
「金次、外廻りに誰もいないか確認してくれ」
と願った。
春貞たちの話しは戌の刻を過ぎようとするまで続いた。
春貞と幸江は皆と別れ、四半時もかからない距離にある小石川養生所に向かった。
幸江も今夜は養生所に泊まることにしたが、定吉のところの小者がその旨をしたためた一筆を持ち、尾張藩上屋敷の永井家老の私邸まで届けるために走った。
暖まった体が師走の北風でまた急に冷えてきた。
「春貞さま」
甘えた声を出しながら幸江が提灯を持つ春貞の腕に自分の腕を絡め体を寄せてきた。

「おっ、えらく冷たい腕だな」
春貞は振りほどくこともせず、幸江のなすがままにしながら歩いた。

二

十二月二十八日の朝早く、小石川養生所肝煎職を務めている小川笙船と春貞は南町奉行所に呼び出された。とはいっても春貞は小川笙船の付添人としてだ。
この日小川笙船は養生所の建議、開設までの尽力に対し、銀二十枚を褒美として賜ったのである。さらにその際、南町奉行大岡越前守忠相から幕府に仕えないかという将軍吉宗の意向が伝えられた。
この時期、身分の別にかかわりなく幕府の目に止まった優秀な人材は次々と幕臣に登用されていた。
しかし小川笙船は、自分は年寄りでもあり病弱、そしてなによりも養生所だけの御用を務めたいと要請を固辞した。

その後、与力佐竹弥五郎、同心伊丹鉄太郎らに送られて南町奉行所を後にした笙船と春貞は歩行(かち)で小石川養生所へと向かった。

「先生、ご褒美はそれとして幕臣へのお取り立て、お断りになったとのことですが何故です」

春貞は帰ってくる言葉が分かっているようにも思いつつ問うた。

「いや、わしには宮仕えは無理じゃて。歳でもあるしな。それにそもそも養生所の運営というか医療活動が軌道に乗るまでのお役目と考えておるからじゃ」

笙船は春貞を見つめながら続けた。

「これはな春さん、お前さんだけに言っておくことじゃが、わしもな、僅かでも体が動き好きなことができるうちにお役目を譲り隠居したいと思っているのじゃよ。まあ来年、お前さんたちの祝言を見届けたら目処を付けたいと思っている…」

春貞は返す言葉がなかった。

いまの自分がいて、まがりなりにもこうして暮らせていけるのも赤ひげこと小川笙船のおかげだと思っているからだった。

「先生は欲のないお方ですな」
春貞はそういうしか思いつかなかった。
笙船は笑いながら
「そういうが春さん、もしお前さんに公方様から幕臣に取り立てるがどうだ…というお話しがあったらどうする。喜んで受けるか。やはり受けんじゃろうなあ」
「俺と先生では立場が違いますよ。俺は先生のように医学の知識もありませんや」
春貞がそういうと、
「お前さんはいまだに自分の価値を分かっておらんようじゃな。公方様をはじめ大岡様、い組の頭や定吉親分にしろ、お前さんの出目で付き合っているわけではあるまい。皆お前さん自身がいつも人のためにと思い動いているからじゃ」
「先生、もし先生が養生所肝煎をお辞めになったら後はどなたが肝煎職にお就きになるんですか」
春貞は話柄を変えた。
「これまたここだけの話しにしてくれ春さん。先ほど大岡様にわしの肝煎のお務めは後二年ほどと考えておる旨をご相談申し上げたが、その折りに小石川養生所

の肝煎職は今後も代々小川家の世襲にせよとの上様からのお達しがあると聞かされてな、驚いたところなのじゃ」
このことは前記した、身分にかかわらず優秀な人材は適材適所、幕臣に取り立てられた現実と矛盾する処遇だった。
事実後の話になるが、笙船の後は息子の丹治が養生所の肝煎に就任し、結局幕府が倒れて養生所が廃止されるまで小川笙船の末裔がずっと肝煎職を務めた。
このことだけでも吉宗の小石川養生所に対する期待というより小川笙船という人物を高く買っていたことが窺い知れよう。
「しかし、先のこととは言え、俺の今があるのは先生のおかげです。養生所のお役目を離れるとなれば寂しくなります」
春貞は思ったことをそのまま口に出した。
「それはわしも同じじゃ。しかしな春さん、わしは医学の道に進み幸い多少世間に認められたようじゃが、他にもやりたいことはあるのじゃよ」
小川笙船は春貞と歩きながら、思い出をさぐるように昔の話しをはじめた。
「春さんにも話したことはなかったと思うがのう、すでに三十年ほど前に亡くなった松尾芭蕉と若い頃に出会ってな、俳諧を嗜み、好きなことで日々細々とでも

暮らせたら楽しかろうと思った時代があったのじゃ…」
笙船の話しによれば、先祖はどうにも運がなかったとしか思えんという。
小川笙船の先祖、五代前の小川祐忠は豊臣秀吉に仕えて、伊予国今治(現・愛媛県)に七万石を与えられていた大名だった。
ところが、関ヶ原の戦いが運命の分かれ道となった。
小川祐忠は西軍として参戦も小早川秀秋に応じて家康率いる東軍側につくも改易となり関ヶ原の戦いの翌年に死去する。
また笙船の祖父である俊広は三代将軍家光の弟である徳川忠長に仕え、鷹匠頭を務めていたが、忠長が家光との確執の末に自害したため、その後の足取りはよく分からないのだという。
「要はな、春さん。わしの祖先は主人持ちだったからな、時代に翻弄され続けてきたといえような。そうしたことを見聞きして育ったわしは宮仕えではなく真に好きな道でこの生を全うしたいと願って来たのじゃ」
「でも先生は医学の道に進まれた…」
春貞の言葉に頷きながら笙船は、
「確かにな。きれい事のように聞こえるかも知れんが、同じ長屋に住む廻りの

人々のな、あまりに酷い医療環境を見ているうちに一人でもこの手で助けたいと思うに至ったのじゃ。特に幼い子供たちがろくな治療も受けられずに死んでいく様は放っておけなかった。どうしたら傷が膿まずにな、早く直るのか、死に逝く人の痛みを少しでも少なくするにはどうすべきかと書を読み、ひとかどの医者だという先達を訪ね歩いたものよ。でな、気がついたら医者になっていたというのが本当のところじゃな」

「それが昨年の目安箱への訴えに繋がったわけですね」

春貞の問いに笙船は、

「そうじゃな。幸いわしの願いは公方様の目に止まり養生所という願ってもない施設ができることになった。わしは果報者よ。その養生所もお前さんたちの努力でまずは軌道に乗ったでな、わしはまた好きなことでもして余生を過ごしたいのじゃ」

春貞は、何もいうことができなかった。

小石川養生所の朝は早い。診察自体は明け四つ(午前十時頃)からだが、それ以前にやらねばならない日課が詰まっていた。

特に賄い方は医師や泊まり込んだ同心たちの朝餉は勿論、入所者百名もの食事を用意するのにてんやわんやだった。
この日の朝餉の場には春貞と幸江、養生所肝煎の小川笙船、息子の丹治、本道の医師林良適、外科医師村山自伯、眼科医師笠原養瑚および弥三郎がその場にいた。
朝の日射しを浴びながら話題は自然に昨日の事件に及んだ。瓦版を皆が読んでいたからでもあるが、その場にいた春貞と幸江は質問攻めとなった。
賄中間の八重らが運んできた膳をそれぞれが囲みながらも相手が医師たちであったから悲惨な話しもしやすかったものの、朝餉の話題としては相応しいとも思わなかった。しかし春貞は差し支えのないように気配りしながら昨日の様子を語った。
「賊の目処はたっているのかな」
笙船が漬物を咀嚼してから呟いた。
「先生、それがからっきしでして、伊丹さんや定吉親分も苦慮しています」
春貞は茶を飲みながら続けた。
「ひとつは内部から手引きがあったのではないかと調べましたが、どうやらその

気配は見つかりません」
「手口から見てやはりあらかじめ目星を付けた奴らの計画的な、それも強引な犯行ですかね」
弥三郎がいった。
「伊丹さんもそう言われたな」
春貞が受けた。
村山自伯が食べ終わった箱膳を片付けながら、
「お聞きした殺害状況から犯人を特定するのは難しいようですな。推測できるのは主夫婦をやったのが腕の立つ侍だということくらいです」
「春さんや、目撃者もおらんのかな」
小川笙船が問うたが、春貞は無言で首を横に振った。
「それでは打つ手がありませんので」
という弥三郎の言葉を受けた春貞は、
「ひとつだけ策があると思ったので伊丹さんらと話し合いをしましたが、さて旨く行くかどうかですな」
春貞が天井をにらむようにしながら呟いた。

「ああ、あの瓦版に載せるという件ですね」
幸江がいうと皆が注目した。
「どういうことです。幸江さま」
幸江は春貞の表情から続けて自分が話しても良いと判断し、
「春貞さまのいわれるには、その割り符は…割り符だとしたら犯人にとって命の次ぎに大切なものに違いない、探し回っているに違いないとおっしゃるのです。ですからその割り符、お守りが落ちていたことを瓦版に載せたら持ち主、犯人が取りに現れるのではないかと」
そう説明した。
「割り符だとして、そんな大事なものを所持していた人物は一味の頭と見て差し支えないだろうよ。とすれば悪党の頭の名は『ともぞう』ということになるな」
笙船が言い切った。
そのとき、玄関から慌てたようすで、
「春さん、春の旦那はおいでですか。急ぎお知らせしたきことがあって飛んできやした」
とどうやら声の主は金杉の定吉の子分、金次のようだった。

弥三郎がふわりと座を外して玄関へ向かい、確認の上で春貞を呼びに来た。
「春さん、ていへんだ。急ぎ親分の宅に来てくだせい」
金次の様子がただごとではないのを察し、春貞は笙船らに断りもなくそのまま金次と一緒に金杉水道町へと走り始めた。
弥三郎がその旨、笙船に知らせると幸江は、
「私も様子を見てきます」
と大小を腰に差して皆に頭を下げた。
「春さん、幸江さんと一緒だと退屈する暇がないのう」
笙船が笑った。
春貞が金杉の十手持ち、定吉の店に入ると定吉親分と同心伊丹鉄太郎、そして見知らぬ男が座っていた。
「おお、春さん待ってたぜ。まあこちらへ」
伊丹同心が見知らぬ男の前の席を空けながらいった。
春貞は事情が分からぬままに伊丹にいわれた場所に座りつつ男を見た。
男は春貞と同じほどの年齢か、棒手振のようで脇に商売道具を置き、定吉親分や伊丹同心に囲まれて緊張していた。

定吉は、
「これで役者が揃った。ひとつ話しをまとめやしょうかい」
と言い、隣に立ったままの金次が矢立と懐紙を手にした。
「親分、急ぎとはどんなことだ」
春貞の問いに頷きながら定吉は伊丹同心に目配せしつつ語り始めた。
そのとき暖簾がゆれ、永井幸江が入ってきた。春貞は無言で座れと頷いた。
「春さん、まず日本橋元鳥越の大店、太子堂をご存じですな」
春貞の表情がこわばった。
「太子堂になにかあったのか」
「いえ、今のところはなんのこともありませんが、急ぎ春さんに知らせたいと伊丹の旦那がおっしゃるものですから金次を走らせたという次第なんで」
うむ、と頷きながら春貞は、
「話しが見えねえ。順にたのまあ」
と腕組みをした。
定吉の話しによれば、ここにいる男は与助という棒手振だが、一方定吉の下っ引きの一人だという。

棒手振は長屋の奥まで、ときに呼ばれれば売り物を届けるため旗本屋敷にも入り込むわけだが、そうした中でこれはという情報を定吉に知らせて小遣い稼ぎをしているいわゆる「たれ込み屋」だった。

定吉は直接の手下連中とは別にこうしたいわゆる下っ引を数名使い、自分の縄張りはもとより江戸八百八町の裏情報を知るようにしていた。

そうした一人の与助が昨晩、小石川御門付近で尿意をもよおし小便をした直後、人の気配がしたので反射的にしゃがみこんだという。

そこへ町人風の男二人が近づき小声で話し込んだ中に太子堂という名があったらしい。さらに男の一人は「太子堂を襲う日を頭に知らせるように」と別の男に指示した上で、「質屋のときの手順を忘れんようにな」と念を押して立ち去ったという。

「後をつけなかっただろうな」

春貞は聞いたが、与助は弱々しく首を横に振った。

「それでいい。下手に深追いすると元も子もないしお前の命が危なかったからな。男たちは太子堂を襲う相談をしていたということだな」

春貞の念に与作は「はい」と返事をした。

それまで黙っていた幸江は、
「なんとかしなければ、春貞さま」
と悲痛な声を上げた。
春貞と幸江は伊丹同心の依頼もあって過日その太子堂に出向き、主の長兵衛と娘の夏穂と会ってきたばかりだった。
幸江は京人形のように愛らしい夏穂の笑顔を思い浮かべ、
「夏穂さんたちを守らねば」
と再度呟いた。
「幸江さん、今のところ犯行の日取りなどについてはまるでわからんのだ。まさか真っ昼間ということはないだろうが、もしかしたら今夜かも知れんし明日かもしれん。それに明後日は大晦だ。多分この騒がしい年内に押し込むつもりだろうな」
伊丹は右の拳で自分の膝を叩いた。
「悪党め、続けざまにしてのけようと考えていやがるか」
定吉も唇を噛んだ。
「与助さんとやら、お手柄だった。これは少ないが俺からの礼だ。ただし言うま

でもないがこの話しはここで忘れてくれ。でないとお前さんの命も危ないからな」

春貞は懐から豆板銀を数粒取りだし与助に握らせた。

与助は定吉へ伺うように視線を向けたが定吉の頷きに頭を下げつつ無言で出て行った。

そのとき春貞は、

「伊丹さん、親分、こんな案配でどうだろうか」

定吉の店での相談はその後昼餉をはさみ半時近く続いた。

三

その日の申の刻、日本橋元鳥越の仏壇仏具を扱う大店、太子堂に永井幸江と風呂敷包みを持った老爺の姿があった。

幸江は珍しく小紋の振り袖に島田髷を結っていたが大小はなかったし老爺はあの

八代将軍吉宗直々に小石川養生所警護のためにと使わされたお庭番の弥三郎が姿だった。
通りがかりの人々から見れば旗本の娘と下僕が買い物にきたとしか見えなかっただろう。
無論、幸江と弥三郎は万一のことがあってはと店主の長兵衛へことのあれこれを知らせると共に警護のために泊まり込むつもりだった。
これだけ急ぎの仕業だ。店内に引き込みがいるとも思えなかったが万一を考え、客を装った弥三郎が、
「尾張の幸江さまです。主人を呼んでおくれ」と願った。
また賊の仲間が店を見張っていると考えるべきだという春貞の策で姿形を変えて御店に入ったのだった。
しばらくすると今度は籠が二挺呼ばれ、先ほどの小紋を着た女性と年寄りがそれぞれの籠に乗り込み戻っていった。
実は籠に乗ったのは太子堂の娘夏穂と店主の長兵衛が衣裳を変えた姿だった。無論、奥座敷には代わりに幸江と弥三郎が夜通し詰めることになった。
さらに四半時ほどの後、法仙寺駕籠と共に医者と思われる男が店内に入っていっ

たが、医者は小石川養生所肝煎小川笙船の息子丹治だった。そしてすぐに痩せて青い顔をした女と共に出てきたが、女は手代に手を引かれつつ籠に乗り込んだ。女は弱々しい声で店先に飾られた門松に視線を送りながらも手代に、

「たのみましたよ」

と声をかけ心配そうに遠ざかって行ったが、籠の脇にはぴたりと丹治が寄り添い、離れて鳶と思える男衆三人がわざと大きな声で喋りながら事もなげについていく姿があった。

無論男たちは春貞が「い組」の頭政五郎に警護のためにと助っ人を頼んだ腕の立つ男たちだった。

向かう先は小石川養生所だ。

籠の中の女は労咳で伏せていた長兵衛の妻お糸だった。

病人が養生所へ出向くのは可笑しな事ではないし長兵衛、夏穂と共に万一を考えた主たちの避難策であった。

ただし大番頭の富吉にはすべての事情を話したが、手代や小僧たちにはいたづらに混乱を避けるためと話しはせずそのまま店は商いを続けた。

富吉は奥座敷に主長兵衛が絶大な信頼を寄せている幸江や弥三郎が詰めているこ

とに安心し、肝の据わったいつもと変わらない時間が過ぎていった。
その頃、春貞らは町奉行所の計らいで太子堂に隣接していた菓子問屋京楽屋の二階角の座敷を見張所として借り受けた。
さすがは大店の太子堂、この日も千客万来だったが主夫婦が欠けてもその日の店じまいまでいつもどおりの商いをやってのけた。それは大番頭富吉の手腕でもあった。とはいえ奥座敷などを見張る弥三郎や幸江らにとっては長い夜になろうとしていた。
一方、太子堂の主長兵衛夫婦と一人娘夏穂は小石川養生所の小さな空き部屋で小川笙船と向かい会っていた。
笙船は、
「お店と違い狭くて粗末な部屋じゃが気兼ねは無用じゃ。ことがことじゃて数日辛抱してくだされ」
磊落に挨拶した。
長兵衛夫婦は二度までも春貞に命を助けられたと深々と頭を垂れた。
ただひとり夏穂はこれまで見たこともないあれこれに興味津々でその表情は輝いていた。

「せっかくの機会じゃ。春さんよりお内儀は労咳でふせておられると聞き申した。ご異存がなければここには経験豊かな医師が詰めておるでな。念のため診て進ぜようと思うがいかがかな」

笙船の言葉に長兵衛と糸は再び頭を下げた。

翌日の朝早く、瓦版の端には小さくだが目立つ「瓦版の読売浅太郎、音羽町にて鼠の刺繍がある古めかしい守り袋を拾った。心当たりの主は申し出られたし」という文字が躍っていた。勿論南町奉行所が浅太郎に頼んだことだ。

ただしこれは特異な出来事だった。

なぜなら本来瓦版は非合法の出版物であり、そもそもが町奉行所から追われる立場だったからだ。

ちなみにテレビドラマなどに登場する読売（瓦版の売り子）の姿はフィクションであるという。

史実は非合法だからして編み笠で顔を隠しての商売だった。

とはいえ現実としては二つの禁を犯さなければ町奉行所も目くじら立てて読売を迫害していたわけではないという。何しろ人手の多い場所にいつもいるわけだか

ら捕縛するなら簡単だったはずだ。
なお二つの禁とは「心中」と「幕政批判」だった。それ以外の情報はお上も町人たちのガス抜きも含めてその存在意義を認識していたに違いない。
そんなわけだから南町奉行所同心から頼まれれば読売浅太郎は断れなかった。
「いいか、持ち主という奴が現れたら詮索せず素直に渡すんだ。商売っ気だして後を追うような真似をすると命にかかわるぜ。そちらは俺たちの役目よ」
同心たちに言い含められた浅太郎はまかしておけとばかり胸を叩いた。
しかし持ち主と名乗る者はすぐには現れなかった。
大晦を明日にひかえた夜半に太子堂に動きがあった。
見張所に詰めていた定吉の手下や八丁堀の捕り手たちが同心らの采配で万全の体制を取っていた。
また太子堂には弥三郎と幸江が、主夫婦と入れ替わり潜んでいたし春貞も奥座敷にいた。
黒い影は十人あまり、次々と太子堂の築地塀を軽々と飛び越え敷地内に音もなく忍び込んだ。
その刹那、

「御用だ」
「神妙にしろ！」
御用提灯が多々掲げられ、あちこちに捕り手たちの声が響いた。
「しまった。切り抜けろ」
の叫びと共に刃物と刃物がぶつかり合い、悲鳴があちこちであがった。
捕り手たちは梯子や刺股などで賊らの動きを封じていたがその賊たちの前に伊丹
鉄太郎が長十手を青眼に構えて立ちふさがった。
伊丹と二間ほど離れたところでは定吉と金次らが賊のひとりを早くもお縄にして
いた。
逃げ場を塞がれた賊の二人は月明かりでも浪人とわかった。
「てめえらだな、質屋主をやりやがったのは」
伊丹の両眼に力が入った。
そのとき浪人二人が同時に抜き放ち、伊丹を袈裟に切り込んだが一人の刀は長十
手に阻まれ宙に飛び、一方の浪人の刀は真っ二つにへし折られた。
刹那返した伊丹の十手は二人を庭石と土塀に吹き飛ばしていた。
家屋に灯りがともされ、御用提灯と共に賊達の姿をはっきりと映し出していた

が、すでに三人を除いて捕縛されていた。
伊丹が振り返ると年配で髭面の男が匕首を構えて永井幸江と対峙していた。
「お前が頭ですか」
幸江が声をあげたが、男は相手が女と見て油断したかにやりと笑いながら手慣れた動きで匕首を腰だめにして突いてきた。しかし幸江は尾張藩江戸屋敷内の道場で師範代と均衡する腕を持つとされていたからたまらない。
後から動いた幸江の刀が灯りを受けて光った刹那、男は肩を砕かれ、雑巾のように崩れ落ちた。
賊たちを逃がさないようにと勝手口付近に陣取っていた春貞は、
「俺の出る幕がなかったな」
と呟いた。
「俺たちには盆も正月ないのは承知だが、なにもこんなに押し詰まってから押し込むこたあねえのに。これじゃあ吟味で忙しく餅を食う暇もないや」
伊丹が引き上げを命じながらこぼした。

四

大晦となったその日。商家は特に忙しかった。掛け取りに手代達は飛び回っていたし正月の支度もある。しかし太子堂の奥座敷にはゆったりとした時間が流れていた。

そこには主の長兵衛と娘の夏穂、そして上座には春貞と幸江そして南町奉行所の与力佐竹弥五郎と同心伊丹鉄太郎の姿があり、廊下側には大番頭富吉も座していた。

「佐竹様、この度はまことに御店はもとより一家の命をお救いいただき御礼の言葉もございません」

長兵衛は両手を突き深々と頭を下げた。

「いや、それがしは何もしておらん。春貞どの、永井幸江どの、そしてここにいる伊丹らが働いてくれたおかげよ。しかし事前に押し込みを察することができたのは町方の日々探索の賜物でもある。これから厳しい取り調べが始まるが、奴らは先般音羽町の質屋を襲った者たちのようじゃ。へたをしたら大事になるところ

だったがよかった、よかった」
佐竹は機嫌がよかったからかいつもより饒舌だった。
「まことに春貞さまには二度にわたり命をお助けいただきました。この通りでございます」
長兵衛は思わず両手を合わせて春貞を拝んだ。
「おいおい、長兵衛さん、よしてくれ。今回のことは金杉の定吉親分の手柄だ。俺は高みの見物をしてただけよ」
と春貞は苦笑してから、
「それにしても大番頭さんは顔色ひとつ変えず、よういつものように御店を切り盛りしてしてくれた。だからこそ悪党たちも油断したに違えねえ。いや大したものだ」
と富吉を褒めた。
大番頭の富吉はただただ春貞たちに頭を下げるばかりだった。
「そういえば佐竹さま、あの割り符と思われる将棋の駒の件も気になります。引き続きのお調べをお願いいたします」
「春貞どの、承知しており申す。ともかく被害がなくてよかった。それがしはお

奉行への報告が残っておるでな。これで失礼いたそう」
与力の佐竹は自分がいては座が落ちつかんことを察してか早々と帰っていった。
その佐竹の後ろ姿を腰を折って追いながら伊丹は、
「春さんのいうとおり、あれが割り符であるならいまひとつ重大な事件が隠されているかも知れんからな」
呟きつつ出された茶で喉を潤した。
こうして春貞たちの享保八年は暮れようとしていた。

養生所も新年の準備は質素ながら整っていた。
「八重さん、今年の生花は実に華やかでよいな」
賄中間の八重が玄関の一郭に大ぶりの花器を前にして花生けに精を出していた。
「春さん、確かに昨年と一昨年はあたしが薬園で摘んだ花だったがね、今年は赤ひげ先生がさ、あたしに一朱を握らせてくれてさ、花売りから良いと思うものを揃えろといいなるのには驚いたよ。養生所は儲かっているんかいな」
と笑った。
無論八重精一杯の冗談だったが、心底嬉しそうだった。

「これでさ、新玉の年が迎えられるよ」
八重の声を背に聞きながら春貞は来る年のあれこれを考えていた。

五

享保九年、新年の挨拶を兼ね、仲人を願った小石川養生所肝煎、小川笙船と共に市谷尾張藩江戸上屋敷内にある永井主水の私邸に座していた。
春貞は髪は文金風、無紋の黒い小袖に同じくかすかに横縞の織りが見られる羽織を着し、帯には父徳川綱誠形見の粟田口吉光作だと伝えられる脇差しを帯びていたが相変わらず首には椿の花が描かれた手ぬぐいが巻かれていた。
主水は満面の笑顔で二人を向かえた。
同席の幸江も刺繍でなった美しい小紋の小袖で同席し、いささか上気していた。
それはこの日、春貞が幸江との婚姻を正式に表明する日だったからだ。
「ご家老さま、新玉の年おめでとうござる。本日は結納以前のお話しで恐縮じゃ

が、春貞どのが同席せよと強く願いますのでついて参った次第…」
「いや、笙船先生は仲人以前にそれがしの父と思っていますのでご一緒をお願いしました」
春貞の言葉に主水は嬉しそうに頷いた。
「つきましてはご家老さま、本日は春貞が娘御幸江さまを嫁に迎えたいと申すのでな、仲人ならびに父親役としてお願いにまいりました」
「笙船先生、堅苦しいご挨拶は我々の間では不要じゃ。なにしろ娘を貰ってくれと春貞どのに迫ったのはこのわしじゃからのう」
主水と笙船は声を上げて笑ったが、さすがに春貞は神妙にしていた。
「春貞どの、繰り返すがこいつの夫はお主しかおらんのじゃ。じゃじゃ馬故気にそぐわんところもあろうがそのときは遠慮なく叱ってくれ。そして末永く可愛がってもらえんだろうか」
と御三家筆頭格の尾張藩江戸家老が頭を下げた。
「ご家老、お手を上げてくださりませ」
春貞がはじめて口を開けた。
「それがしとて、禄を食んだ侍ではございません。いわば浪人同然の風来坊。本

来なら尾張藩江戸家老さまの娘御を嫁にと願うことが許される男ではございません。しかし先のお家の一大事の際、俺は…いやそれがしは自分が考えていた以上に幸江を、幸江さまを愛しく思っていたことを思い知りました。いく久しく共白髪まで仲良く過ごしていきたいと存じまして本日笙船先生と共に婚姻のご許可をいただきにまいりました」

いつもとは違う春貞の振る舞いに主水は感激し、ただ大きく頷くばかりだったが隣に座していた幸江はそこだけに光が当たっているかのように美しく輝いていた。

笙船は別途ご相談の上で結納および祝言の日取りを決めたいと申し出て永井主水の私邸を後にした。

帰りがけに主水は、

「娘からも祝言は慣習に拘らず簡素にしたいといわれておる。その言いたいことは頭の固いわしにも分かっているつもりじゃ。したがって春貞どの、お主たちに任せるしかないが、わしが隠居ならともかく承知のとおりでな。嫌な話しだが廻りの目もあるし藩士たち同胞への手前もあるのじゃ。そこも考えてくれまいかのう」

切々と思いを訴えた。
笙船と春貞は頭を下げて辞した。

市谷尾張江戸藩邸を後にした春貞と笙船は肩を並べて養生所に向かった。
「春さんや、こうしてお前さんと一緒に歩くなど久しぶりだのう」
どこか遠くをみるような笙船の眼差しだった。
「俺が好き勝手にさせてもらっておりますので、先生のお役に立てず心苦しく思ってます」
春貞のものいいを押さえるように、
「いや養生所もそしてわし自身もな、お前さんのおかげで随分と良い思いをさせてもろうておるではないか。あの五〇〇両といえな…」
笙船は昨年末、尾張藩お家騒動を春貞が未然に防ぎ、幸江の命を救ってくれた礼にと金子五〇〇両を永井主水が笙船の前に差し出したことを思い出させたのだ。
「それにな、本来養生所は町奉行所の管轄下にあり医療の日常は本来地味な勤めの繰り返しじゃ。しかしお前さんのおかげで公方様や大岡様は勿論、市井の大店の主たちとも親しく言葉を交わせるようになった。いわばわし自身の視野とて大

きく拡がったと感謝しておるのだ」
春貞は無言で頭を下げた。
「一度な、近々機会を作り、お前さんたちの祝言をどうするか皆で話しあおうぞ」
笙船が言い切ったとき、脇道から飛び出した若い銀杏髷の男が笙船の肩にぶつかった。
「おっと、じいさん目を開けて歩きやがれ」
とほざいたが、笙船は男の小袖を握りながら、
「人のことよりまずは財布を返してもらおうかな」
と落ち着いていった。
「ちっ、気がつかずにいたら怪我をしないで済んだものを」
男は笙船の手を振り払うと同時に懐から匕首を抜いた。
「最近のガキはいっぱしの悪ぶってやがるが喧嘩のしかたも知らねえようだな」
春貞の一言にかっとなって男が春貞に視線を向けた刹那、笙船の右足が男の股間を蹴り上げた。
仰け反った男は匕首を取り落とし、そのまま白眼をむいて地べたを転げまわっ

た。
春貞はその懐から笙船の財布を取り戻しながら、
「先生、お医師が怪我人を作ってよろしいので」
片目を瞑りながらそういうと笙船は、
「まあ、あまり誉められたことではないがな、これも成り行きじゃ」
と苦笑いした。
「今日は俺にとって目出度い日だ。見逃してやるからこれに懲りて馬鹿はやめにしな」
春貞はそう蹲っている男に言いながら笙船と再び肩を並べて歩き始めた。

第二章　春貞の秘密

一

この日も春貞と幸江は朝から相変わらず小石川養生所にいた。といっても医療の手伝いではなくもっぱら薬園側の空き地で剣術の稽古に専念していた。
二人の廻りには桜が咲き始め、怪しげなほどに美しい風情を見せていた。
「幸江、世辞ではないが本当に腕があがったな。そこいらの二本差しでお前にかなう者などすでにおるまい」
嬉しそうに顔を上気させた幸江を春貞は心の底から愛しいと思った。
（俺は風来坊。特に世の中への役目もない。幸江を一生守って暮らすのもよいかも知れぬ）
などと春貞は考えるようになっていた。
「でも師匠、いまだに春貞さまに一度も勝てた例がありません」

顔を上げた幸江は持ち前の勝ち気な表情を見せた。
「いや、このまま精進すればいずれ俺の上をいくやも知れんぞ、幸江」
春貞が汗を拭いながらいうと幸江は、
「春貞さま。わたしは…幸江は嫁に行っても剣術を続けてよいのでしょうか」
と春貞を仰いだ。
「無論だ。俺はお前にそこいらの武家の妻のように生きて欲しいなどとは考えたこともない。いずれはお前と二人、小さな町道場でも建てて静かに生きていければそれで満足だ」
幸江は思わず袋竹刀を持ったまま春貞に抱きついた。
「嬉しい」
幸江は春貞の胸で泣いていた。

養生所での朝餉はいつものように小川笙船らと慎ましやかな箱膳を囲んだ。
朝餉が終わった頃、南町奉行所同心伊丹鉄太郎が定吉の子分金次を連れて現れた。
伊丹は先般の太子堂への押し込み犯について春貞へ報告にきたという。

「忙しい八丁堀の旦那だ。俺などへの報告など無用なのに」
と言いながらも春貞と幸江は伊丹同心の話しを四半時ほど聞くことになった。
昨年末捕縛された賊は質屋へ押し込んだ同じ一味と判明し、年末ぎりぎりまで荒稼ぎした上で上方に飛ぶ予定だったという。
どうやら上方から江戸に出て初めての押し込みがあの質屋だったらしい。
「ただし春さん。やはりというかこのまますべて目出度しというわけにはいかないようなのだ。それに少し動きもあってな」
伊丹はちょっと困惑の表情をした。
「例の割り符の件ですな」
春貞の問いに伊丹は、
「うむ。押し込み犯の奴らだが、あらいざらい自白した者はまだいないのだ。幸江さんにやられた頭とみられる野郎はしぶとくてな、拷問にも耐えてやがる。しかし僅かに漏らした話しをまとめるとな、江戸で仕事をするはめになったのはこの江戸在住の商人がからんでいるようなのだ」
春貞と幸江は話しの前後がわからず無言でいた。
それを察したのか金次が伊丹の顔色を伺いながら口を出した。

「旦那方のお調べでは、あの上方から来やがった悪党たちはその商人が抜け荷買いするための資金集めをさせられたと見ているようなんで」
「というとあの者たちの黒幕はその江戸の商人だというのですか」
幸江が声をあげた。
それに伊丹らがやってきたのにはもう一つ重要な進展があったからだという。それは過日例の守り袋を預けた瓦版屋の読売浅太郎のところにこざっぱりとした商人風の男が現れたという。
「もう奴らは現れないかと一時は浅太郎から守り袋を返却させようと思ったが、定吉がいましばらくこのままにしておきたいと強く願うのでな、そのままにしておいたが親分の感が当たった…」
伊丹の話しをまた金次が繋いだ。
「あれからずっと親分の指示どおりあっしらは交代で浅太郎宅を見張っていたんで。で一昨日のことですが、商人風の若い男が『拾ったという守り袋は自分の母親が縫って首にかけてくれた大切なもの。見つけてくれてありがとう』といって一朱を浅太郎の手に握らせたと思いなせい」
「無論後をつけたんだろうな」

「へい。俺っちはそれが一番のお務めですからね。万一にも逃がさないように三人で別行動しながら追いましたで…」
金次は得意そうに鼻を動かした。
男は注意深く何度も後ろを振り向きながら入っていったのは両国の骨董商伊勢屋友三のお店だったという。
「おっ、守り袋にあった名も『ともぞう』だったな。ということは伊勢屋が黒幕か」
春貞が呟くと伊丹は、
「状況から考えてそうだろうと睨んではいるが抜け荷となれば決定的な証拠が欲しいし、荷をさばく側も捕らえたい。いましばらく慎重に探索を続けるつもりだ」
伊丹はそう言いながら立ち上がった。
「伊丹さん、この後なにか急なお役目があるんですか」
春貞にしては珍しい問いに伊丹は、
「いや…実は今日は本来非番なのだ。無論俺たちのお役目は小難しい決まり事をいっては勤まらんがな」

と応えると春貞は、
「それは都合がいい。伊丹さん、幸江と一緒にこれから俺と付き合ってくれないか」
と願った。
金次は伊丹の命で戻るように言われ養生所を後にした。
「さて、春さん、どこか行く当てでもあるのか」
伊丹の問いに春貞は、
「よい機会だ。伊丹さん、幸江。俺の屋敷へ一緒に来てくれないか」
と誘った。
幸江ならずとも伊丹も息をのんだ。
「は、春さん。お前さんが何者なのかは知ったつもりだったが、これまでどこに住み暮らしているかは俺たち八丁堀も知らなかったぜ。変ない方だが、屋敷があるのか」
「風来坊に住処があってはおかしいですかな」
春貞はにこにこしながら応えた。
「承知のように俺の出生は父の親戚筋にとって歓迎できないものだったから、誕

生と共に御連枝と呼ばれる松平姓の分家に預けられ乳母に育てられたんだ。俺もあえて自分の秘密をほじくり返そうと思わなかったが、幸江が俺の女房になってくれるという…」

伊丹が思わず隣に座す幸江を見ると、幸江は嬉しさを隠せずに顔を赤くし下を向いた。

「それはそれは目出度いな春さん、幸江さん」

伊丹の祝福を受け春貞は、

「でな。所帯を持つともなればお互い隠し事があってはならない。俺の暮らしがどういうものであるかを知ってもらわなければ御家老に申し訳がたたんだろう。なあ伊丹さん」

伊丹は頷きながらも、

「その春さんの律儀なところが俺も好きだがな。まあまだ独り身のそれがしには男女の機微はわからんな」

と笑いながら、

「話しは分かった。しかし幸江さんは当然だが、不浄役人のそれがしも一緒についていってよいのか、春さん」

伊丹同心はそう気遣いを見せた。
「俺は伊丹さんを生涯の友だと思ってる。その友に一緒に来て欲しいと頼んでるんだ」
春貞の物言いに年上の伊丹は言葉を詰まらせ青空を仰いだ。涙が溢れるのを見られたくなかったからか。
男二人のやり取りを幸江は好奇なものでも見るように感動しながら眺めていた。

二

三人は「竹屋の渡し」から小船で隅田川を渡った。
享保年間のこの頃、大川と称された隅田川に架かっていた橋は僅か四本で、千住大橋、両国橋、新大橋そして永代橋しかなかった。その主な理由は防備上の関係で橋の架橋が制限されていたからだ。したがって市街地を南北に分断する隅田川を効率的に渡河するためには渡し舟を利用するしかなかった。

「竹屋の渡し」は山谷堀から向島三囲(みめぐり)神社を結んでいたが、そのこぢんまりとした三囲神社南側の奥まった竹林の陰に整った平屋が見えてきた。

ちなみに、三囲神社は現在も東京都墨田区向島に現存する神社だが、祭神は宇迦(うがの)御魂之命(みたまのみこと)だという。

後に「越後屋」を開く松阪の豪商三井高利が寛永十二年（一六三五）江戸に進出すると享保年間に三囲神社を江戸における守護社と定めた。

それは三囲神社のある向島が三井の本拠である江戸本町から見て東北の鬼門だったことと、三囲神社の「囲」の文字に三井の「井」が入っているため「三井を守る」と考えられたからだという。

ともあれ、春貞の屋敷である。

小さな茅葺きの門の戸を開けながら春貞は、

「沙代(さよ)、俺だ。客を連れてきたぜ」

と声を上げた。

伊丹は物珍しそうに、あるいは仕事柄なのかあたりを見回している。

その刹那、老女が現れ、
「春どの。我が家をお忘れではありませなんだか」
と笑顔を見せた。そして伊丹と幸江に挨拶しつつ、玄関に誘った。
「沙代、こちらは南町奉行所同心伊丹鉄太郎どの、そして永井幸江さんだ。そして伊丹さん、幸江。俺の乳母、沙代だ。よろしく頼む」
春貞が紹介の労をとった。
「沙代、今日は例の件で二人をお連れした。手筈を頼む」
そういいながら屋敷に上がった。
伊丹と幸江は驚いたというより息をのんだ。
春貞の乳母だという沙代を眼前にして二人の心をうったのは老女の端正な美しさであった。
我々は女を見るとき、どうしてもその美醜を心に入れがちだ。したがってその外見からすべてを判断しようとし、老いた女性より若い女性の方に美を感じる生き物である。
そして歳を取り皺を重ねた表情から若かりし姿を思い浮かべがちだが、沙代はそのままで、五十の半ばを過ぎたと思われるその姿のままでお婆さんと呼ぶのをた

めらうほどに美しかった。
髪はほぼ白髪、小柄だが腰は伸びて大変しっかりした足取りだったし身のこなしやその話しぶりに育ちのよさが感じられた。
幸江は自制しきれずに思わず、
「お綺麗なお方…」
と声をもらした。
沙代は右手を口元に運び微笑みながら軽く頭を下げた。

伊丹と幸江は沙代に案内され客間に通された。
続いて入ってきた春貞は、
「今日は二人にいろいろと聞いて欲しいことがあってな」
と笑顔を見せた。
「いや、春さん。俺たちに聞かせるあれこれの前に俺たちに聞きたいことが山ほどできたぜ」
伊丹は幸江と顔を見合わせながら苦笑した。
「春貞さま。ここはいったい、どなた様のお屋敷なんでしょうか」

幸江は少々混乱気味に問うた。
春貞が応える前に伊丹は、
「幸江さん、そりゃあ決まってるでしょう。先ほど春さんが言ったとおりここは春さんの屋敷だ」
同意を求めるように二人は春貞を注視した。
「まあまあ、今日はゆるりと俺の秘密を聞いて貰うからまずは茶でも飲んでくれ」
その声に合わせたように沙代が小女と共に茶と茶菓子を運んできた。
小女と共に出て行こうとした沙代を春貞は制し、
「沙代、一緒に話しに加わってくれ」
と願った。
沙代は嬉しそうに頷きながら春貞の隣にちょこんと居住まいを正した。
「春どの、どうやらやっとこの婆(ばば)を安心させてくれるお話しのようですね」
笑顔でそれに応えた春貞は、
「沙代。時節はまだきまっておらんが、俺はここにいる幸江と祝言をあげること

にした。ついてはこれまでのように風来坊を気取っているわけにもいかない。一緒に俺という男がどの程度の馬鹿者なのかを二人に話してくれないか。隠し事はなしだ」

「まあ、それは吉報。婆は嬉しゅうございます」

沙代は早くも目に涙を浮かべ、幸江は面を伏せた。

「伊丹さん、幸江。二人のことはすでに沙代には話してあるから気楽に相談に乗ってくれ」

春貞は足を崩して座した。

「わかった。俺の方からいろいろと聞いてよいかな。問いただすのは役目柄慣れているでな」

伊丹の顔にやっと笑みが浮かんだ。

春貞の頷きに伊丹が待ってましたとばかり身を乗り出し、

「まずはだ。春さんとこちらの沙代さまとの関係からお聞かせていただきましょうかな」

そう言うと隣に座っている幸江も頷き沙代は、

「それではこの婆からお話しいたしましょう。春どのご自身では申し上げにくい

こともあるかと思いますからね」
と断り話しを始めた。
沙代は春貞の乳母だという。春貞の実の父は尾張三代藩主徳川綱誠だが、市井の女との間に春貞が生まれた直後、母は産褥熱が悪化し急逝したという。
父綱誠は、というより尾張藩は後のお家騒動を避けるため春貞を綱誠の実子と認めず尾張徳川家御連枝と呼ばれる松平姓の分家に預け育てることにした。あくまで尾張藩とは縁のない子として。
「その分家とはどちらなのだ春さん」
伊丹が当然の疑問を口にした。
「川田久保松平家初代当主の松平友著（ともあき）の家だ。とはいってもその屋敷で育ったわけではないがな。まあ、以前話しを聞いて貰ったと思うが、俺は父から捨てられたんだ」
春貞は遠くを見るように庭木に目を移しながら応えた。
沙代はそれを否定するように首をゆっくり左右に振りながら話しを続けた。
松平友著は尾張藩第二代藩主徳川光友の十一男であり、宝永三年（一七〇六年）

十一月二十三日、川田窪に屋敷を拝領したことから川田久保松平家初代当主となった。

「春どのが松平姓をお名乗りになる所以でございます」

沙代がどこか誇らしげに言い切った。

奥女中であった沙代は主の命で春貞の乳母となり、その後は実の母以上に春貞を守り慈しみ育ててきた。

「俺は生みの母はまったく知らねえ。沙代の乳で育ったんだから沙代が母だと思ってるし、いまだに頭が上がらねえ。まがりなりにもいまの俺があるのはこの母のおかげよ」

春貞は照れ隠しか言葉が伝法になった。そして沙代は母と呼ばれたからか、ぱあっと面を上気させた。

「春どのは一時、友著さまのお子、代五郎さまと兄弟のようにお育ちになりました。いまでもお会いになれば代五郎さまは春どのを兄様とお呼びになられます。代五郎さまも幼少時は御祖母の縁者、鈴木重兵衛様のもとで養育され、その後も御身分の低いお役人の下で青年になるまで過ごされたこともありまして春どのと馬が合ったようでございます」

ちなみに大分後の事になるが、現尾張六代藩主徳川継友の後を継いだ七代藩種宗春が元文四年（一七三九年）正月十三日、将軍徳川吉宗によって強制的に隠居させられると幼名代五郎はその後を継ぎ、尾張八代藩主となり徳川宗勝（むねかつ）と名乗る。

春貞は懐かしそうに、

「しばらく代五郎に会っていないが、奴は市井の暮らしが…民の生活がどのようなものかをよく見知っている。もしあやつが藩主にでもなればきっと名君になるだろうよ」

と両手に茶器を包みながらいった。

「春どの十五歳の夏でしたか、友著様が大名格として江戸城に出仕を命ぜられた際にそれをきっかけに春どのは尾張を離れ、この江戸で生きることを望まれましてございます」

沙代の話しに被せるように伊丹同心は、

「段々それがしなどには雲の上の話になっていくようだが、その友著さまというお方は偉えのかい」

「はい。享保二年十二月十八日(一七一八年)には従四位下を賜り、公方様はこの後に何度か松平通春（徳川宗春）様と共に、諸行事の参列や鷹狩の獲物の下賜などの際に御連枝として特別扱いされておるお方でございます」

「ふうん」

伊丹はそう応えるしかなかった。

「しかし、沙代さま…」

伊丹がなにか言いたそうにすると沙代は、

「伊丹さま、婆でようございます」

と美しい笑顔を伊丹に浴びせたが、思わず伊丹が頭を下げるほどの気品を漂わせていたから伊丹は言うべき言葉を飲み込んだ。

代わりにそれまで静かに聞いていた幸江が口を開いた。

「では春貞さまは本当に尾張とはいまご縁がないのでございますか」

「はい。そうしたことを明らかにされないとお嬢様もご不安でございましょうな」

沙代はそういいながら続けた。

春貞は神妙にしている。

「これから婆の話は春どのも知らないことがあるやも知れません。たとえばこの屋敷や我が家の生計（たっき）などのお話しにございます」

当屋敷は春貞らが江戸に出てきたとき、友著が依頼したのだろう、日本橋両替商の大店（おおだな）「相模屋」の主が整え、お好きなようにおつかいくださいと用意してくれたものだったと沙代が話したとき、春貞の顔色が変わった。

「どうされました春貞さま」

察した幸江が問うた。

春貞はそれには応えず、

「話の途中で済まないが沙代。日本橋の両替商相模屋とは清右衛門が主のお店（たな）か」

と聞いた。

「はい」

沙代の頷きに春貞は伊丹と顔を合わせた。

春貞の懸念に気づいた伊丹は、

「春さん、得田新之助様を襲ったという浪人が書き残した文にあった両替商が相

模屋だったな」
「そうなのだ伊丹さん。ともあれこれで相模屋を訪ねる口実ができたな」
そう言いながら、
「すまなかった。沙代、いや母上、話しを続けてくれ」
春貞が願った。

沙代の話しによれば、当屋敷の生計は父徳川綱誠が城に出入りを許されている札差と両替商に春貞らが終生困らないだけの金を与えて運用させ、その元金一部と利息を含む額が毎年二度決まった時期に為替で先の「相模屋」に送られてくるのだという。
「あのう、失礼だがそれはやはり尾張の禄を食まれていることではありませんかな…」
伊丹が問うた。
沙代は微笑を絶やさず、
「ここからは春どのもご存じないことだと思いますが」
と断りながら突っ込んだ話しを始めた。

まず尾張藩としては春貞の存在は幕府や世間に隠しておきたいという意図があったこと。そしてなによりも物心ついた春貞が藩に縛られず市井の人間として暮らしていきたいという意志が強かったことから生まれた結果だ。

春貞が誕生してから二年あまりの後に父徳川綱誠は亡くなった。その後、綱誠が託した友著の元で不自由なく育った春貞をどう扱うかが問題となった。

結局乳母であり育ての母である沙代の願いが通り、春貞は江戸で尾張藩とは無縁の男として生きることが許され、沙代にも裏の裏は不明ながらこの屋敷で暮らす十数人の生計がなりたつようにと尾張の両替商と札差に命じ年に二度為替で金子を江戸へ送るべく計ったのだ。

「ということは、金は尾張から出ているのではなくあくまで商家が商いとして請け負ったということになるのかな」

伊丹同心が首を傾げた。

「はい。当屋敷、すなわち松平春貞どのの生計は尾張の札差近江屋と両替商井筒屋から出ておるのです。お役人様にはご不審かも知れませんが」

「いやいや、不浄役人のそれがしがどうのこうといえることではありませんでな」

伊丹が慌てて繕った。
「伊丹様。実は一度私が国元の両店へ文で問い合わせたことがございます」
伊丹と幸江だけでなく春貞も初耳だったようで沙代を見た。
「春どのに送られてくる為替の額を知らせたことは一度もなかったはずですが、この屋敷を維持し私共の生計を成り立たせるには余る額です。したがってこれまでの蓄財および私自身がお暇をいただいた折りにいただきました支度金もございますので今後はお断りしたいと申し出たのです」
しかし、札差近江屋と両替商井筒屋ともに一連の送金は尾張藩から預かったものをお送りしているのではなく、春貞の父徳川綱誠の命により藩ではなく綱誠個人から遺言として託されたもので、両店は許諾を受けその一部をこの二十年余り資本として商いに投資し成功しているという。この屋敷を整える資金もその中から出たもので、決して尾張藩に強制されているわけでもなく綱誠様のご意志を受け継いでいるだけだから断られても困る…との返事だったという。
「なるほど、お父上としては尾張の血を否定せざるを得なかったせめてもの罪滅ぼしというおつもりだったのかも知れませんな」
伊丹が唸った。

「ほう、我が屋敷は貧乏だと思っていたが…」
春貞が苦笑した。
「春どの。したがいまして春どのが幸江さまとご一緒になられても贅沢をお考えでなければ生計に心配はございません」
沙代が言い切った。
「あのう」
幸江がおずおずと、
「それに父もいくばくかの持参金をと仰せでした」
「嫁の持参金をあてにするつもりはないが、これまたありがたいことよ」
春貞は伊丹と幸江を交互に見ながら真面目な顔で呟いた。
「沙代。ということは俺は本当に尾張藩に借りはないのだな」
「勿論でございますとも。とはいえ春どのは歴(れき)とした徳川綱誠様のお子。綱誠様のご意志とは些か違ってまいりましたが、それは尾張現藩主継友様らもご承知、お認めのことです。というわけで春どのは尾張の禄を食んでいるわけではございませんが、嫁御となられる幸江さまは御三家筆頭格の尾張藩に縁があるお方。そ

して春どのは畏れ多くも公方様のご家来であることには間違いございません。いざ鎌倉という際にはせいぜいお役にたつよう踏ん張りなされ」
といいつつ沙代はあらためて春貞の方に向き直り、
「それから、我が屋敷は小ぶりながら土地はまだまだ余裕がございます。春どのがお望みならお二人のためのお住まいを新造されるのもよろしいかと思います」
といったが、春貞は、
「いや、俺も四六時中ここにいられる身ではあるまい。せっかく新しい家族ができるのだ、母上もこれまでどおり一緒にいてくれ。ただし時期が来たら裏庭の奥で良い。小さな剣術道場を建てたいと思っているがな…。うむ、それはともかく今日から沙代、母上とよばせてもらおう」
その言葉に沙代は流れる涙を拭うともせず、
「もったいないことでございます。春どの、婆は長生きした甲斐がございました」
と泣いた。
「ところで母上。先ほど渡しを使ってここまできたのだが、我が家の使用人に舟を扱える者はおらんかったかな」

春貞は最短距離でこの屋敷を行き来するには橋を利用するのは不便だと考え、舟を扱える者がいるなら、遅ればせながら小舟とそれを繋ぐ場所を用意したいと申し出た。

「舟でしたら料理人の富四郎が上手ですよ。魚を捕るのもさばくのも一流ですがね」

「そりゃあ都合がよい。では 富四郎に言いつけてな、我が家の渡し場を作ろうぞ母上」

春貞が上機嫌でいった。

そのとき廊下に静かな足音がして小女三人が箱膳を持ってきた。

「少し早いかも知れませんが是非夕餉をご一緒してくださいませ」

沙代は眼を赤くしたまま願った。

伊丹は眼前に列べられていく膳を見て、

「これは凄い。おい、春さん。お前さんはいつもこんな凄いご馳走を食しているのか」

と叫んだ。

「馬鹿いえ。俺もいつもは承知のようにあの養生所の飯だ。こんな料理、我が家

では見たことないぜ。いや一度国許の正月に列べられたことがあったか…」
春貞はもとより御三家筆頭の尾張藩江戸家老の娘である幸江も目を見張った。
「十二町ほど先に料理屋が二軒ございますので、本日は特別にそこの料理人に注文を出しましてな、先の富四郎と共に腕を振るってもらいました」
沙代がにこやかに手の内を明かした。
本膳は、蕪風呂吹、大根・干鮹・牛蒡の煮付け、香の物と飯盛りがそれぞれの椀に乗っていた。そして二の膳には鱈と昆布の汁物、貝柱・生海苔・うどの猪口と別の膳には小鯛の焼き物が並んでいた。
「母上、酒もあるんだろうな」
春貞の問いに沙代は、
「今日は内祝いのつもりでございますからささも用意してございます」
といったとき、早速銚子が数本列べられた。
「本来なら私は遠慮すべきでしょうが、春どの、今日はご一緒に膳を囲んでよろしゅうございますか」
と言いながら早くも自分の膳の前に座った。
「無論だ、是非そうしてくれ」

春貞も嬉しそうにいったとき、
「春さん、こりゃあ高級料理茶屋でも食せんぞ。やはり大名の祝いの膳かのう」
伊丹が感嘆しながら呟いた。
沙代が春貞の杯に酒を注ぎ、小女が伊丹同心と幸江の杯を満たした。
その後、春貞は徳利を沙代から受け、
「母上もまずは一献」
といいながら酒を注いだ。
伊丹の待ち遠しいという顔を笑いながら眺めた春貞が、
「さあ、ここからは遠慮なくやってくれ。俺も我が屋敷でこれほどの飯が出てくるのを始めてみた。腹が鳴ってるぜ」
「まあ、春どのお行儀がわるい」
「美味しい」
「いい酒ですなあ」
四人の宴はまだ始まったばかりだった。
そして宴は暮れ四つ近くまで続いた。
伊丹は春貞が「泊まっていけ」と勧めるのを非番とは言え役目柄だからと、ほろ

酔い機嫌で一人役宅へと帰って行ったが、幸江は沙代の熱心な勧めもあって春貞の屋敷に泊まることになった。

「私の母は物心つく前に亡くなりましたので記憶も曖昧です。しかし今日幸江に母ができました。今夜は母上とご一緒に床を列べて寝とうございます」

殊勝な幸江のものいいに沙代はまたまた涙を流した。

翌朝、春貞と幸江は沙代が用意してくれた朝餉を食した後、春貞の屋敷を後にした。

玄関で名残惜しそうに沙代と幸江はなにか小声で言葉を交わしていたが、深々と頭を下げた幸江は踵を返した。

春貞は、

「母上と秘密の話しかい」

と冗談に言うと幸江は、

「いえ、婚礼の衣装を近々決めに行こうとのお話しでした。あの太子堂の奥様がご一緒に見立てて下さるようです」

「ほう、長兵衛の女房も外歩きできるようになったのか。それは目出度い」

「春貞さま、春貞さまもご一緒されますか」
幸江の誘いというか願いを含んだ物言いだったが春貞は、
「いや、俺はからきしそういったことは分からん。足手まといになるだけだからここは母上とお糸さんにお任せしよう」
そういうと、その答えが分かっていたように幸江は笑いながら頷いた。
「ところでこれから俺は養生所に行くがお前はどうする」
春貞が聞いた。
その時、藪の奥で言い争いの声が聞こえた。続けて悲鳴があがったとき幸江は瞬時に竹藪の中を走っていた。
見れば三囲神社の拝殿前で身なりの良い老人を痛めつけ懐のものを奪おうと人足風の男二人が老人の胸ぐらを掴んでいた。横にはすでに殴られたのか口から血を流している手代風の若い男が気を失っていた。
「おう、話しのわからんジジイだな。懐のものを素直に出せば痛い目に合わなくて済むものを…」
と右手が上がったとき、
「やめなさい」

飛び込んだ幸江が男の腕を掴んで老人から引き離した。
「このあま、余計な事をしやがるとタダじゃあすまねえぜ」
女と見て侮った二人が腕まくりしながら幸江に飛びかかった。
刹那一人は刀の頭を鳩尾(みぞおち)に受けて悶絶し、一人は首筋に手刀を喰らって神社の石段に吹っ飛び気絶した。
竹藪から頭を掻きながら出てきた春貞は、
「またまた俺の出る幕はなかったな」
と呟きながら唇の端を切ったか、血を流して倒れていた若者に活を入れた。
気がついた若者は、
「だ、旦那様ご無事で」
と叫びながら泣き始めた。
春貞は、
「大事がなくてよかったですな」
と老人に声をかけた。
深々と腰を折った老人は、

「危ないところをお助けいただきありがとうございました。手前は越後屋の隠居、三井八郎右衛門と申します。我が御店の守護社であるこちらにお参りに伺ったのですが、ご覧のような目に会いまして。本当に本当に助かりました」
と幸江と春貞に交互に何度も頭を下げた。
「あら、駿河町の越後屋さんのご隠居様でしたか。わたしたちもこれから大川（隅田川）を渡りますのでそこまでお送りいたしましょう」
幸江の申し出に老人は喜びながら、
「失礼ながら、お名前をお聞かせくださいまし」
と問うた。
幸江がどうしたものかと春貞を仰ぎ見ると春貞は、
「われらはそこの屋敷に住む者でな、ここいらは庭みたいな場所なのだ。気を遣わんでくれ」
といいながら三囲神社に拝礼して背を向けた。

三

その翌々日、春貞は南町奉行大岡忠相の許可を受け、伊丹同心と共に日本橋の両替商相模屋の主清右衛門を訪ねた。

あれから随分と経ったが得田新之助…いや、八代将軍吉宗を襲わせた本当の黒幕には一向にたどり着けないでいた。

そもそもこの探索には大変やりづらい要素が多すぎた。

その一番は得田新之助が市井で二度も襲われた事実は事実として、八丁堀の与力や同心たちから疑問の声が上がっていた。

「確かに旗本のご息子が襲われたとしてもだ、なぜにこのような大がかりで執拗な探察をお奉行は命じらるのか」

ということだった。

どこの誰が襲われたのかを知らされないまま動き回ることができるはずもない。

そこで大岡忠相は意を決して得田新之助は八代将軍吉宗その人だという事実を初

めて与力同心たちに打ち明けた。
与力や同心たちはもとより定吉ら岡っ引きたちも度肝をぬかれたが、それを知ってからの彼らの探察はより身が入ったものとなっていく…。
とはいえ将軍吉宗はともかく、得田新之助を知っているのは南町関係でも大岡は当然としても、後は喀血した刺客を養生所まで運ぶ際に同行した伊丹同心と定吉親分、そして手下の金次しかいなかったのだが…。

話しを相模屋に戻そう。
春貞は昨日沙代から聞いた自分宛の為替送金についても詳しく聞きたいと考えていたが、それと共に八代将軍吉宗を襲った刺客が死の床で小石川養生所の肝煎である小川笙船宛に書き残した「依頼主は相模屋主清右衛門」という遺言とも受け取れる書状について相模屋を詰問しようとその書状を笙船から預かり懐に忍ばせていた。
両替商相模屋はやはり大店であった。
この日の春貞はいつもの着流しに首巻き、そして無腰だったが伊丹同心は些か緊張気味の体で春貞の後ろから店に入った。

「ごめん。俺は松平春貞だが主、清右衛門と話しがしたい。取次を頼む」
と出てきた手代にはっきりとした口調で願った。
やはり松平という姓が効いたのか、早々に番頭が現れ二人を奥座敷へと誘った。
まもなく清右衛門が入ってきた。
相模屋清右衛門は歳の頃なら五〇前後か、髪にはすでに白いものが混じっていたが背筋が伸び威風堂々とした人物だった。
「これはこれは、お初にお目にかかります。手前が相模屋清右衛門でございます」
と両手をつき、二人を上座へと誘った。
春貞も伊丹も逆らわずにそれに従い、立派な床の間を背に座した。
「主人（あるじ）。商いの邪魔をするつもりはないが、今日は些か込み入った話なのだ。聞いてもらえるかい」
春貞は磊落にいいつつ、
「こちらは南町奉行所同心伊丹鉄太郎どのだ」
と紹介した。

主清右衛門は顔色ひとつ動かさずに、
「これはまた、ご苦労様でございます。手前どもになにか落ち度がございましたか」
と切り出した。
伊丹は春貞と目配せし、
「主人、端的に話しをする。実はな、とある旗本の御子息が昨年市中で襲われたと聞いてくれ。途中の話しは端折るが、その刺客の親玉が死ぬ間際に自分に殺しを依頼したのは日本橋の両替商の主、相模屋清右衛門だと書き残したのだ」
春貞は懐からその遺書ともいえる書き置きを開いて畳みに置いた。
清右衛門は狐につままれたような顔をし両眼を見開いたが、春貞と伊丹にはそれがまんざら芝居とは思えなかった。
「手前が殺しを依頼したと申すのですか、お役人さま」
清右衛門の声はさすがに些か震えていた。
「いや、お前さんを問答無用にお縄にするつもりはないが、事情の一端でもたぐりたいとこうしてやってきたのだ」
伊丹の物言いに清右衛門は落ち着きを取り戻したようで、姿勢を正して座り直し

た。
「お役人さま。手前の名を書き残したお人はお侍さまなのですか。手前にはまったく心当たりがございませんが念のためでございます。どのような風体のお方かお話しくださいませんか」
清右衛門の問いに、伊丹は春貞の顔を見つつ、
「まあ、もっともな話しだな」
と得田新之助の名は伏せ、刺客が刀を抜いた際に喀血しそのまま小石川養生所に担ぎ込まれたが、しばらくして労咳が高じて亡くなったこと。そして小石川養生所肝煎である小川笙船に遺書めいた書き置きを残したこと。そこに自分を雇ったのは相模屋清右衛門だと書き残したことなどを差し障りのないように語った。
刺客の姓名はついに分からずじまいだったが、労咳末期で痩せ細っていたこと、そして朝鮮人参などを服用していたので近づくと独特な臭気に気づいたかも知れないことも述べた。
しばし沈黙が支配したが、清右衛門が顔を上げ、春貞と伊丹の顔を交互に見ながら口を開いた。
「刺客とは言え、お侍様が死に際に残した書き置きだとすればまさか嘘というこ

とも考えられませんな。しかし手前には誰であれ、人様を殺めなければならない道理も理由もございません」
「ということは、刺客が嘘をついたのでないとすればだ、誰かがお前を騙って殺しを頼んだということになるぞ」
伊丹が呟いたそのとき、
「旦那様、お茶をお持ちいたしましたがよろしいでしょうか」
奥向きの女中だろうか、襖の向こうから声がかかった。
「お入り」
清右衛門の許しで年配の女が入ってきて春貞と伊丹、そして清右衛門の前に茶菓子と茶碗を置いた。
ふと、なにか思いついたか、首を傾げた清右衛門は、
「民(たみ)、ものを尋ねたい。そこに座っておくれ」
と命じ、そして伊丹に顔を向け、
「これは奥向きの御用だけでなくお店全体に目を配ってくれる民と申します。手前が主となってからずっと助けてもらっている女でしてな」

そう断ったあと、
「民、つかぬ事を聞くが、お侍様でご病気だったとのことだから大層お痩せになってたようだ。そして薬の臭いがしたとのお話しだが、そんなお客様に覚えはありませんかな」
民と呼ばれた女は即座に、
「旦那さまのいわれるお方かどうかは分かりませんが、お痩せになり時に咳き込み、確かにツーンとするお薬の臭いがするお侍様にお茶をお持ちしたことが二度ございます。小一年前になりましょうか」
と応えた。
伊丹が膝を乗り出した。
「民さんとやら、すまねいがその男のことで覚えていることは何でも良い。しばし詳しい話しを聞かせてくれまいか」
春貞も同時に頷いた。
「承知いたしました」
民は主の顔を伺った後に(うろ覚えのこともあるが)と断りながら話し始めた。
それによると、男は裾や袖が擦り切れ、何時も水を通したのだろう、柄もはっき

りしない着流しを身につけていたが決して汚れてはおらず穏やかな話しっぷりに民は嫌な感じは受けなかったという。
「そうだ民さん、その男は何しにお店に来たのだろうか。両替が目的だったのだろうか」
伊丹同心に言われた民は首を傾げながら、
「確か、最初は両替をしにお見えになったはずですが、二度目のときには『主は在宅か』と小僧に問うていたはずです」
「はて、手前はその男を覚えておりませんが変ですな」
主の物言いに民は慌てて、
「いえ、旦那さまは確かその日、月一度の組合の寄り合いでお出かけになっていたと存じます」
「おお、そうでしたかな」
「ではこの店のどなたがその侍と話をしたのかい」
春貞が核心を突いた。
「はい。大番頭さんです。二度目も、そういえば旦那様がお留守のときでした」
民は迷わず答えた。

そのとき、清右衛門が自身の膝を拳で叩きながら呻いたので座の皆が注視した。
しばらくの沈黙の後に清右衛門は苦しそうな表情で口を開いた。
「嗚呼、手前にはなにやらこのからくりが分かったように思えます。お役人さま、春貞さま」
慚愧に堪えないといった様子でまたまた膝を叩いた。
我に返った清右衛門は民に、
「ご苦労だった」
と席を外させた。
民が座敷から離れたことを確認した伊丹は、
「どういうことだ、旦那」
と話しを急がせた。
「お役人さま。昨年、そのお侍様が姿をお見せになってから半月ほどのこと、大番頭嘉市郎が失踪しましてございます」
「あっ、その件は確か南町に届けがあったな」
伊丹は思い出したのか声を上げた。
嘉市郎は相模屋に奉公して三十年ほどになるという。どうやら実家はもともと武

家だったようだが没落し十五のとき、江戸に出て先代相模屋清右衛門の丁稚として奉公を始めたという。

「実によく働き、気の付く男でして、あっというまにお店には欠かせない奉公人に育ちました。三十歳のとき番頭に、そして四十前に大番頭を命じまして来年にものれん分けをと考えていた矢先にいなくなりました」

清右衛門は虚空を睨むようにして話しを続けた。

「やはりお武家様の血が流れていたのでしょうか、普段は実に大人しい男でしたが、たまたま酒代をせびりにくる無頼漢に対しても腰は低いままですが、押しが利く男でした。したがって本気で喧嘩をすれば手前などがかなう相手ではなかったはずでございます」

冷えた茶で喉を潤し、

「肝が据わっているからかお武家様方のお宅に返済を願いにまいるときにも手前よりよほど巧かったように思います。脅されても怖じ気つかず、かといって商人としての気概は失わずに相対するものですから大方は根負けして金子を投げ返したものです」

「その喜市郎は店の金を持って消えたのでしたな」

伊丹が問うた。
「はい。二〇〇両余りでございましたか。とはいってももともとその金子は喜市郎の長年の働きに報いる暖簾分けの一部として用意し、本人に準備も必要だろうから好きに使うようにと申しつけたわけでして、金がどうのこうのではございませなんだ」
清右衛門の話しにそれまで黙っていた春貞が、
「ところで旦那、その喜市郎という大番頭の風体はどんなふうだ」
清右衛門は春貞に居住まいを正し、
「はい。歳は手前より五つほど若いはずですが、先ほども申し上げましたとおり落ち着いたたたずまいが老けて見えましてな…」
「旦那、おまえさんと背格好は似ているんじゃあないかい」
と春貞はたたみ込んだ。
清右衛門は、
「手前はそう思ってはおりませんでしたが、組合仲間から『大番頭さんの方が主より立派だ』と冗談をいわれたことがありました」
と応えたとき、春貞は、

「それだ」
と声を上げ伊丹も得心したのか大きく頷いた。
一人清右衛門がいささか得心のいかない顔でいたが、伊丹同心が冷えた茶をすすり、
「これは俺の…いや春さんと二人の当て推量だ。これから肝心な点を調べなければならないが、清右衛門…お主から大番頭失踪の訴えを受けた際によくあるお店のもめ事だろうと安易に考えた俺たちの失策だったかもしれねぇ」
唇を噛みしめながら伊丹は考えを語った。

喜市郎という大番頭はどこでどう知り合ったか、労咳の浪人と知り合い、理由は不明だがとある旗本の子息の命を奪うよう金で依頼した。その際に主清右衛門の留守を利用しお店に呼びつけ、自分が主清右衛門だと名乗って暗殺を頼んだのではないか。
刺客となった浪人は確かに腕がたつが、決して分別がわからない男ではなかった。ただし労咳に効くという高価な薬を手に入れるために殺しを引き受けたが、身元が分からない人物からの依頼は断った。ために大番頭は一世一代の大芝居を

打ったのではないか。
伊丹が一息いれたとき、清右衛門が問うた。
「恐れ入りますが、その襲われなすったお侍様はどこのどなた様なので…」
伊丹は春貞と一瞬視線を交わし、
「すまんがそれは言えん。ただしとある大身旗本のご子息だ。この方に万一のことがあれば沢山の人間が詰め腹を切らされるというお方だ」
と応えた。
清右衛門は唖然としながらも首を縦にがくがくと振った。
「そういえば、ここは大店だ。したがって旗本や幕閣にも商いの行き来があるだろうな」
春貞の問いに清右衛門は、
「そのとおりにございます」
と応え、聞かれた真意が分かったのか、
「そういえば喜市郎は大番頭にございます故、時には手前の名代としてお旗本のお屋敷に伺うこともございました」
「差し障りがなかったら聞かせてくれ。そうした御用の大半は武家方への借財の

取り立てかい」
春貞が少しずつ話しを核心に持って行く。
「はい。お武家様の多くは金子の用立て時にはこの相模屋へ用人様らが直接お見えになりますが、返済時には手前どもがお屋敷に伺うまで返済を渋るお方がほとんどでございましてな」
清右衛門の表情を見ながら伊丹は、
「まあ、そんなところだろうな」
と苦い顔をしつつ、
「清右衛門、この話しは今日の所はこれまでとする。ただし後日またお主に助けて貰わねばならないはずだが承知してくれ。それと言うまでもないがこの話し、他言は無用だ」
と念を押した。
「それでは手前への疑いは晴れたのでしょうか」
清右衛門が伊丹に問うと、
「ああ、すべて判明したわけではないので何とも言えんが、お主の言い分はよく分かったつもりだ。これからは俺たちが褌を締め直さねばなるまいな。ただしこ

れは奉行所の命だと思ってくれ。御店が金子を用立てしている幕閣や大名たちの名を聞かせてくれ。きちんとした証文があるだろうからな」
とにやりと笑った。
清右衛門はしばらくの間畳みに目を伏せて考えていたが、
「お得意様の名はお白洲に呼び出されればともかくむやみにお見せできませんが、ことがことですし、手前へのお疑いを晴らすためにもご覧いただきましょう」
と席を立ち、大ぶりの文庫を手にして戻ってきた。
清右衛門が差し出した百十数枚の証文の名を見て伊丹同心は生唾を飲み込んだが、矢立を取りだし無言でその名を書き写しはじめた。
春貞は、
「すまんが主、この間を使ってもうひとつの用件を聞いてくれ。ただしこれはお調べでもなんでもない。俺のことなのだが…」
そう断りながら、春貞宛に為替で送られてくる大枚の金子について問いただした。
「春貞さま。まずはこれまでご挨拶にお伺いもせず大変失礼申し上げた事をお詫

びいたします。沙代様がそのような気遣いは無用と強く申されますので…」
清右衛門は意を糺したが、
「いや、それでよい。我が屋敷に相模屋が来たと近隣の奴らが知ったら、借金の取り立てに寄ったのだろうとしか思わんだろうぜ」
春貞は軽口を叩いた。
清右衛門は続けて、尾張から送られてくる金子にはなんの問題も怪しい点もないといい、送金の主は確かに尾張の札差近江屋と両替商井筒屋であると言い切った。そして沙代からは聞いてなかったが、いまだに多額の金子を相模屋に預けたままになっているという。
「沙代様がおっしゃるには、我が家は主が留守がちで普段は男手も少なく、多くの金子を置いておいては不用心だから預かってほしいと願われましてな」
清右衛門の返事に思わず春貞が、
「この際だ。実は俺も所帯を持つことになるのでな…承知しておきたいが、いかほどの預かり金があるんだ」
と聞いた。
清右衛門が、

「それはまことにおめでとうございます」
と祝いの口上を述べた後（正確な額は帳簿を確認しないと分からないといいながら）春貞の耳に口を近づけて呟いた額を聞き、春貞は柄にもなく、
「本当かい。母上は俺に内情のすべてを話してはおらなんだか」
と驚愕した。
隣で筆を動かしていた伊丹が呟きを聞いたのか、口をぽかんと開けたまま凍り付いた。

第三章　洲﨑弁財天の大捕り物

一

割り符の持ち主が両国の骨董商伊勢屋友三だと知った南町奉行所は見張所を設けると共に集中的な探察に乗り出した。

問題はいつどこで抜け荷の取引が行われ、相手はどこの誰かを知ることだ。取引の現場を押さえなければ抜け荷の完全摘発は難しいのだ。

太子堂を襲った連中から聞き出せたことはその押し込みが抜け荷の資金集めらしいことしか分からなかった。

伊勢屋友三が黒幕らしいと南町では見当をつけていたものの押し込み連中は拷問にも耐え、黒幕を白状しないまま死罪となった。

これでまた行き詰まりかと思った矢先に読売の浅太郎に預けていた割り符が入った守り袋を取りに来た男が伊勢屋に戻っていったことを突き止めた。

伊丹同心はもとより、定吉親分たちは質屋を襲い、皆殺しにした事件を忘れることはできなかったしその場に同行した春貞は思い出す度に激しい憤りを覚えていた。

春貞は伊丹と相談の上で弥三郎の力を借りることにした。

腕の立つお庭番である弥三郎にとって盗賊の商家へ忍び込むなど朝飯前だった。

弥三郎が天井裏に忍び込んでから四日後の夕刻、十歳くらいの男の子がきょろきょろしながら伊勢屋の店先に立った。

「ここが骨董商の伊勢屋さんかい」

男子は近くで水打ちしていた男に声をかけた。

「おう、そうだが坊やうちになにか用か」

子供とみてぞんざいな物言いをしたか、それには頓着せず、

「これを友三丹那に渡してくれと頼まれたんだ。渡せば駄賃が貰えるというからおいら引き受けたが大丈夫かい」

こういうことは慣れているのか若い男は、

「坊、確かに旦那にお渡しするから待ってな」

といって奥に引っ込んだ。

見張所に詰めていた金次と伊丹同心の朋輩である常廻り同心米倉小太郎は同時に、
「つなぎだな」
「つなぎのようですね」
と呟き顔を見合わせた。
しばらくして出てきた先ほどの若い男が小銭を子供に渡し、
「ご苦労だったね」
と先ほどとは違い、丁寧に労をねぎらった。
見張所の金次は、
「米倉の旦那、あっしは念のため餓鬼の後をつけてみます」
そういって飛び出して行ったが米倉は（用心深い奴らのことだ、子供はそこいらの餓鬼に違いねえ）と呟いた。
四半時ほどして戻ってきた金次によれば近所の長屋に住む棒手振夫婦の息子だという。
「小遣いをあげるからちょいと手を貸しておくれ」
と言われて手紙を届けたのだという。

伊勢屋の内部では動きが激しくなった。御店者だけでなく浪人が五人出入りするようになったし抜け荷取引の準備のためか、寝泊まりする人数が増えていった。
忍び込んでいる弥三郎は主の友三の言動を探るために貼り付いていた。
それから三日三晩かかったが、抜け荷取引の場所と時刻、そして荷を売るために船でやってくるという相手の名を知ることとなった。
弥三郎は伊勢屋から抜け出し、見張所に入った。
そこには米倉同心、伊丹同心と金次がいたが、弥三郎の報告は詳細に渡った。
抜け荷の売主は長崎屋富平、取引の日時は五日後の子刻二ツ、場所は洲崎弁財天沖だという。
「洲崎弁財天ってどこで」
金次が問うと米倉が、
「ああ、そう…小名木川以南というか本所深川木場の南端だな。そこに至る五町ばかりは鬱蒼とした土手が続いてな、海に面した一帯は一面深い葦が群れているやっかいな場所だぜ」
と眉をひそめた。

伊丹は、
「なある。抜け荷の受け渡し場所としては船も使えるわけだな」
金次は、
「それに真夜中にそんな場所に来る奴は他にはいませんからね」
と顔を見合わせた。
抜け荷の取引の場には受け渡し側および受け取り側を含め総勢少なくとも四十名は集まると考えられていた。

二

時は子の刻が過ぎようとしていたが、葦が生い茂る湿地帯に春貞、幸江はもとより同心伊丹鉄太郎や定吉らと捕り手たちが六十名ほど潜んでいたがその姿は闇に紛れていた。またどこかに弥三郎もいるはずだった。
「奴ら来やすかねぇ」

金次がひそひそ声でつぶやくと、
「来ないでどうする」
と伊丹が吐き捨てるようにいった。
「いいか、お前達、音を立てるなよ。もうしばらくの辛抱だぜ。くれぐれも俺たちが合図するまで動くんじゃあねえぜ」
伊丹の同輩である岡田伴衛門が静かに捕り手達に念を押した。
とそのとき、背後から明るい光と複数の足音と大八車を引く音が聞こえ始めたと同時に前方から龕灯(がんどう)だろうか強い一条の明かりが見えた。
背後から来た一団が春貞らの横を通り過ぎ、半丁ほど先で止まると海側からは四艘の小船が近づいて来た。
両者は廻りに躊躇せず取引をはじめた。
「両国の伊勢屋友三さんかい」
「長崎屋の富平親方ですな」
頷きあった両者は懐から例の将棋の駒の片割れだろうか、小さな小片を取りだしお互いに合わせて確認したようだ。

「ようがす、荷は向こうの船にあるのが全てだ」
「分かった。金はここにある。お互いに確認しあおうじゃあないか」
双方の男たちの数人が入り交じり足音を立てたそのとき、伊丹が立ち上がり、
「御用だ、伊勢屋と長崎屋、神妙にしねい」
と叫んだのを合図に取り方達の背後に潜んでいた十数人が龕灯(がんどう)に火を点け悪党たちに向けた。
あたり全体が明るみに出て伊勢屋友三と長崎屋の富平がその眩い明かりに目がくらみ立ちすくんだ。
浮かび上がったのは用心棒の侍五人と様々な人足風の男たち四十名余りだった。
「切り抜けろ」
誰かが声を上げたがあたりはすぐ悲鳴と水音が入り交り大捕物となった。
八丁堀の捕り手たちは手順通り数組にわかれ、小船に積まれていた抜け荷と金箱を早くも押収した。それを指揮したのは岡田同心だったが、彼らを助けて伊丹や米倉小太郎が長十手を振るっていた。
足元は泥濘み大きく動こうとすると足を取られ、賊達は逃げるにも逃げられない

状況だった。それは捕り手たちも同様だったもののさすがに普段鍛錬を怠っていない伊丹や岡田、米倉ら同心たちの足裁きは見事で不自由さを感じさせなかった。

「手荒でも良いが殺すなよ」

伊丹の声が闇夜に響いた。

五人の二本差しには春貞、幸江が対峙していた。

さすがに春貞は無腰ではなく刀を一本差しにしていたが、まだ抜いてはいなかった。

一方幸江は自分の背を春貞の背に向け刀を八双に構えていた。

浪人たちはおのれ達が数で勝っていること、そして相手一人は女だと油断をしたに違いない。

幸江の正面の男が鋭くも刃(やいば)を振り下ろした。

「キーン」

刹那男の刀は宙を舞い、幸江が返した刃先は音もなく相手を袈裟に斬り飛ばした。それを合図としたように他の四人が間合いの中に入り春貞と幸江に迫った。

「長崎屋富平はどこだ」
伊丹同心の声が響いたとき、捕り手による龕灯に浮かび上がった髭面の男が口に咥えた黒文字を勢いよく春貞に向け飛ばしたと同時に強烈な突きに動いた。もう一人は片足で沼地の泥水を春貞に浴びせつつ下段から切り上げた。
しかし刹那二人の視界から春貞が消えた。
そう思ったとき、二人はおのれがどう斬られたかも分からず漆黒の闇に沈んでいた。
春貞は音もなく二人の頭上を飛び越えながら一人の頸動脈を切り裂き、着地の刹那もうひとりの胴を抜いたからだ。
そのとき、残った二人の浪人の後ろから小柄な商人風の男が泥まみれになって現れた。
「先生方、助成いたしますでな」
とその手には渡来物らしい短筒を構え、春貞と幸江に向けて牽制した。
「お前が長崎屋富平か。悪あがきはやめな。逃げられはしねえぜ」
春貞は左手で幸江をかばうようにして一歩前に出た。
長崎屋富平の指に力が入った刹那、富平の首になにかが突き刺さり、短筒が大き

くぶれ、発射音と共にその体が崩れ落ちた。
「春さん、幸江さん大事ないでしょうな」
闇夜に現れたのは弥三郎だった。
「助かったぜとっつぁん。短筒の前では柳生新陰流も形なしよ」
と春貞が笑った。
「いや、春さんの見せ場を無くすお節介でしたな」
弥三郎がそう軽口をたたく余裕ができたほど、捕り物はほぼ終息し、残った浪人二人も虚脱状態のまま難なく捕縛されていた。
伊丹が近づいて来て、
「春さん、幸江さん、弥三郎さんに助けてもらい助かった。礼を言います」と頭を下げ、
「さてここから八丁堀まで戻るのが一苦労よ。皆泥だらけだしな」
と苦笑いした。
そのとき伊丹同心に定吉親分が近づき耳打ちした。
「そりゃあ名案だ親分。たのまあ」
伊丹の言葉を聞いた定吉が今度は子分の金次に耳打ちすると金次は嬉しそうに走

り出した。
春貞と幸江は伊丹らと南町奉行所まで同行し、顔や手足の汚れを拭き、簡単ではあったが身支度したものの着物の汚ればかりは換えがなかったので着替えようがなかった。そして捕縛された総勢四十二人の中には生け捕りにされた伊勢屋友三や二人の侍がいたが、後は程度の差こそあれ捕り手たちとの戦いで傷を負っていた。そして春貞や幸江に斬られた三人の侍と弥三郎に始末された長崎屋富平らの骸もあった。
これから厳しい詮議が続くことになる。

三

与力の佐竹弥五郎が、
「春貞どの、助成まことにありがとうござった。この礼は後日になるがご勘弁の程を」

と頭を下げた。
「とんでもない。佐竹さま。行き掛かり上それがしも憤怒の情が抑えきれなく伊丹さんらに頼んでご一緒させてもらったまでのこと。お気遣いはなさいませぬよう」
これまた軽く頭を下げて幸江と共に奉行所を後にした。
すると定吉が一緒に出てきた。
「春の旦那、養生所にお戻りですな」
「おう、そろそろ夜が明けちまうが幸江と共に養生所で仮眠しようかと思ってな」
春貞の返事ににっこりとした定吉が、
「お二人の道行きを邪魔するようで申し訳ございませんが、途中までご一緒させてくだせえ」
といいながら歩調を合わせた。
「金杉の親分さん、お取り調べはいいのですか」
幸江に問われた定吉は、
「これからは厳しい詮議がはじまりまさあ。わしら岡っ引きの出る幕ではございい

ません、お嬢さま」
頷いた春貞は、
「金次はどうした。まだお役目かい」
「へえ、ちょいとした用事を言いつけましたので」
春貞と幸江の数歩前に提灯を下げた定吉が二人の足元を照らしていた。
安藤坂に至ったとき、
「春さん、お嬢さま、お疲れでしょうがちょいと立ち寄っていただきたいところがありますんで」
と言い出した。
「親分の店かい」
春貞が問うと、定吉はゆっくりと首を振りながら、
「いえ、こちらへ」
と誘った。
「おお、親分『富坂湯』かい。この恰好だ、ありがてえがまだこの時間だ、これから湯を沸かすには時間がかかろうて」
春貞の顔色を楽しそうに見ながら、

「いや、実は伊丹の旦那が泥まみれのまま春さんたちをお返ししちゃあ申し訳ねえと先に金次を走らせてますのさ」
と伊丹の心遣いだと応えた。
「湯に入れるのですか」
やはり女の身でどろだらけの幸江は口にこそ出さなかったがこの後の始末をどうしようかと案じていたようだ。
「富坂湯」の前にはすでに金次が待っていた。
「親分、準備はできてまさあ」
頷いた定吉は幸江に向かい、
「お嬢さま、春さんはご承知だがこの湯屋はわっしの親戚にやらせている店でして、男湯女湯が別れてます。いつもより早いが一番湯が沸いたそうですから汚れをゆっくりと洗い流してくだせい。そうそう、女湯にはお嬢さま以外誰も入りません。ご安心なさってください。それから高台係の女に着替えを一通り用意させましたで、着替えてくださいまし。ただし柄も寸法もお気にめさないかと思いますがこの際です、ご勘弁を」
そう言いながら暖簾を上げて二人を誘った。

幸江が定吉に頭を下げて女湯の脱衣部屋に姿を消すと、
「春さん、わっしらもご一緒させてもらいます」
定吉は頭を下げた。
「おいおい、よしてくれ親分、ここは親分の店ではないか。願うのは俺たちの方だぜ」
「金次、おめえもご一緒させてもらいな」
「ありがてえ」
金次のひときわ大きな声が響いた。
春貞らは洗い場で泥だらけの身を洗い、石榴口をくぐって些か熱めの一番湯に身を浸した。
定吉や金次は春貞の首の傷に関しその事件当時に関わったのですでに承知していた。
「春の旦那とこうして湯に浸かるのは暫くぶりですな」
定吉が言ったとき女湯から、
「なんですかこれは…」
と幸江の驚く声が響いた。

「どうした幸江」
春貞が大きな声をかけると、
「春貞さま、なぜ女湯に刀掛けなどあるんですか。私のためでしょうか」
幸江の怪訝な声に男湯の三人が笑い出した。

四

春貞と幸江にとって忙しくも晴れがましい日々が続く。
二人の仲人は尾張藩江戸家老永井主水たっての頼みで小川笙船夫婦と決まっていたが、春貞と幸江の祝言をどのようなものにするかを考え手配りし準備することは笙船や沙代には現実問題として荷が重かった。したがってまずは関係者らが集まり役割を決めることになった。
享保九年五月の吉日の昼下がり、春貞の屋敷にこれまでにない大人数が集まった。

小川笙船はもとより、幸江の父永井主水の名代として尾張江戸藩邸剣術指南役兼主水の用人である堀田万之助、春貞の乳母沙代、室町一丁目長濱町高砂新道沿いに鳶の店を張る「い組」の頭政五郎、金杉水道町を縄張りの十手持ち定吉、養生所の老爺にして将軍吉宗直々の密偵弥三郎、そして浅草元鳥越で仏壇仏具を商う大店太子堂の主長兵衛およびこれまた日本橋の両替商の大店の主清右衛門が末席に座していた。

ただし春貞と幸江はあえてこの日の集まりには加わらなかった。

「ご一同、この度仲人を仰せつかった小川笙船でござる。僭越ながらこの場を仕切らせていただくが何分わしは年寄り、形だけのつもりじゃから遠慮なくご意見をいただきたい。まずは春貞どのと幸江さまの両人から、たっての頼みをご披露申し上げたい」

隣に座していた春貞の母役沙代が頷いた。

「春貞どの、いやここではやはり春さんと呼ばせてもらおうかのう」

一座に笑みが浮かび座がなじんだ。

「それはできるだけ簡素に質素な祝言にしたいとの希望じゃ。それぞれのお立場でご主張もあろうが、この場で様々なご意見を伺いたい」

笙船が一同に軽く頭を下げた。
堀田万之助が静かに、
「幸江さまのお父上、主水様よりの願いをお伝え申す。祝言は簡素にというお二人の希望は叶えてやりたいしそれ自体に異存はない。しかし幼くして母を亡くし父親の手で育てた自負もあり、また亡き妻にも笑われない祝言にしたいとの願いでございました」
沙代は頷きながら、
「子の幸せを願わない親がいるはずもございません。主水さまのお気持ち痛いほどわかります」
と受けた。
小川笙船が再び口を開いた。
「ご承知のように武家方の婚姻は実に複雑で形式を重んじますな。ご両家の親族間や仲人への挨拶はもとより数多くの振舞い膳の場が作られる。また正式な祝言は婿方で行い、後に嫁の実家で再び三三九度と宴が催される。無論幕府に婚姻許可の届け出を出さなければならないなど大変じゃ。それだけそうした複雑な儀礼・儀式をしてまでも両家を繋ぎお家の永続と繁栄を願って来たからでな…」

一息入れた笙船は、
「しかしこれはわしの考えでもあるが、春さんは些か特別な立場の男よ」
い組の頭政五郎は、
「春の旦那の生い立ちやご身分はここにいらっしゃる方々すべてがご承知だ。しかし確かに先生のおっしゃるように春の旦那は町人になりたいと常々おっしゃってはいるし格式などに捕らわれない祝言をあげたいと言われていやすが、それは廻りが許してはくれねぇ。そうでがしょう…。かといって尾張藩の禄を食んでいなさるお侍様ではない。いやはや難しいですな」
「尾張の禄は食んでおりませんが、春貞はまぎれもなく公方様の家来でございましょう」
沙代は釘を刺した。
太子堂の主長兵衛が口を開いた。
「手前のような町人が口出しすることではございませんでしょうが、幸江さまはまぎれもなく尾張藩江戸家老様の娘御。お父上のお立場もございましょうな」
堀田が我が意を得たりと頷いた。
「末席の手前も一言申し上げたいと存じます。ここにいらっしゃる方々は皆春貞

さま、幸江さまのお人柄に惚れられている方ばかりでございましょう。手前などは春貞さまのおかげで御店と手前らの命を救われた身でございます」
両替商相模屋の主清右衛門が言い切った。
隣の太子堂の主長兵衛もがくがくと頷いた。
「いかがでございましょう。細かなことは随時お決めになるとして僭越ながら使い走りは手前どもと長兵衛さんの二人、すなわち町人らで準備をさせていただけませんでしょうか。い組の頭にも手伝っていただかなければなりませんがな。無論肝心な点は笙船先生と沙代さまに随時ご確認しながらことを進めますが…」
清右衛門の話を受けた長兵衛も、
「是非そうさせていただきたいと思います。清右衛門さんと話し合い、春貞さま幸江様らしい祝言を整えてご覧に入れますでな。それに手前どものような者まで祝言の席にお呼びいただけると聞き本当に嬉しゅうございます。ご恩返しの意味も含めましてこのお役目を務めさせていただきたいと存じます」
と畳みに両手を突き願った。
十手持ちの定吉やい組の頭も頷いている。
身分も様々な人たちが春貞、幸江のために真摯に話し合っているさまを小川笙船

は感激しながら見ていた。
「そうじゃな。わしのような頭の固いのがしゃしゃり出るとろくなことはない。いかがであろうか沙代どの、ここは清右衛門どの長兵衛どのにお任せしてみてはいかがか…」
笙船は一同を見回した後に沙代に向き合っていった。
美しい笑顔を見せた沙代は、
「私に異存はございません。かくも二人のためにお力をいただけるとのこと、心より感謝申し上げます。ただし清右衛門さまと長兵衛さま方にひとつお願いがございます」
一同が沙代へ向き直った。
「申し上げるまでもございませんがお二人はこのお江戸でも一二を争う大店の主さまでございます。口さがない者達に春貞が御店にむりやり願っているような風聞が立ちませぬようお願いいたします。まあそう思われても仕方がない春貞の日常ですから些か心配なのです」
「なるほど、母御のお立場からはご心配かと思いますが、春貞さまの気性を皆よく知ってまさあ。痛くもない腹を探られないようわっしらも十分注意をいたしま

すでご心配なさらないでくだせえ」
い組の頭松五郎が言い切った。
そのとき、太子堂の長兵衛が思いついたように、
「ところで沙代さま。花嫁様のご婚礼衣装はいかがお考えでしょうかな」
と一同を見回しながら問うた。
「あら、大事なことをお話しするの忘れましたね」
苦笑した沙代は一同が注目する話しを始めた。
「先日、見知らぬ男の方ですが、人品卑しからぬお年寄りがここへ尋ねてこられましてな、ここは松平春貞様のお屋敷ですかとお尋ねになるのです」
沙代が訪問者の名を問うと、
「これは失礼いたしました。手前は日本橋駿河町で越後屋という呉服店を営みます三井八郎右衛門と申します」
と名乗ったという。
沙代が老人と共のものを屋敷に誘って話しを聞いたところ、過日すぐ側にある三囲神社で春貞とお嬢様に命を助けられたのだと言った。
沙代は春貞は我が息子、女性は近々春貞と祝言をあげる予定の尾張藩江戸家老の

一人娘永井幸江だと説明すると、
「それはそれはお目出度いことでございますな。沙代さまとやら、我が越後屋は呉服商でございます。この度の心ばかりの御礼としてお嬢様方の婚礼衣装をご吟味させていただきたい」
そう平伏して願ったのだという。
「御礼うんぬんはともかく、これもご縁。花嫁の衣装は親御様とご相談申し上げた上で越後屋さんにお願いいたしましょう」
沙代はそう願ったと行き掛かりを説明した。
「そりゃあいい。越後屋さんといえば江戸一の呉服商でさあ。きっと幸江様お似合いのお着物がみつかりまさあ」
政五郎が手を叩いた。
その頃、春貞と幸江は養生所の薬園で久しぶりに稽古をしていた。
幸江としては一太刀、竹刀の先が春貞の袖口にでも触れさせたいとしたがこの日も春貞は受け身一方でありながらその立ち位置は変えず、幸江の鋭い攻撃を時には強く、時には柔軟に受け流していた。

第五章　八丁堀の意地

一

一方八丁堀では失踪した相模屋の大番頭喜市郎の探索と共にその身元を徹底的に洗い出すことに時間を使っていた。
そもそも得田新之助、すなわち八代将軍吉宗が市井で二度も襲われた事件はまったくといって真相究明ができていなかった。無論探索は吉宗直轄のお庭番も動いていたが、手がかりは相模屋清右衛門の名が出た所でぷつりと消えていた。
お城の中のことには手が出せないものの市井で起きた出来事だからと南町奉行大岡忠相も出来うる限りの究明をと与力ならびに同心たちを鼓舞していたがこれまた進展はなかった。
そこにきて春貞と伊丹の掴んだ相模屋大番頭に繋がる新たな情報は大岡の表情を明るくした。

春貞と伊丹同心、そして時には金杉の定吉親分が相模屋の主清右衛門を訪れ、大番頭の失踪の原因とその身元究明につながる話しはないかと何度か問う機会を持ったが決定的な情報は得られなかった。

真夏の太陽が容赦なく江戸の町を照らし、道行く人はほとんどいなくなったある日の昼、養生所の弥三郎が春貞に耳打ちした。

弥三郎は吉宗直属の密偵であることはすでに養生所の誰もが知っていたが、皆普段は知らない素振りをしていた。

「なにっ。喜市郎は武家の出であるのではないかということは承知していたが奴の家が没落し父親が死んだことで公方様に恨みをもっていただと…」

春貞も驚いた。

「へい。昨日わっしの仲間からつなぎがありましてな。無論これはあのお方からの御伝言と断った上で聞かされたことです。相模屋の大番頭喜市郎の件は大岡様から上様へ逐次ご報告がなされていたようでその労いと共に喜市郎の過去を追った探索の結果、どうやらことの発端は上様が紀州藩主のときまで遡るようですな」

「上様の紀州藩主時代というと、どれほど前になるのかな」
春貞の問いに弥三郎は、
「紀州に入られたのが宝永七年（一七一〇）四月ですから、すでに十四年あまり前のことになりますか。ただしわっしが上様にお仕えするようになったのはその直後でしたから問題の出来事は初耳でした」
と首を捻った。
弥三郎が聞いた話しに推測を交えて整理すると、喜市郎は紀州生まれで相模屋主清右衛門より五つほど年下だとすれば喜市郎は相模屋に奉公する際、そうした思惑を持っていたとは思えない。時期が合わないからだ。
だとすれば奉公して何年か、いや昨年失踪に至るまでの直近に喜市郎が自分の家が没落し父親が死に至り家族離散となった原因が将軍吉宗にあると考え、その仇討ちをしようと思うに至る情報がもたらされたことになる。
「しかしだ、とっつぁん。その話し穴だらけだぜ」
「確かに。どういうことかまだ分かりませんが、上様のお命を狙うにしろそれが得田新之助様とどのように繋がったかですな」
春貞は腕組みしながら頷いた。

「大番頭は商いのため大身旗本や藩邸にまで出入りする機会があった。そこで城中に詳しい、そうだな…得田様が実は上様であり、時折城を抜け出されて市中を見回られること、さらにいつ城外に出るかをも知る人物と知り合ったということかな」

「まだ分からないことだらけですが、春さんのおっしゃるとおりの筋書きでもなければ起こり得ないことですな」

弥三郎も困惑している。

「問題は喜市郎はどこで思い切ったことをやらかすきっかけを得たのか、その因縁とは何かを調べなければならんですな」

弥三郎が呟き春貞が頷いた。

ともあれ肝心の大番頭が失踪し一年以上も行方知れずで生きているのか死んでいるのかも分からないことが事件解決を難しくしていた。

春貞は定吉の店で飲みながら伊丹同心や定吉親分らと談笑しつつも相模屋の一見でそれぞれの思いを吐き出しながら話しを整理していた。

奥から定吉の女房お勢と娘お佳がどんぶりと徳利を数本持って出てきた。

「春さん、婚礼間近なんですってね。おめでとうございます」

お勢が笑顔で徳利を置いた。
「まだ時期も決まっていねえが、そういうことになってしまったんだ」
春貞は照れもあって伝法に応えた。
「うちの娘は『知らないうちに春さんがお嫁さんを貰うだなんて』と不機嫌なんですよ」
と隣にいるお佳をからかったから、お佳はうつむいたまま奥に引っ込んでしまった。
「春さん、お前さんはどこでも女子に人気があり羨ましいぜ」
伊丹同心が冗談で茶化した。
春貞は、
「おかみさんも親分と一緒に俺の祝言の席に出てくれるよな」
と言った途端にお佳が奥から飛び出てきて、
「あたしも一緒にお祝いしたい」
大きな声を上げた。
「無論だ。ここにいなさる伊丹さんも来てくれるし、そうだ…金次もたのまあ。賑やかな方が嬉しいからな」

店の一角が大きな歓声に埋もれた。
「ねぇ、お前さん。あたしどんな着物を着ていけばいいんだろうねぇ」
「馬鹿野郎。お前やお佳は奥でお手伝いしなければならんだろうに」
定吉も伊丹も苦笑するしかなかった。

話しは相模屋と大番頭の件に戻った。
「やはりわっしらも相模屋には何度も出張って話しを聞いてますがそこから先は一向に進みませんので」
定吉がこぼすと、
「まあ俺たち八丁堀も同じだ。大藩…ましてや城中のお偉方や幕閣がからんでいるかもしれねぇとなればお手上げよ」
伊丹も杯を運びながら言い切った。
「しかし伊丹さん、喜市郎の足取りはまったく掴めないのですか」
春貞が問うた。
「それだ。町方ができるのは相模屋の供述から奴の足取りを追うくらいしかできんが、これまた一年も後となってはなあ」

伊丹がため息をついた。
「ただしな、春さん。過日お前さんと相模屋に出向いたおりに、旗本連中からの借用書を書き写したな」
春貞は箸を止めて伊丹をみた。
伊丹同心がいうには、借用額はまちまちなれど飛び抜けて多額な借入をしているとある藩江戸上屋敷があったという。
伊丹は額が多いから怪しいというわけではないがと言いながら、
「俺の勘にどこか障るのよ。何かが変だとな」
定吉も煮物をつまんだ端を置き伊丹に問うた。
「旦那。どこの藩なんで」
「いいか、まだここだけの話しだぞ。それはな武蔵忍藩(おしはん)だ。そしてここからが大事な点だ。相模屋の主に再度借用書の内容を帳面と突き合わせて確認させたと思いねぇ。どうやら喜市郎の奴はその中から忍藩の借用証文二枚を持ち出しているのだ。額にして三百六十両余りだ。どうだ何か臭わないか」
伊丹が天井を仰ぎながらぼそっと呟いたが春貞は、

「伊丹さん、その忍藩の借用の総額はどれほどあるのかい」
と問うた。
「我々が確認出来た借用書の中で忍藩のは六枚、全部で三千五百両あまりになるんだ。これでは利息だけでも大変な額になるに違いねえ」
伊丹の答えを受けて春貞は、
「確かに忍藩の財政は以前からかなり逼迫している話しは秘密でもなんでもないそうだが、それが今度の件に絡むとすりゃあ、これは大変なことになるぜ」
と腕を組み、男たちは顔を見合った。

二

八丁堀、いや南町奉行所としては将軍吉宗の命を狙った事件だったこともあり今回奉行の大岡忠相の動きは早かった。そして吉宗の許可を受け吉宗直属のお庭番であり養生所の老爺として働いている弥三郎に可能な限りの探索が命じられると

同時に幕閣内でも秘密裏に忍藩への調べが進んだ。
しかし相模屋の失踪した大番頭喜市郎の所在は分からなかった。伊丹らの推測ではすでにこの世にいないのではないか、始末されているに違いないと諦めの言葉を吐く同心仲間もいた。
それから十日経った日、辰の刻二つ時に春貞が養生所を訪れるとすでに幸江がいて朝餉が終わった時刻だった。
「春貞さま、おはようございます。朝餉がまだでしたら賄の八重さんが箱膳ひとつ用意してくれています。いかがですか」
幸江のことばに、
「おはよう。そうだな八重さんには面倒をかけるが診察が始まる前に食べながら笙船先生のお顔を拝見しよう」
春貞はそういいながら上がり框に飛び上がった。
笙船はすでに食事を終え、茶を飲んでいた。
「おはようございます。先生、相変わらず鉄砲玉で申し訳ありません」
小川笙船は笑いながら、
「大半は弥三郎さんに聞いとるので心配はしていないが、相変わらずお前さんは

他人様のために走り回っているようじゃな。ま、それもいいが祝言の心づもりも幸江さんと相談しておかないと駄目じゃぞ」
「はい。仲人をお願いしている先生にご心配かけるのは不本意ですが、例の相模屋の件、かなり大事になりそうでして」
春貞は限られた時間内でこれまでの経緯を簡単に説明した。
「なるほど。わしもその喜市郎とか申す男はすでに死んでいるように思えるな。生身の人間はいくら姿形や名前を変えて逃げてもな、その息づかいはどこかに残るものよ。それだけ八丁堀の連中が躍起になって探しても見つからないとすれば残念だが脈はないな」
そういいながら立ち上がった笙船は、春貞の耳に口を近づけ、
「先ほどな、い組の頭の使いだという男が春さんにと言付けを伝えに来てな。本日未刻一つ時に、い組にお越し願いたしということじゃったぞ。どうやら得田新之助殿がお前さんに会いたいそうじゃ」
片目を瞑りながら笙船は診療部屋へと向かった。
養生所で朝餉を食し、一息入れた春貞は「い組」へゆっくり向かおうと腰を上げ

ると玄関に幸江が待っていた。
「わたしもご一緒します」
と大小の刀を差して待ち構えていた。
春貞は、
（今日は俺一人で行く用事なのだ）
そう言い聞かせようとしたが、ふと思いに耽った。
幸江と所帯を持っても自分の言動は変わらないはずだ。伊丹同心や定吉親分の手助けもしたいし、時には大岡忠相の申し出や得田新之助…いや、将軍吉宗からの依頼事で走り回ることもあろう。
そうしたとき、妻となる幸江に秘密があっては実に動きづらいではないかと…。
春貞は決心した。
「幸江、一緒に来てくれ。途中で大事な話がある」
そういわれた幸江は喜びの表情をしながらも緊張気味に玄関を出た。
「これからお前も知っている室町のい組に行くが、それに関して大事なことを話しておきたいのだ。ただし本当の所は俺も他言は無用と口止めされているからもしかしたらお叱りを受けるかも知れん。しかしお前に秘密を作るのは嫌なのだ。

だから約束してくれ。これから俺が話すことは定吉親分や伊丹さんは勿論、お前の親父さんにも内緒にするとな」
めずらしく真剣な表情で話し始めた春貞を見つめながら幸江は、
「はい。幸江は夫となる春貞さまのお申し付けは命に替えても守ります」
そう応えて神妙な表情になった。
春貞はその化粧もしていない幸江の顔を見ていると無性に愛しくなってその身を抱きしめた。
「ああ、春貞さま。苦しいです」
幸江はつま先立ちしながら春貞のするがままにしていた。
ふと我に返った春貞は照れながら着流しの襟と裾を直しつつ歩き始めた。
「秘密とは何ですの春貞さま」
幸江も春貞と祝言を挙げると公言してからは自然と話し方も優しくなってきた。
広大な水戸藩の脇を通る頃にはあたりに人影はなかった。それでも春貞は並んで歩く幸江に声を潜めて話し始めた。
「いいか、これは俺が知っている限りでは、い組の頭と笙船先生、弥三郎とっつぁん、そして大岡様しかご存じないことだ」

春貞は念のためあたりを見回しながら、
「幸江、お前も得田新之助殿は知っているな」
「はい」
「実は得田とは仮のお名前でな、あの方こそ八代将軍徳川吉宗様、すなわち公方様なのだ」
幸江は一瞬春貞のいう意味が理解できず狼狽えた。
それを承知で春貞は続けた。
「上様は市井の実情をご自身の目で確認したいと、時折得田新之助としてこの江戸の町を視察なされているのだ。したがってご身分が知れればお命に危険が生じる可能性もある。事実お前も知ってのとおり刺客に襲われたことがあったな。俺が秘密中の秘密というのはそういうことなのだ」
「嗚呼、それで得心がいきました。養生所へご一緒されたとき笙船先生や弥三郎さんの言動がどこか変だと感じてました」
幸江が思い出したようにいった。
「初対面の方のはずなのにろくな挨拶もせず、どこか無視というか得田様の存在を意識しないようにされているように思いまして…」

春貞は感心しながら、
「やはりお前も剣の修行の甲斐があるということだな。一瞬の呼吸の不自然さがよく分かったものよ」
幸江は嬉しそうに春貞の顔を仰ぎ見ながら、
「ということは、い組の政五郎さんや笙船先生らとご一緒以外私は上様を得田新之助様としてお目にかかればよいのですね」
しかし春貞は難しい顔をした。
「とはいえ、実際にな、上様としてお目にかかる機会などそうそうないであろうよ。したがってお会いする機会があればそのほとんどが得田新之助殿としてだろうな」
一呼吸入れてから、
「まあ、そうはいってもあのお方は突如得田新之助から公方様に変貌なさるときもあるし、俺たちとしては例え事情を知ってはいても粗略にお目にかかるわけにもいかねぇ。正直な、下々の我らにとっては気苦労な事よ」
と笑った。

春貞と幸江が向かったのは日本橋室町の長濱町一郭にある鳶の政五郎が店だ。
政五郎はまた大岡忠相が創設した町火消し「い組」の頭でもあった。
町火消しは、いろは四十八組ある中で政五郎が率いる「い組」は本町、本石町、室町、小田原町、本銀町、本両替町、本材木町、本船町、駿河町、瀬戸物町、伊勢町、安針町、万町、青物町、呉服町、岩附町そして通一丁目と広い範囲を受け持ちとする、よ組、は組についでの大きな組織だった。

三

「御免よ。春貞だが頭に取り次いでくれ」
出てきた若い衆に春貞が願うと何と奥から政五郎本人が出てきた。
「春の丹那、ご足労を掛けて申し訳ねぇ。おや今日はお嬢さまとご一緒でしたか」
政五郎の表情に微妙な怪訝の色が伺えたので春貞は、

「得田殿のお叱りを覚悟で俺の一存にて連れてきた。頭も承知のように俺たちは祝言を上げる予定だしどうしても幸江に隠し事があっては俺自身も動きづらいのだ」
無言で頷いた政五郎が意を決した様子で、
「どうぞこちらへ」
と二人を誘った。

いつものように神棚を背に八代将軍吉宗こと得田新之助が粗末な木綿の小袖と袴姿で座しており、その横には南町奉行大岡越前守忠相がにこやかに手招きしていた。
「ご無礼いたします」
と声をかけながら春貞は部屋の入り口に座して平伏し、幸江は板の間に座して深々と平伏した。
「両名とも何をしているこちらに入れ」
吉宗こと得田新之助が磊落に声をかけた。
いかにお目見えの許しがある者でも城中で吉宗と会う場合にはこのような近距離

で相対することなどあり得ない。それだけに大名諸侯など屁とも思っていなかった幸江も膝が震えた。
「お許しもなく永井幸江を同道させましたこと、お許しください」
春貞と幸江は平伏したままだった。
「よいよい春貞。いつも申すとおり余は…いや俺は貧乏旗本の冷や飯食いの得田新之助よ。お主に平伏されては困るでな。許す。早く座敷に入りそこを閉めろ」
と気遣いを見せた。
「さあ、春さん幸江さま、お許しが出たのでこちらへ。そういえば得田さま、近々お二人が祝言をあげられることご存じでしたか」
と政五郎が二人を大岡の隣に誘いながらいった。
「うむ。忠相から聞いたわ。よい取り合わせぞ。俺もなにか祝いの品を考えねばならんな」
得田新之助と大岡忠相の前には箱膳が置かれており、すでに些か酒も入っていたようだった。
居住まいを正した春貞に得田新之助がいきなり、
「春貞。そちには例の件で動いてもらっていること忠相より聞いておる。あらた

めて礼を申す。必要なら弥三郎を使え」
春貞は無言で頭を下げた。
「春さん、そのことでお手前と些か込み入った話がしたいと得田どのが申されるでな、おいで願ったのじゃ」
大岡が続けた。
大岡の言葉に被せるように吉宗は、
「お主らが…相模屋といったな。その探索の中で大番頭と共に武蔵忍藩の借用書が二枚紛失していたという話しを聞いてな、余も近習たちに極秘で調べさせたのじゃ。お主らばかりに苦労をかけては面目ないでな。それに思ったより根が深く面倒なことになりそうなのじゃ」
吉宗の意を受け、大岡忠相がこれまで判明した範囲のことを語り出した。
武蔵忍藩主は阿部豊後正喬（まさたか）で宝永七年（一七一一）四月に老中に就任以来、享保二年（一七一七）九月十九日までその座にあった人物だ。
「阿部正喬様は、寛文十二年（一六七二）四月二十八日、忍藩主阿部正武様の嫡男としてお生まれでな、家督を継がれる前から元禄十二年に奏者番、寺社奉行を

歴任され、武蔵・相模国の内一万石を与えられ諸侯に列せられた方なのだ」
大岡は大層な大物が関係しているかも知れず、より取り調べが難しくなるのではないかと案じた。
「その阿部様が、忍藩が相模屋の大番頭だった喜市郎なる者とどのような関係にあったかが問題ということですな」
春貞は大岡に問うた。
「その先の肝心な話しは余自身が話そうかのう。忠相も話しづらいこともあろうでな」
酒の杯を膳に置いて吉宗は話し出した。
「実はな、享保二年に奴が老中を辞職したのは余との確執が原因なのじゃ。無論御政道を糺していくなかで余と老中たちや諸侯たちと意見が食い違う場合があるのは当然じゃ。ただし余は徳川政権舵取りの一端を老中たちに任せているからこそ、その言動には注視せざるを得ないのじゃ」
吉宗自身が語る内容は実に重いものだった。
吉宗が将軍に就任した時の老中たちは、土屋政直、井上正岑、久世重之、戸田忠真そして阿部正喬の五人だった。しかし保守色の強いこれら老中たちは吉宗が進

めようとしたいわゆる享保の改革に反対だったという。
結局老中たちと吉宗との溝は埋めることが出来ず、享保二年に問題の阿部正喬が藩の財政再建に専念するという理由で老中職を辞任する。そして翌年には土屋政直が辞任し、享保五年には久世重之が、享保七年には井上正岑がそれぞれ死去する。
吉宗はそれまでごり押しを避け、この時点で本格的な改革に着手することになった。
またまた大岡が話しを繋いだ。
「どうも阿部正喬様のご本心は老中への返り咲きを願っているという確かな話もあってな…」
「なるほど。しかし阿部様が老中職に執着なさっても…畏れ多いことですが、上様がご承認されなければことは成就されない…」
春貞は隣に座り静かに話しを聞いている幸江の様子を眺めながら呟いた。
「推測でものを申してはならんが、現時点で皆が調べてくれた内容を判断するとな、阿部正喬がたまたま行き会った喜市郎とか申す大番頭を利用し、余の暗殺を謀ったとも考えられる…。ただし忍藩が絡んでいることは確かでも肝心の正喬が

直接命を下したかを知るのは難しいのう」
吉宗も遠くを見る表情となった。

四

「い組」を辞した春貞と幸江は養生所へ戻る途中、金杉の定吉の店に立ち寄った。
暖簾をくぐると、
「よっ、春さん、幸江さんとご一緒でしたか」
伊丹が一杯やっていた。
「伊丹さん、例の件、思っていた以上に奥が深いことが弥三郎とっつぁんの調べで分かったんで知らせにやってきた」
春貞は大岡の許しを得て、吉宗と大岡らで議論した概要を伊丹や定吉らに知らせたいと店に寄ったのだった。

ただし、まさか吉宗本人から聞いたとはいえないので弥三郎が…ということにした。
一緒にいた幸江はいまだに混乱の中にいて不用意に口出しすると取り返しの付かない間違いを犯すかも知れないと口をつぐんでいた。
一通り春貞から話しを聞いた伊丹は、
「要は喜市郎は単なる捨て駒として使われたようだな」
と切り出した。
「やはり阿部正喬様が老中返り咲きを企み、そのことを確たるものとするために上様を亡き者にしようと企てた。そして市中見廻りのために城外に出た際に得田新之助様としてお命を狙ったということになりやすか」
定吉がため息をつきながら呟いた。
「直接刺客を雇った場合、足がつきやすいと考え、市井の人間を巻き込みやがったか」
伊丹がため息をついた。
「まず、いつかは不明だが、喜市郎の過去を聞き、偽りの知恵を吹き込み、上様が一家離散の元凶だと吹き込んだ…」

春貞の物言いを受け定吉が、
「そして事が成就した際には、いえ、仇討ち成就の暁にはお家再興の約束をちらつかせ、その代わりに忍藩江戸上屋敷の借財を減らす約束をさせたということですな。しかし暗殺はたまたま春さんに邪魔され…いや、やはり邪魔されたんで…ことの発覚を恐れて喜市郎を抹殺し、事のもみ消しを図ったという筋書きですかい。いかにも汚ねいじゃありませんか…」
と唾を飛ばしながら唸った。
「まあそんなとこだろうよ。相手が老中経験者となれば信用は絶大だ。それに喜市郎は商いに関しては愚直なまでに正直で真面目な男だったというから奴らの巧みな誘いに乗ってしまったのかも知れんな。ただし阿部なにがしかが老中返り咲きを画策したのは事実としてもだ、当の本人が上様暗殺の命を下したかどうかはわからんのだ。側近が阿倍の思いを受けて先走ったという可能性もあるしな。いずれにせよ俺たちが追えるのはここまでよ」
春貞も無念そうに吐き捨てた。
そのとき幸江が伊丹に向かって初めて口を開いた。
「伊丹さま。その喜市郎という大番頭の行方ですが、もし失踪直後に殺されたと

すれば死体が出てくる可能性は少ないかも知れません。しかし遺留品のひとつやふたつはどこかに残っているのではありませんか」

「うむ」

と伊丹がなにかを思いついたように声を上げた。

「幸江さん、よいことを言ってくださった。我々の探察がまだまだ甘かったのかも知れませんな」

定吉らが伊丹を見据えた。

「いや、奉行所として喜市郎が失踪した直後から最近まで、幸江さんがいわれたように身元不明者の亡骸についての記録を丹念に確認したが大番頭らしい人物は見当たらなかったのだ。しかしだ、奉行所に届けられるのはなにも亡骸だけではない。例えば大川や江戸湾に流れ着いたとみられる所有者不明の金品や物品、ときには着物なども届けられることがあるが、亡骸ではなくそうした遺留品かも知れない届け物の調べは確かまだやってはいないはずだ」

伊丹は虚空を睨みながらいった。

「そうすると南北両奉行所の該当時期の取得物といったものを確認する必要がありやすね」

定吉の言葉を受けて春貞が、
「確かにな。亡骸は例えば重石でも付けて江戸湾に沈められれば簡単に発見できないが遺留品などが浮き上がることもあるわけですな」
「春さん、そうなのだが金目の物はその場で見つけた奴が懐に入れてしまいまさあ。血がついているとかのよほど怪しいものでもないと奉行所に届ける奴もいませんぜ」
定吉が言い切った。
伊丹は頷きながらも、
「確かにな。しかしせっかく幸江さんの話しから思いついたことだ。念には念を入れなければ俺らの仕事は笊になってしまうからな。やってみる価値はあるだろうよ。それに北町の御奉行諏訪美濃守頼篤様も大岡忠相様とは昵懇だ。きちんとお話しすれば協力してくださるだろうぜ」
と呟いた。
春貞は大岡の名を聞き、ふと四年、いやそろそろ五年になるか…はじめて大岡忠相や十手持ちの定吉と出会ったときのことを思い出していた。
信用していた同郷の仲間に裏切られ、胸と首に傷を負った春貞は虫の息で麹町ま

で転げるように逃げてきたとき往診帰りの小川笙船に助けられ、笙船の長屋で傷の手当てを受けたため命を落とさずに済んだあの時のことをだ…。
笙船は春貞の名も、なぜこうした仕儀になったのかも聞かずに真摯に治療をしてくれた。しかしこれだけの傷を負わせた人間をそのままにしておいてはいつまた襲われるかも知れないと奉行所に届けることを笙船は強く勧めた。
春貞は傷を受け弱気になっていたこともあるが、笙船の言動が真に自分の事を思っての事だと感じ、応急処置を受けた翌朝に笙船付き添いで南町奉行所まで籠で向かった。
奉行所の前まできたとき、勝手口から同心と思われる男といかにも十手持ちだと思える男が出てきたので笙船が声をかけ、ことの次第を訴えた。後で知ったことだが十手持ちは金杉の定吉だった。
春貞は笙船の手前もあり、下手な意地を張るのではなくここは真摯に本名を名乗り出ようと覚悟を決め、大岡越前守忠相には「松平春貞」と名乗った。
驚いたのは小川笙船も同じであったが、たまたま同心たちはその場にいなかったため春貞の身分を知ることはなかった。

そのとき大岡は以前城中で偶然参勤交代で江戸にいた尾張藩主徳川継友と出会った際に気があったのか、短い立ち話をしたことを思い出した。
大岡は、
「尾張様、江戸はいかがでございましょうか」
と当たり障りのない問いをしたとき、継友は、江戸は大岡殿のお役目大事のおかげで安全な町となったと誉め、それに江戸には藩とは無縁なれど腹違いの兄弟がおりましてな、会うのが楽しみだ…といった話しを聞いたことをだ。
大岡は松平春貞が尾張の生まれと聞き、徳川継友がいった腹違いの兄弟の当人だと思い至った。
無論それは大岡の腹に収めたことで口外することではなかったが、大岡の命を受けた同心たちはもとより出会った十手持ちの定吉が親身になって笙船の長屋に度々顔を出しては後始末や世話をしてくれた。
ただし春貞はただひとつ、奉行所や笙船に隠し通したことがあった。
それは自分の屋敷が大川の向こうにあるということだった。これは屋敷に住む沙代たちの身の安全を考えてのことだった。
ともあれ春貞は定吉の恩に報いるために自身の身分と立場をきちんと説明するこ

とにしたが、そのときの定吉の驚きようはいま思い出してもおかしかった。
「いかがしました春さん」
春貞の表情を読んだ定吉に問われ、
「いや、いま大岡様と初めてお会いしたときのことを思い出してな…」
春貞はそう言いながら静かに酒を口に運んだ。
その端正な横顔を幸江は静かに眺めていた。

五

定吉の店で伊丹らと別れた春貞と幸江だったが、思った以上に時を過ごしてしまったため養生所に立ち寄るのではなく、幸江を市谷の尾張藩上屋敷まで送ることになった。
幸江は道々、得田新之助のことを春貞にあれこれと問いただしていた。どうにも将軍徳川吉宗があんなにも気楽に市井に出かけてくることが納得できなかったよ

うだ。
「幸江、俺だって得田殿がどのような目的でその都度江戸の町を歩かれているのかなど知る由もない。とはいえまさか単なる遊びではあるまいて」
と苦笑いした。
「でも、なぜにい組の頭には本当のことをお知らせになったのでしょうか」
幸江の問いは真っ直ぐだった。
「なるほど、当然の疑問だな」
春貞たちが通寺町から横寺町に至ったとき、二人の足がぴたりと止まった。
「幸江、どうやら待ち人らしいぜ」
春貞が静かに呟いたとき抜き身を下げた六人の侍に囲まれていた。
幸江は自身の腰に下げていた大刀を抜き、春貞へ渡した。春貞もそれを素直に受けたということは相手たちが並々ならぬ腕の持ち主であることを幸江が察知したからに違いない。
「夜盗なら相手を間違えてるぜ。俺たちは素寒貧だ」
春貞がそういうと一歩前に出た侍が、
「他人の事を犬みたいに嗅ぎ回っていると命を落とすと知れ」

と低く呻くように呟いた刹那春貞に向かって切り上げた。
春貞は間合いを外したと同時に幸江の腰から抜いた刀を峰に返して相手の肩を切り下げた。
骨が折れる音がして男が崩れ落ちると続けて五人が春貞と幸江へと迫った。
すでに幸江は脇差しを抜き青眼に構えていたが、裂帛の気合いと共に男たちの間に切り込んだ。
これには男たちも虚を突かれたようで一瞬の躊躇いが生じたがそれが命取りとなった。
幸江は二振りの刃をかいくぐったと思ったら一人は胴を抜かれ、一人は刀を握っていた右腕が刀ごと宙に飛んだ。
悲鳴が一段と大きくなった。
春貞がほとんど立ち位置を変えず続けて迫ってきた三人の頸動脈を断ち切ったからだ。振り返った幸江の目にさえ、春貞の振るった刀の太刀筋は見えず、ただ光の弧が残像のようにいくつか感じられただけだった。
春貞たちは近所の自身番屋にことの次第を届けると同時に峰打ちに倒した侍一人を至急南町奉行所同心伊丹鉄太郎に引き渡すよう願った。

「春貞さま。ひとりは自白させるための峰打ちでしたか」
と得心した。
「そうだ。他人の昔の事を犬みたいに嗅ぎ回って…といったな。であれば忍藩の侍か雇われた男たちに違えねえ。いま生き証人がいると八丁堀もやりやすくなるだろうよ」
春貞は血降りした刀を懐紙で拭い鞘に収めながら幸江に返し、幸江の私邸へと急いだ。
「しかし春貞さま。わたしの刀があれほど素早く動くのを初めて見ました」
と感嘆すると春貞も、
「お前の肝の据わった立ち会い、見事だったぞ」
お互いを誉め合った。

翌日、朝早くから春貞は南町奉行所にいた。
昨日奉行所に引き渡した侍の吟味を聞くためだが、出てきた伊丹同心は、
「春さん、お前さんの腕はまことに大したものだな。肩の骨の折れ方が実に綺麗だと医師が呟いていたぜ」

と眠そうな顔でいった。
「それはそうと、どうです、伊丹さん。昨日の今日ではご無理でしょうがなにかわかりませんか」
春貞の問いに伊丹は、
「まあまずは怪我の処置をしてからだ。また奴が、例えば忍藩の勤番だとすれはそれはそれで町奉行所が拷問にかけるわけにもいかねえ。しかし確かに春さんのおかげで生き証人が飛び込んできたんだ、何とかよい道を開かんといかんな」
といいながら、伊丹は思い出したという風に問うた、
「春さん、先日定吉の店で幸江さんの一言から調べ直そうとした件、覚えているか」
「勿論だ。なにか進展があったな」
伊丹の表情から察した春貞は御用部屋に座り込んだ。
伊丹は南北両奉行所に届けられた、あるいは奉行所に取り置かれた持ち主不明の取得物、それも相模屋の大番頭が失踪してから今日までの間のものを調べ直してみたが、もしかしたらと思う代物が二つあったという。
ひとつは根付けのついた財布で端一箇所に大きな血の跡があったという。そして

その中に拡がった油紙で包まれた紙片がいくつか残っていたが水に溶け文字はほとんど判別できない状態だという。
「どうだ、春さん。これから俺は相模屋にそれらを持って出向こうと思っていたところだ。一緒に来てくれないか」
伊丹が願い春貞は頷いた。
春貞と伊丹はその日久しぶりに二人揃って相模屋へ足を向けた。
主の清右衛門は早速二人を奥座敷に通して春貞と伊丹の前に座した。
「なにかお分かりになりましたので」
ここのところ、定吉親分や伊丹の同輩同心たちが入れ替わり立ち替わりとやってきたが二人揃っての来店は二度目だったからだ。
「いや、進展というものではないが今日はお主に確認してもらいたいものがあってな、罷り越した」
伊丹同心がそういいながら懐に忍ばせていた包みを清右衛門の前で開いた。
途端に「ごくり」と生唾を飲み込む音が聞こえ、清右衛門が唸った。
「伊丹さま、手にしてよろしゅうございますか」
清右衛門は伊丹が頷いたのを待ちきれない様子で脱色し一部には血痕らしきもの

が染み込んだ薄汚れた布製の財布を手に取った。
「嗚呼、これは間違いなく喜市郎の財布でございます。どこでこれを…」
と清右衛門が絶句した。
「それはな、濱御殿(現浜離宮庭園)近くの水辺で発見されたらしい。血が付いていたので見つけた漁師が役人に届けたというが、時期も一年ほど前と符合するのでもしやと思ってな」
伊丹は春貞と顔を見合わせて応えた。
「清右衛門さん、中も検めてくれ。ただし金子は落ちたか抜かれたかは分からんが残ってはいないぜ」
春貞の声に我に返った清右衛門がいまにも崩れそうな財布を丁寧に開くと紙片がいくつか入っていた。
「発見されたとき、水浸しでな、墨は完全に滲んでいたし紙もいまにもちぎれそうだったが八丁堀の旦那たちの工夫でそれだけ残ったということだ」
春貞の物言いに続いて伊丹が、
「でな、それが御店から紛失した借用書であればより事が明白になるのだが、どうだな主」

清右衛門はがくがくと頷きながら、
「伊丹さま、春貞さま。紙片の内容は仰せのとおり読めませんし極一部でございますので何とも申し上げれませんが、この紙質は手前どもが借用書に使っているものと同じでございます」
と言い切った。
「念のためだが、どこでこの紙を購っているのか教えてくれ」
春貞の問いに清右衛門はすかさず、
「はい。日本橋横山町にございます伊藤屋さんから仕入れております」
一呼吸入れた春貞は、
「伊丹さん、やはりこれは貴方の見立てどおり喜市郎のものと決めてよいようですな」
と伊丹に同意を求めた。
伊丹の返事を待たず、清右衛門は、
「では、喜市郎はどうなりましたので」
と伊丹に詰め寄った。
伊丹は苦しそうな表情を浮かべて腕組みしていたが、両手を膝上に置きながら、

「状況から考えると大番頭はすでに始末されていると思われるな」
ぽつりというと清右衛門はがっくりと首を垂れた。
その小さく見える背に春貞は手を置きながら立ち上がり、
「清右衛門さん、喜市郎のことは忘れることだ」
と優しく呟いた。

六

相模屋を後にした春貞と伊丹はこれからの探索について話し合いつつ外堀に架かる鍛冶橋門が見えたとき、二人の足が止まった。
辺りは日が暮れようとする薄もやに包まれていたがその陰から数人の侍の姿が浮かび上がった。
伊丹鉄太郎は早くも左手で鯉口を切り、柄を下げた。しかし春貞はいつもの通り無腰だった。

「伊丹さん、こう続けざまということはどうやら相手も追い詰められてきたようですな」
「確かに。俺のような不浄役人まで亡き者にしようとするほど焦っているということか…」
「ということは俺たちはかなり核心に迫っているということよ」
そう言いながら伊丹より一歩前に出た春貞は待ち伏せしていた数人の二本差したちに、
「おい、松平春貞と南町奉行所同心伊丹鉄太郎と知っての狼藉かい」
松平という姓に一瞬驚き躊躇する様子が見えたが、後方から「殺(や)れ」と低い声が聞こえ数人が抜刀しながら二人に襲いかかった。
鋭い刃先を寸毫わずかに躱しながら春貞は相手の懐にふわりと入り込んだ。刹那男は鈍い悲鳴をあげて吹き飛び、刀は春貞の手になっていた。
伊丹は三人と対峙していたが、上段から切り下げてきた男の切っ先を抜いた刀で受け流した瞬間、返した刃先が小さな弧を描き相手の胴を抜き、そのまま体を入れ替えたとき、二人目を竹割のように斬り飛ばしていた。

一瞬に三人が即死した様を眼前にした男たちはたじろぎつつも、構え直して間合いの中に突進してきた。
その斬り合いを物陰から見ていた人物には春貞と伊丹の動きは緩慢に思えたかも知れない。しかし瞬時に手首を切られ、足をなぎられた五人は血の海の中にのたうち回った。
「いまのうちなら命は助かる。早く連れて帰れ」
春貞が息も切らさず大声を出すと後方に備えていた数人が脱兎のごとく逃げ出した。
「おい、仲間を見殺しにするのか」
刀を振るった一瞬は呼吸を止めていたのか大きく深呼吸した伊丹も呆れて怒鳴った。
春貞と伊丹は顔を見合わせ頷きあったが、二人とも無事ではあったものの返り血を浴び戦いの壮絶さを示していた。
「しかし、春さんは強い。無腰から一人目を倒すまでの素早さといったら俺も追うことができなかったぜ」
「いや最初の相手は手強い故、手荒な仕儀となってしまった。それにしても伊丹

さんの一刀流恐るべしだ。しかし譜代大名の家臣とはいえ主の命には背けなかったか…」

「忍藩といえば御三家に次ぐ大藩よ。しかし現実は厳しいのだ春さん。上士はまだしも下士は農民や町人よりも恵まれない生計にあるからな。誰もが主人に認められようと必死なのだ」

二人はその場で死に至った者たちに手を合わせ、わずかな先にある南町奉行所まで歩いた。

伊丹同心と春貞の報告を受けた大岡忠相は血相をかえた。

「そこまで無理を通そうと阿部殿がお考えとならば、万一の場合もあろう。奉行はこれから登城し上様にお目にかかり、念のため身辺に一層の注意をなされるよう申し上げてくる」

大岡は大きなため息をつきつつ腰を上げ、与力同心たちに春貞と伊丹が襲われた後始末と息のある者の捕縛を命じた。

「春貞どの、伊丹。ご苦労でありました」

と二人の労をねぎらった。

南町奉行所では昨日今日と続けざまの狼藉の探索と始末に苦慮していた。
息のある者への詰問は例の無いほど厳しいものだったが、男たちは自分たちの身分を明かそうとはしなかった。
それに一昨日、春貞と幸江を襲った際に肩の骨を折られてお縄になった男は治療を受けている途中で舌を噛み自害した。
ただし昨日手足を切られて捕らわれた男たちのうち、その持ち物から忍藩の勤番であることが察せられた。

翌朝春貞は小石川養生所にいた。
朝餉の前に真剣を使い、身についた柳生新陰流の動きをひとつひとつ確かめるように何度も繰り返していた。
「春さん、朝餉の支度ができましたで」
賄中間の八重が薬園脇の空き地まで知らせにきた。
「すまねえ。忙しいときに世話をかけるな八重さん」
「いえいえ。そういえばさ、今朝はお嬢様のお姿がないね」
八重は春貞と並んで養生所までの短い道を歩いていた。

「ああ、幸江はな、母上と太子堂のお糸さんとで祝言の衣裳をな、決めに駿河町の越後屋に出向いておる」
「そうでしたか。そうしたとき旦那はご一緒しませんので」
八重は春貞の返事をあらかじめ承知の上で和やかに問うた。
にやりとした春貞は、
「八重さんならすでに俺の言わんとすることなど分かっておろうに」
といいながら、
「まあ、俺がついて行ったところで何のつっかえ棒にもならんからな」
春貞がそういうと八重は、
「旦那。それでも女子は好きな人とそうした大事なときに一緒にいたいものです
だ。女子の斟酌をさ、考えてあげんと嫁さんに逃げられるよ春さん」
「そういうもんか。これから幸江と行き違いがあったら八重さん、お前さんに相
談することにしようか」
春貞と八重が養生所の裏門を笑いながら潜ると、掃き掃除をしていた弥三郎が箒
を置き、二人に続いて養生所に入った。

朝餉は小川笙船と息子の丹治、本道の林良適、外科の村山自伯、そして眼科の笠原養瑚ら医師たちと春貞および弥三郎が一緒だった。
「春さんや、幸江さんがおらんと些か寂しいな」
笙船がいうと皆が頷いた。
「今日は婚礼の衣装を決める日だと喜んでおりましたが、母上と太子堂のお糸さんが付き添いだそうで、俺の入り込む余地はありませんや」
春貞は思い出したように、
「そういえば笙船先生、お糸さんはもうすっかりよろしいので」
太子堂の主長兵衛の女房お糸は町医者に労咳と診断されていたが、押し込み強盗の難を逃れるため一時家族と共に養生所に避難した。その際に小川笙船や林良適らの診断を受け、労咳は誤診だったことがわかり、適切な治療の結果床上げができていた。
「些か肺に炎症を起こしていたものの労咳ではなかったのですよ春さん」
林良適が笙船の代弁をするように説明した。
うなづく春貞に笙船は、
「ともかく最近はもっぱら笠原先生がお忙しくてな。我らもできる手伝いをしな

くてはと話し合っていたところじゃ」
「眼を患う人が多いのですか」
春貞は笠原養瑚に顔を気向けて問うた。
「お江戸の町はご承知のように吹きさらしですからな。眼科医の立場からすると劣悪の環境でしょうな。先日金杉水道町の定吉親分にそう話をしたら、江戸は湯屋と眼科医が繁盛すると笑ってましたな」
隣に座している林良適が、
「とはいえ笠原先生、栄養が行き届いていないことも大きな要因と聞きましたが…」
笠原は、
「おっしゃるとおりですな。食事と生活環境が我々の体に与える影響は先生方がご承知の通りで、眼科もまったく同じです。それに疫病の後遺症で眼を病む患者も増えてますな。ここに入所している、伊之助という中年の男もその口ですな」
ひととおり眼病の話題が途切れたとき、笙船が春貞に、
「ところで春さんや、例の相模屋の大番頭は見つかったのかな」
と問うた。

「以前先生が言われていたとおり、どうやらすでに殺されているようです」
春貞は茶を飲みながら答えた。
「どうやらというからには遺体が見つかったわけでもないようじゃな」
「はい。伊丹さんが大番頭失踪直後から一年あまりの間、奉行所に届けられた持ち主不明の品々を調べた結果、海岸で拾われたという血の付いた財布がありまして。中にはすでに文字の判別もつかない紙片がありましたが先日それを相模屋の主に見せましたところ大番頭の財布に間違いないと証言しましてな。それに紙片を見て清右衛門さんは中身は分からんがこの紙質は御店で証文に使っている紙質と同じと断言しました」
「ということは、なるほど大番頭は目的を遂げるのを失敗した後、早々に消されたと見るべきか…」
納得したという顔の笙船に春貞は、
「残念ですが、生き証人を捕らえるには至りませなんだ」
と唇を噛んだ。

七

朝餉を済ませた春貞は南町奉行所へ出向く予定だったが、その前に通り道でもある金杉水道町にある定吉親分の店に立ち寄ろうと小石川養生所を出た。
伝通院脇を歩き安藤坂に至ると右に伸びている同心町から一人の男が飛び出し、
「失礼ながらその首巻きのお姿は…松平春貞さまでいらっしゃいますな」
と声をかけられた。
男は三十路を過ぎた頃か、こざっぱりした着流しの裾を尻はしょりしていた。
「あたしは読売屋でござんすが、ちょいと金杉の親分の耳に入れたい話しがございますのでこれから伺うところでして…」
春貞は思い出した。
伊勢屋友三と長崎屋富平の抜け荷の現場を押さえたきっかけだった割り符が入った守り袋を拾ったと偽り、瓦版で伊勢屋の若い衆を誘い出した際の読売屋だと言うことを…。
「おお、確か浅太郎さんといいなすったか」

春貞に名を呼ばれて上機嫌の浅太郎が、
「へい、そのケチな読売屋の浅太郎と申しやす。以後お見知りおきを」
とぺこりと頭を下げた。
「俺もこれから親分のところに出向くところだが、なにか面白い話でもあるのかい」
春貞の誘いに浅太郎は、
「旦那はご承知かどうかわかりやせんがね、あたしら読売屋はお役人から認められた商売ではございませんので、はい。それでもお目こぼしいただきながらほそぼそとまあ商いをしているわけでして。ですから先のようなお手伝いをすることもありやすし、親分のお耳に入れるべき噂話しなどがあった場合は多少なりともお役にたちたいとこうして伺うこともありますんで」
「なるほどな。持ちつ持たれつという奴かい」
春貞はその浅太郎と一緒に定吉の店の暖簾を押した。
「親分はいるかい」
春貞の声を耳にしたお佳が奥から顔を出し、
「あら、春さんいらっしゃい。今日は幸江さんがご一人ではないのね」

と声をかけた。
「幸江は母上たちと婚礼の衣装合わせとのことだ。で、親分は」
春貞が急かすと、
「今朝はご用で朝早くに八丁堀に飛んでいったわ。なにか春さんにも関わることらしいわね」
春貞は横に読売屋の浅太郎がいるので突っ込んだ話しは避け、
「そうか、それなら俺も八丁堀に足を向けようか」
というと浅太郎が、
「旦那。あたしは親分から旦那のことは聞かされておりやす。親分が絶大な信頼をされているお方だと知り、あたしの話しをひとつここで聞いてはくれませんか」
真剣な眼差しで春貞に迫った。
「そうだな。俺も急ぐ用事ではないので聞かせて貰おうか。そしてな、親分に俺から話しをしてもいいぜ」
そういって浅太郎に向かい合った。
浅太郎は商売柄か、とても分かりやすくそれでいてつぼを得た話し方をするが、

その内容は春貞をして驚きだった。
「旦那。あたしら読売屋が瓦版にするネタをどこから仕入れるかご存じで」
そう聞かれた春貞は、
「そうだな、やはり八丁堀や親分たちかい」
と磊落に応えたが、浅太郎は、
「勿論それもございますがね、一番は飛脚屋なんでさあ」
そう応えて春貞の反応を見るように上目遣いで見た。
「ほう、それは知らなかったな。なぜだか教えてくれ」
「旦那は正直なお方ですな。ともかく飛脚屋、いやあたしらにとっては町飛脚ですがね、お上が作られた継飛脚にはかないませんが町飛脚も大坂まで四日で文を届けます。またこのお江戸中も日々沢山の町飛脚たちが駆けずり回っており、そうした中で江戸御符内はもとより他藩の災害やお国の事情といった話しは飛脚たちが一番に耳にするわけでして」
「なるほど。そうした話しをお前さんたちが聞き取って読売にするわけか」
春貞にとっても初めて知る話しだった。
「へい。無論あたしらもタダでは面白い話を聞き出せるわけではございません

で、飛脚たちには相応の礼をしなくてはなりませんがな」
浅太郎はそう前置きした後に、春貞の顔色を伺いながら核心の話しを喋り始めた。
「これは旦那たちのお立場がおありだと承知してますからご返事は結構です。あたしが勝手に喋ることですからな」
話しが長くなりそうだと判断した春貞は、お佳に酒を四、五本頼み浅太郎に銚子を向けた。
「こりゃうどうも、旦那すみません」
舌なめずりした浅太郎は先日南町奉行所付近で斬り合いがあり、数人が切られてその場が修羅場と化したことを述べた。
無論それは春貞と伊丹同心が襲われ応戦した結果だった。
「で、切られた侍のほとんどは駆けつけた八丁堀の旦那方に応急処置され吟味のために奉行所へ連れ込まれたとのことですがね、まだ日が高いうちのできごとです。実はかなりの人たちがその現場を目撃していましてね…」
さすがの春貞も浅太郎の話しに釣り込まれ、再び銚子を浅太郎の杯に向けた。
倒れていた侍のうち腕を切られた男が一人、役人たちが駆けつける前に自分で血

止めをしながらその場を逃げ出したという。
そして浅太郎がいうには見物していたうちの一人に浅太郎の同業者がおり、瓦版のネタになるのではとその男の後をつけたところ、馬場先門内の忍藩上屋敷に転がり込んだのだという。
春貞はつとめて動揺せず自然体の風を装っていたが気持ちは話しの続きを聞きたくて急いていた。
「それは面白い話しだな。よし浅太郎さん、これからの話しがより面白かったらこれをやろう」
春貞は懐から一朱を取りだして銚子が乗っている盆に置いた。
浅太郎はそれにチラリと目配せしながら話を続けた。
「それだけではねえんで旦那。先に申し上げました読売屋からの話によりやすと武蔵国埼玉郡にございます忍藩のお城にここのところ頻繁に忍藩上屋敷におられる御家老様から急ぎの文が届けられているとのことなんで」
「ちょっと待て。なぜ御三家に並ぶ大藩の忍藩が町飛脚など使うのか」
春貞の問いに待ってましたとばかり浅太郎が乗ってきた。
「それはですね、公儀の飛脚に文を託すにはまず己の身分を明かさなくてはなり

ませんや。それがまずいという場合にはよくあることなんでさあ」
その点町飛脚は商売、そうした依頼の場合には通常の値の数倍ふっかけるものの差し出し人の身元には興味はないから相手が名乗らなければ聞きもしないという。とはいえ彼らも客の秘密を守るのが商売であり信用を失えば元も子もないから期待に答えるのだという。
「旦那、それにそうした場合の書状には宛先も送り主の名も書かれてませんし、文の内容も万一誰かに読まれたとしても意味不明に思える書き方をするんでさあ」
そうした文を届ける依頼は普通せいぜい年に一、二回といったところだが、この三月の間で実に十数回もの依頼があったという。
「なるほど。正直俺や金杉の親分たちには面白い話しだが、浅太郎さんはよくその話しを知り得たな」
と聞いた。
「いや馴染みの読売屋になにか面白い話はないかと酒を飲ませたとき、奴らは事の重大性など知りもしないで最近はよい商売があるのだという程度の意であたしに話してくれたわけでして。ただしあたしは先に申しました斬り合いの後で逃げ

帰った侍を追った読売屋の仲間から聞いた話しと合わせますとね、仕事柄耳がぴくぴく鼻がむずむずしますんで」
と杯を重ねた。
「浅太郎さん、ひとつだけ確認させてくれ。忍藩の江戸上屋敷から文が届けられるといったが、先ほど差し出し人の名は聞かないこともあると言ったな。差し出し人は本当に忍藩の家老なのかい」
春貞の問いにすでに顔を赤くした浅太郎は、
「無論あたしには本当のところはわかりやせん。しかしね旦那。町飛脚屋に文を持ってくる侍が、いやね、こいつがどうしようもなく威張りやがるそうで『ご家老の文なので粗相のないように』と繰り返すそうですぜ。ちょうど暇だった仲間が面白がって後をつけたと思ってくださいまし」
「わかった。浅太郎さん、その野郎は馬場先門内の忍藩上屋敷に入ったというわけだな」
春貞の念押しに浅太郎は頷いた。
「わかった。確かに面白え話しだったぜ。その一朱はお前さんのものだ。ただしな、この話しここで忘れてくれ。間違うとなお前さんの命にかかわるかも知れん

のでな」
浅太郎は赤い顔をしながらも一朱を袖に放り込み、こくりと首を垂れた。

八

春貞はその足で南町奉行所の伊丹鉄太郎を訪ねた。
残念ながら伊丹は留守だったが四半時ほど待ったが戻ってこなかったのでその足を駿河町の越後屋に向けた。
沙代と太子堂の女房糸に付き添われた幸江がまだ婚礼衣装を選んでいるのではないかと思ったからだ。
その頃、幸江たちは越後屋の隠居、三井八郎右衛門のおかげで手際の良い品選びができたため越後屋を出たところだった。
その日の幸江は二本差し姿ではなく気品のある小袖姿だったが「あれー」と女の悲鳴が聞こえたと同時に一町ほど先にある小間物屋の店先から娘を抱えるように

して片手に匕首を持った若い男が飛び出してきた。
「こいつの命が惜しくば違約金二〇〇両ここへ持ってこい」
血走った目付きで男は匕首を娘の喉元に向けた。
まだ明るく人通りは多かったものの、匕首を突き付けられた娘を危惧して助けようとする者はいなかった。
それを知った幸江は躊躇なく動いた。
「お、お嬢様」
「幸江さん」
太子堂のお糸と沙代は慌てた。
幸江は男の前一間ほどまで歩みより、
「刃物をお捨てなさい」
と声を出した。
「なにをっ。女の出る幕ではねえ。こいつがどうなってもよいのか。ええっ」
男は匕首を幸江に向けて威嚇した。
幸江は廻りの人たちが思いもしない行動に出た。
臆することなく男にすっと近づいたのだ。気配もなく眼前に近づいた女に一瞬た

じろいだ男は匕首を幸江に突きだした。
「ああ」
お糸の口から悲鳴が上がったとき、匕首は空を飛び男は腕を折られたらしくその場を呻きながら転げ回った。と、男が抱きかかえていた若い女の身は崩れ落ちながらも幸江の腕の中にいた。
「もう大丈夫ですよ」
幸江の優しい声を聞き、初めて女は声を上げて泣き出した。
小間物屋の主人が飛び出し、女を抱えながら何度も何度も幸江に頭を下げていた。
「噂にはお聞きしておりましたが、なんと幸江さま。お見事でございました」
興奮冷めやらぬお糸が感嘆の声をあげると沙代は、
「春貞自慢の嫁ですよ」
と幸江の着物の襟元と裾を整えながら笑った。
振り返れば今し方暇(いま)をした越後屋の主をはじめ、近所の御店の人々が歓声を上げて三人を見送った。

もうひとりその様子を見ていた男がいた。
幸江の夫となる春貞だった。
「ほう。あれは立派な無刀の技よ、いつ身につけたのか…」
と声をかけるのも忘れて見惚れていた。

春貞は幸江らと合流した後、太子堂のお糸と別れ三人で春貞の屋敷に向かった。
幸江は私邸をでるとき、今夜は春貞の屋敷に泊まる旨を明言してきたので家族となる三人で歩くことに喜びを感じていた。
「母上、籠を呼びましょうか」
幸江は沙代の足を心配して問うたが沙代は、
「こうしてゆるりとならまだまだ歩けます。というより春どのと嫁御の幸江さんと一緒に歩ける日が来るなど婆は思っても見ませんでしたからな。嬉しいのです。楽しいのです」
その歳を重ねても美しい横顔を眺めながら幸江は、
「わたしもです」
といいながら沙代の手を握り、もう一方の手で春貞の手を握った。

武家の娘、それも御三家筆頭格の尾張藩江戸家老の一人娘として育った幸江には世間の眼といった拘りもなく至極自然な行為だったが、道行く人々の目には好奇に映った。

さすがに春貞は照れたが沙代は頬を紅潮しながらも嬉しそうだった。

第五章　事の真相

一

翌朝春貞と幸江は二人揃って南町奉行所に向かった。
竹屋の渡しで山谷堀にあがり、そのまま南町を目指そうとしていたとき、前方から伊丹鉄太郎がこちらに向かってくるのに出くわした。
「おお、春さん幸江さんおはようござる」
「おはようございます。いかがされましたか」
どうやら伊丹たちは養生所に春貞がいないことを知り、屋敷まで出向こうと定吉とここまで来たところだという。
「春さん、昨日はわざわざ奉行所まで来てもらったそうだが留守をしていて悪かった」
「いや、ちょっと耳に入れたい話しがあったので寄ったまでです」

「俺もな、例の込み入った話がしたいのだがまさか立ち話もできまいて」
ということで春貞の勧めで春貞の屋敷に戻ることになった。
「話しが話しだ。そこいらの飯屋で口に出せることではないので春さん助かる」
伊丹はよほど春貞の屋敷が気に入ったのか上機嫌だった。
「母上、戻ってきた」
春貞が声を上げると沙代が顔を見せ、
「あらあら、早うお帰りですね」
と冗談をいいながら四人を誘った。
茶菓子と茶を運んできた沙代に伊丹は、
「沙代さま、お手数をかけて済まないが他では話せぬことなのでこの場をお借りする。後はどうぞ気を遣わんでください。そうそう。沙代さま、これはそれがしを手伝ってくれている十手持ち、金杉の定吉です。定吉、こちらは春さんの母御の沙代さまだ」
伊丹が紹介すると沙代は、
「いつも春どのからお聞きしております。ご厄介をおかけしているようで申し訳ございません」

と優雅に頭を下げたから定吉は慌てた。
続けて、
「この屋敷がお役に立つならいつでもお使いになってくださいまし」
沙代がいうと春貞は、
「母上、そんないい方をなさると伊丹さんはここを番所代わりにするぜ」
と笑った。
沙代が席を外したので春貞は昨日読売屋の浅太郎から聞いた一連の話しを伊丹と定吉に話し出した。
伊丹は春貞の話しに口を出さず最後まで聞いていたが、
「春さん、俺たちにもひとつだけ進展があったんだ。春さんと俺を襲った連中のうち二人が自白を始めたんだ」
と呟いた。
「それは」
春貞が唸りながら問うた。
「忍藩の禄を食む者だと白状したんですか」
「そうなんだ。奴らはどうやら馬廻番のようなんだが、だとすればその組頭は大

概が家老かその直属の者に違いないや。奉行所に留め置かれている奴らにしてみれば治療を受け完治しても手や足がこれまでのように使えねえからお役目を務めることはできんだろう。それにな、実際問題として藩に戻ったとしても闇に葬られる運命だと知ったということよ」

「なるほど。それで白状する気になったのか」

春貞は頷いたが、

「しかし、伊丹さん。彼らが藩の勤番としてもだ、知らないとか自藩とは無関係だと言ってしらを切るのも彼奴らの常道手段だぜ」

「そうだな。トカゲの尻尾切りで終わっては何にもならんが、まさか元老中で忍藩当主の首を取るわけにもいくめいな」

春貞と伊丹が顔を見合わせた。

男たちの苦渋の表情を見て幸江が口を開いた。

「春貞さま。黒幕をお縄にできないとしても一番肝心なことは今後得田新之助様が襲われることのなきようにできれば宜しいのですよね」

といった。

「それだ…。いや、いつものことだが幸江さんにはまいった」

伊丹が膝を叩きながら大きな声を出した。
「俺たちは黒幕にしろ手下にしろ、市井で人を襲い、商人を利用して殺害までした奴らをお縄にしたいとばかり考えてきたが。幕閣や老中といった名が出ては手も足も出ねえ。しかし幸江さんの言われるとおり、ここにきて重要なのは二度とこのようなことが…上様が襲われないようにできるかどうだかぜ、春さん」
「確かにな」
そのとき定吉が、
「旦那方、そんなに弱気になられてはこれまでのことが水疱にきしてしまいますで」
と慌てた。
「いや親分、諦めるわけではない。しかしこの件、どうにも状況から判断せざるを得ない話しばかりで確証が得られないのが難だな」
伊丹が茶碗に手を伸ばしながら弁解した。
そのとき、襖の向こうから沙代が、
「失礼いたします。春どの。大切なことを言い忘れましたが、文が届き、徳川継友様が参勤で江戸にご到着とのことで春どのに会いたいとの仰せでございまし

た。ご返事をお願いしますよ」
「わかりました母上…」
と応じた春貞はいきなりかっと目を見開いた。
「どうした春さん」
伊丹らの声をどこか遠くに聞きながら春貞は最後の手段ともいえる策を考えていた。

二

忍藩主阿部正喬も参勤の挨拶の拝謁のため西湖の間に控えていた。奏者番の使いが、
「阿部どの、これへ」
と順番が来たことを知らせに来た。
些か緊張しながらも立ち上がった。正喬このとき五十二歳、老中を辞したとはい

え矍鑠たる偉丈夫として知られていた。ただその表情には些か陰を帯びていたことを本人は知り得ていたかどうか。
阿部正喬が白書院に平伏すると「阿部か、よくきた。面を上げい。許す」と命じた。
「ははっ」
正喬が頭を上げたとき、その場にはすでに一人壮年の男がいた。
「正喬。異例ではあるが余の思いつきでな、尾張の継友も参勤でのう…よい機会故な、そちに紹介しようと思うてな」
吉宗が磊落にいった。
「はっ。ありがたき幸せ」
阿部正喬は再び平伏した。
阿部正喬は宝永七年（一七一一）四月に老中となり、在任中は正徳金銀鋳造の総奉行、七代将軍徳川家継と八十宮吉子内親王の婚姻の総奉行を命じられたり、長州藩と徳山藩の争論の審議を担当するなど名門としてその存在感を不動のものとしていた。
しかし目の前にいる徳川継友は御三家筆頭格であり、吉宗と八代将軍を争った血

筋であり別格だった。
「阿部どの、ただいまも上様がな、忍藩は財政厳しきおりにてもよう藩政の舵取りをしておるとお褒めのお言葉があったところでした」
継友はこれまた磊落に語りかけた。
「恐れ入ります。我が藩は政治的・軍事的にも畏れ多くも幕府の重要拠点と見なされておりますでな。上様のご期待に添うよう下々にも倹約を徹底させ努めております」
正喬が自信満々に答えたとき、吉宗が口を開いた。
「実はな阿部。継友がな、お主に聞きたいことがあるというで、わざわざ来てもらった。ゆるせ」
御三家筆頭格尾張藩六代藩主である徳川継友様が吉宗に頭を下げた後に、
「阿部どの。過日の事じゃがそれがしの血縁である松平春貞がお手前の勤番侍たちに市中で待ち伏せされてのう、手傷を負ったそうじゃがご存じか」
阿部正喬は自分がなぜこの場に居るのかを初めて知り、血の気が引いていった。
それでもなんとか自然体のつもりで、
「いや、存じませぬな。尾張様、なにかのお間違えではございませぬか。失礼な

がらその春貞どのとか申すお方、お目にかかったこともございませんしな」
「春貞がな、得田新之助と申すお方が市井で襲われているときにたまたまお助けしたそうな。それを逆恨みしたと捕縛された者が自白しておるのですがな」
「それが我が藩とどのように関わりますのやら…」
阿部が必死に抗弁した。
「これはあの町奉行大岡越前守忠相殿のお取り調べであり信頼の置ける報告だと考えるがいかに。また斬り合いの場から腕に傷を負った侍は間違いなく江戸城の馬場先門内の忍藩上屋敷へ逃げ戻ったことを見ていた者もいるのですがな」
阿部はなんとかこの場を逃げ切ろうと考えていた
「身共はその得田なにがしという人物も存じておりませぬ」
緊張の余り阿部正喬は墓穴を掘った。
「たわけ。余の前であからさまな虚言を申すか」
「い、いや、決して…」
「余が八代将軍となったおり、お主は老中であった。余が得田新之助と名乗り市中に出歩く事を知り、諫めたのは阿部、お主だったではないか。知らぬわけはあるまい！」

吉宗は珍しく大声を出した。
阿部は畳に頭を付けて平伏するしかなかった。
徳川継友は、
「上様、お怒りはごもっともですが誰しも勘違い、物忘れということがございましょう。ただし阿部どの、奉行所に捕らわれている忍藩勤番と申す数人の口から自白が取れ、それらの者達がお手前の江戸家老から命を受けたと証言しているそうな」
一呼吸入れた継友は、
「阿部どの。事の重大性はおわかりですな。貴藩の侍が上様と知り、得田新之助様を亡き者にされようとしたこと明白なのじゃ」
継友の言葉もいささかきつくなったが、再び温和な物言いで、
「しかし、他人事でなく大藩ともなれば人心をまとめ意思の疎通を図ることはなかなかに難しいものですな阿部どの。身共も昨年上様にお小言をいただく大失態をしでかしましてな。ともあれ今回のこと、藩主である阿部どのがご存じないとすれば江戸家老…確か藤波平左衛門と申したか、その江戸家老の一人走りだったようですな、上様」

と阿部正喬の逃げ道を作りつつ吉宗の同意を求めた。
さすがの阿部正喬も平伏したまま体が震え手足が冷たくなるのを自覚していた。
なんとか失禁せずにいたのは老中だった誇りに違いない。
「継友の取りなしじゃ。わかった、阿部正喬、お主の江戸上屋敷でなにがあったかきつく取り調べるように。大儀であった…下がってよい」
吉宗はそう命じた。
這々の体で白書院から退出した阿部の姿が見えなくなったとき次の間の襖が静かに開かれた。
そこには南町奉行大岡越前守忠相と松平春貞が平伏していた。
「春貞どの、あれでよろしいか」
継友は春貞に同意を求めた。
「ははっ、まことにご無理なお願いを快くお引き受けいただきありがとうございます」
春貞は平伏しつつ礼を述べた。
吉宗も笑いながら、
「どうだ忠相、継友と余のにわか芝居、なかなかの物であったろうが」

「御意」
四人は高らかに笑い合った。

三

参勤で江戸に在していた継友から春貞に会いたいという文が届いたと知った春貞は最後の手段を思い立った。
幸江がいみじくも言ったように、いま一番重要なことは二度と得田新之助こと八代将軍吉宗の命が狙われることのないようにすることだった。
幾多の斬り合いがあったし相模屋の喜市郎の命も奪われたと確信していた春貞たちだったが、ことが城中や大藩である忍藩に関わるとなればうかつに手をだすことはできなかった。
春貞は伊丹同心や定吉らの調べをあらためて詳しく文書にして大岡忠相に差し出した。そして春貞が考えている策を話し合った結果、大岡はともかく上様にご報

告の上で許可をいただく努力をすると約束してくれた。
吉宗にしても自身のことであり、信頼する忠相ら町方の調べの一部始終に驚きながらも春貞の考えた策に許しをあたえた。
そのことを受けて春貞は初めて久しぶりに市谷にある尾張藩江戸上屋敷へ徳川継友に会いにいった。
春貞は熨斗目小袖に半裃姿、帯には印籠、手には白扇、そして腰には父綱誠が春貞に残したただひとつの形見、粟田口吉光作の脇差しを帯びていた。ただし首には相変わらず椿の花をあしらった手ぬぐいで首を巻いていた。
大広間に通された春貞は二年ぶりに徳川継友と会ったが、思えば二年前の体面は門外であり、継友は乗物の中だった。
大広間にはすでに継友が座しており、その近くには江戸家老永井主水が和やかに向かえてくれた。
平伏する春貞に継友は、
「さあさあ春貞どの、そのような挨拶はわれらには不要、ささこちらへ」
と自分の座す隣へと誘った。
「殿、ご身分が違い過ぎますのでここで失礼いたします」

春貞がそう遠慮すると継友は真顔になり、
「春貞どの、余をそう虐めんでくれ。身分などすべからく世の中を回す方便ぞ。その世の中の廻り方が少し違えば尾張六代藩主、あるいは七代藩主は春貞どの、其方だったのかも知れんのだ」
覚悟した春貞は、
「はっ」と平伏して継友ににじり寄った。
「まずは昨年の騒動に関してあらためて礼を申す」
御三家筆頭格尾張藩主の徳川継友が春貞に頭を下げた。
「殿、その話しはすでに終息いたしております。また御家老からも丁重なるお礼をいただきました。ご放念ください」
春貞は隣に座している永井主水に顔を向けながらいった。
「殿、お忙しい御身であること、十分承知しておりますが春貞、殿に折り入ってお願いがございます」
春貞がいうと継友は「なんなりと」と膝を乗り出したが、主水は心配そうな顔を隠さなかった。

春貞は一年もの間、得田新之助として市中見廻りに出た吉宗が二度にわたって刺客に襲われた一部始終を簡素に話し、その背景が忍藩にあるということを述べた。

継友は驚愕しつつもそれが自身とどのように関係するのかと訝しい顔をしたが、春貞はこの策はすでに町奉行大岡忠相から上様にお許しが出ていることを説明し、藩主阿部正喬の前で一芝居打ってもらえないかと願った。

主水の顔色を伺いながら継友は、

「上様がご承諾されているとなれば是非もない。それにな、余は春貞どのに大きな借りがある。多少なりとも借りは返さなければならんでやってみようではないか」

と快諾してくれたのだった。

「ところで春貞どの。先ほど主水から報告を受けたが、主水の娘と祝言をあげるそうだな」

継友はにこやかに問うた。

「はい。おかげさまでそうした仕儀と相成りました」

春貞の物言いに継友は、

「そうした仕儀か。春貞どのらしいよのう。目出度い事じゃ。政務に問題がなければ余も祝いに駆けつけたいものよのう」
と磊落にいったが、春貞と主水は市井の者達が仕切ってくれる内輪の婚礼故と固辞すると継友は残念そうな顔をした。
「まあ、余との祝いの場は別途考えようか。余が春貞どのの屋敷に向かうとなれば大人数にならざるをえまい。それでは迷惑をかけるであろうからな」
そういった後で、
「なにか祝いをしたいが所望するものはあるか、春貞どの」
「はい。上等の祝い酒を頂戴できればありがたき幸せ」
春貞が願うと継友は、
「欲のないお人よのう」
と笑った。

四

それから十五日ほど経った小雨が降る日、春貞は大岡忠相に呼ばれ幸江と一緒に南町奉行所にいた。
それは永らく探索を続けていた得田新之助襲撃および相模屋大番頭失踪騒動の幕引きを宣言する日だった。
春貞と幸江は南町奉行所の黒渋塗り長屋門（正門）をくぐり石畳を通って正面玄関まで進むと伊丹同心らに迎えられた。
通された広間には騒動を調べた同心五人と与力佐竹弥五郎がすでに座していたが春貞たちが到着するとまもなく大岡忠相が入ってきた。
「長らく皆に苦労をかけたが、得田新之助様襲撃および相模屋大番頭失踪騒動の幕引きを御奉行から申し渡すので心得るように」
と佐竹弥五郎が静かにいった。
無論同心たちは伊丹以外、得田新之助という人物に出会ったことはないが皆それが八代将軍吉宗であることは知らされていた上の探索だった。

大岡は、
「まず皆に申し渡しておくことがある。一昨日登城した折り知らされたことじゃが、忍藩江戸家老藤波平左衛門殿および用人浅井半兵衛殿が病死されたとの届け出があった」
一同にざわめきが起こった。
大岡は一同を見回して大きく頷いた。
藤波平左衛門と浅井半兵衛の死は諄く説明を受ける必要もなく、ここにいる全員にとっては詰め腹を切らされたのだと知り得ることだった。
その後、白書院での緊迫した出来事の概要は春貞と大岡から知らされたが、同心米倉小太郎は「これで大番頭喜市郎も成仏してくれるでしょうな」と呟いた。
最後に大岡は皆の前で春貞に向かい、
「この度の騒動は探索が難しく、かつ後味の悪いものであったがこちらにおられる春貞どののご尽力により上様もご納得された結末を迎えることになった。春貞どの、あらためて御礼を申し上げる」
と頭を下げ、与力・同心たちは春貞の春貞たる所以を思い知らされることになった。

その日の午後、春貞と幸江は金杉の定吉の店にいた。
十手持ちは奉行所が雇った者ではなく同心たちが自費で雇った者たちだったから奉行所そのものにも立ち入ることはできなかった。
春貞らはこれまでの定吉の労を報いようと伊丹同心と共にここにやって来たのだった。いわばひとつの大きな探索が終わった仲間内の祝いの場であった。

定吉の女房お勢は得意の料理を嬉しそうに振る舞ってくれた。
「さあさあ、お酒も十分にありますからね」
そういって台所に消えた。
定吉が感慨深げに、
「伊丹の旦那。忍藩の家老と用人が亡くなったことで幕が下りたということですが、騒動のあれこれはわっしたちがこれまで探ってきたものに間違いはなかったわけですな」
というと伊丹も、
「そういうことよ。ただし南町にしても公方様にしてもだ、落としどころが難し

い騒動だった。しかし春さんのおかげで幕引きができた」
こちらもため息交じりに呟いた。
「しかし、公方様の前で尾張藩主の継友様に一芝居打っていただくなど、春の旦那でなければできようもないですからな」
定吉が感嘆しながら杯を重ねる。
「まったくなあ。御奉行も驚いておられたわ」
伊丹が笑った。
春貞は和やかに酒を口にしていたが幸江が、
「伊丹さま。これで得田新之助様が市中で襲われる危惧はなくなったのでしょうか」
というと、
「そのことよ」
伊丹も煮物をつつきながら、
「まあ俺たちにはどうにもできないことだが、心配事は少なくなったというわけだな。できることならお偉い方々には不用意に市中へお出ましいただくのはご遠慮いただきたいものだ」

と苦笑いだ。
「違えねえ」
春貞も杯を上げながら答えた。
「そうそう、伊丹さん、あれを」
春貞がいうと伊丹は懐から紙包みを取りだして定吉の前に置いた。
「旦那、なんです、これは」
訝しい顔で伊丹を見る定吉に伊丹同心は、
「春さんのおかげで一件落着…といってよいかはわからんが、我らの役目は終わった。で、な。俺たちは御奉行からご褒美が出たんだ。そこでこれはな俺と春さんとのほんの気持ちだ。親分ご苦労だった、これからもよろしく頼むぜ」
そういうと、
「だ、旦那。春さん」
定吉は涙を溜めて嗚咽した。
そのとき奥からお勢が飛び出してきた。
「お前さんご褒美ですってさ。丹那、春さん、ありがとうございます」
お勢は盆に置かれた紙包みを両手で畏まりつつ受け取りながら、

「お前さん、あら、小判だよ」
と飛び上がり、
「お勢、後で金次らにも裾分けをたのまあ」
定吉は申し訳なさそうに鼻を擦った
「春貞さま。ひとつ分からないことがあるのですが、忍藩と大番頭はどこでどのように結びついたのでしょうか」
幸江がそう春貞に問うた。
春貞は、いまとなっては想像の域を出ないと断りながら、喜市郎が借財の返却を求めに忍藩下屋敷に出向いたとき、用人と世間話でもした中で気を許したか、たまたま喜市郎の出目が武士であったこと、家が取り潰されて一家離散し、自分はこの江戸に出てきて奉公をはじめたといった昔話を語ったのではないか。
それを聞いた江戸家老が喜市郎を利用し市中見廻りの際の将軍吉宗暗殺を企んだということであろうと話した。
ただし、喜市郎は果たして得田新之助が将軍吉宗であることを承知だったのか非かはいまとなっては分からない。
養生所で死んだ刺客は得田新之助なる人物が吉宗であることを示唆していたが、

これは喜市郎から聞かされたというより得田新之助という男を追い狙っているうちに気づいたのかも知れないと春貞は説明した。
「大番頭にしてもあの労咳の刺客にしても、いいように操られたということでしょうか」
幸江がぽつりと呟いた。
「そこなんだ、春さん。喜市郎が得田新之助を公方様と知ってことを起こすだろうかと俺は常々思っていたんだ」
伊丹がいうと定吉は、
「雲の上のお方たちなら人の良い町人ひとりをだまくらかすなど赤子の手を捻るより簡単なのかも知れやせんね旦那」
と伊丹と春貞に同意を向けた。
それまで静かに話しを聞いていた金次が、
「これで仏さんたちも納得してくれやすかね」
としみじみいった。
定吉が、
「仏さんたちとはなんでえ」

と聞くと金次は、
「だって親分、死んだのは喜市郎だけではありませんぜ。上役の命とはいえ丹那や春さんらを襲って返り討ちになった奴らもおりまさあ」
そういうと伊丹も、
「違えねえ」
と杯をぐいっと飲み干した。

五

それから十日ほどたった雨の日、春貞と幸江そして伊丹同心は日本橋の両替商の大店相模屋を久しぶりに訪ねた。一連の騒動の調べが終わったことを知らせるためだった。
相模屋清右衛門は自身への疑いが晴れ、太子堂主の長兵衛と共に春貞・幸江の婚礼準備に奔走してくれていたから最初に訪問したときのように堅苦しくギクシャ

クしたものはなかった。また春貞たちは清右衛門が誠実な人物だと知り、刺客に襲われた旗本とこれまで話していた人物は、実は八代将軍吉宗だということを伝えていた。

「これはこれは伊丹さま、春貞さま、幸江さまどうぞこちらへ」

何度か話しを聞いたことのある客間に三人は通された。

「主人、今日はな、例の騒動のお調べが終わったことの報告じゃ。ことの糸口がお主の話でもあったでな、礼も言わねばならぬと春さんと幸江さん共々罷り越した」

伊丹としては奉行所同心の立場からは終わった一件ではあったが、騒動に関わった人たちにとって心の傷は深く終わりがないことも数々の経験で知っていただけに満面の笑顔というわけにはいかなかった。

「伊丹さま。忍藩江戸家老様と用人様が急死された由にございますな」

さすがに商いにおいて幕閣にまで影響力を持っている清右衛門だ。

「知っておったか」

しばし清右衛門の顔を見ていた春貞が、

「ということで清右衛門さん、お上はこの騒動が幕引きになったことを明言した

でな知らせに来たのだ。まあお主たち当事者にとっては不満足なあれこれもあるだろうがな」
伊丹の思いを代弁するような春貞の言葉に清右衛門は深々と頭を下げた。
「いまだに何がどうしてこうなったのか分からないことだらけですがな、お調べのとおり事の黒幕がその御家老なら喜市郎も草葉の陰で喜んでいることと思います」
そういいつつ顔を上げ、
「とはいえその喜市郎も大きな罪を犯しましたな」
と悲しそうに呟いた。
「分かっていることだけだが、御店から暖簾分けにと用意された二百両を持ち出しただけでなく忍藩の借用証文二枚も持ち出した。そして何よりもな、浪人を雇って旗本のご子息を亡き者にしようと依頼したわけだからな」
春貞に指摘され、清右衛門は無言で大きく頷いた。
「ただし、春貞さま…」
幸江が口を開いた。
「お話しの内容ひとつひとつはその通りだとして、大番頭が何をどうしようとし

たのか、あの藩からどのような指示依頼を受けたのかなどは分かりませんのか」と問うた。

春貞の代わりに伊丹が、

「幸江さん、主人、いまとなっては残念ながらすべて明らかにすることは無理だ。しかし綻びだらけにしても話しは大分見えてきたと思うのだ」

伊丹はこれは奉行所の記録に残されることだと断りながら、相模屋の大番頭喜市郎の失踪と旗本の子息（得田新之助）へ刺客が向けられたことを総括した話しを始めた。

それによれば、ことの発端は相模屋は忍藩江戸下屋敷から度々の金子借用依頼があったし事実貸した額はすでに大金となっていた。

忍藩は「老中の藩」として政治的にも軍事的にも幕府の重要拠点と見なされていたが、このお役目を全うするため藩主家の経費増加にもつながり、財政は逼迫し年貢も重くなっていった。

また藩主阿部正喬は享保二年、将軍吉宗との確執から老中職を辞したが、近年その老中職に拘るようになったという。それは単に権力欲だけでなく老中の力を持って藩政を少しでも良い方向に持って行きたいという思いだったに違いない。早

い話し、老中になれば金が自然に集まって来ると期待したのだ。
しかし阿部が老中に返り咲くには吉宗の存在がどうしても邪魔だった。阿部と江戸家老は顔を合わせる度になにか良策はないかと堂々巡りの策を話し合っていたに違いない。
そこに相模屋の大番頭喜市郎が現れた。
喜市郎、いや相模屋として忍藩は上得意であることは間違いなかった。貸金も膨大であったがその利息や元金の一部はとにかく約定どおりに支払ってくれたからだ。
大番頭としての役目柄、忍藩下屋敷に何度も通ううち、用人と下世話の話しもするようになったと思われる。そうした中で自分の出目は紀州藩の侍だったが父の失態でお家は取り潰され一家は離反となったということを喋ったのだろう。
「忍藩の用人や家老がどのような甘い騙りで喜市郎を誘い込んだのかはわからんが」
そう言いながら伊丹は話しを続けた。
「大番頭、その方先日の話しで紀州の出だといったな」
「さようでございます」

「ちょっとな、お前の話が気になったので調べさせたのじゃがここだけの話し、御政道の誤りでお主の父親は腹を切ったことがわかったのだ」
そんな誘い方ではなかったか。
喜市郎は子供でもあったし当時のことはほとんど記憶になかったが、父の無念さ母の悲しさだけは心に染みついていたと思われる。
「なるほど、忍藩としては試みでもよいからこの話しを真実のこととして喜市郎を焚きつけことの成就の火種にしたいと考えたわけですか」
幸江が唇を噛んだ。
頷きながら伊丹は、
「喜市郎の父が腹を切ったのはお調べによればだ、元禄六年あたりらしい。これが騒動の発端とすれば重要な点だが、もしそうなら…上様はまだ九歳であらせられた。お誕生は貞享元年だでな」
「しかしそうなると上様と喜市郎の親父の接点がどこにあるのか、まああればの話しだがな」
春貞もあらためて首を傾げた。
「上様は確か元禄十年（一六九七年）十四歳で越前国丹生郡三万石を賜り、葛野

藩主となられたが、それ以前は江戸の紀州藩邸に移り住まれていたはずなのだ」
春貞がいうと清右衛門が、
「畏れ多いことですが、その頃の上様は新之助様といわれ大層活発なお子だったと漏れ伺っておりますがな」
春貞に向かっていった。
「清右衛門さん、大層活発とは控えめな言われようだ。本当のところは手に負えない暴れん坊だったそうだぜ」
春貞は笑った。
「しかし、ご気性の荒いお方という噂は父主水に言わせますとまったく逆だと常々申されてますが。気配りの利く温和なお人柄だと聞かされております」
幸江はそう言い切った。
徳川吉宗は宝永二年（一七〇五年）に二十二歳で紀州徳川家を相続し、第五代藩主に就任する。藩主に就任する際、将軍綱吉から偏諱を授かり、それまでの頼方（よりまさ）を吉宗と改名する。そして宝永七年（一七一〇年）四月に紀州入りしている。
ちなみに享保元年（一七一六年）に八代将軍に就任し結局、紀州藩主としての治

世は一〇年六か月だった。
「そうだな、上様が紀州藩主時代の逸話を聞いたことがあるが、宿直の藩士が酒を飲んで遊び歩くということが発覚したそうだ。本来なら重いお咎めがあってしかるべきだが、上様はこの藩士が普段武道に熱心であると聞き『人には短所もあれば長所もある』と許されたそうだ」
春貞がいうと伊丹も、
「俺も聞いたことがあるな。その裁きに藩士たちが感激し一層武道に励むようになっただけでなく宿直で酒を飲む者もいなくなったとな」
今度は幸江が口を開いた。
「これまた父から聞いたことですが征夷大将軍となられてからのこと、大奥で見初めた女子に側室になるよう声をかけられたそうですが、女子は親の許嫁がいると断ったそうです」
「そんなことが許されるものですかな」
清右衛門が驚いた。
「このとき上様は怒るどころか『女子の鑑である』と褒められ、三百両の祝儀をお与えになり暇をだされたそうです」

そう聞いた相模屋清右衛門は、
「となると喜市郎の父御と上様の接点がどのへんにあるのか、まったくわかりませんな」
と首を傾げた。
そのとき、襖の向こうから、
「旦那さま、ご用意ができましたのでお持ちして宜しいですか」
奥女中の民が声をかけた。
「ああ、もうそのような時刻でしたか」
といいつつ、
「今日は手前どもにとって大きな区切りとなる日。昼餉を用意させましたで是非ご一緒していただけますよう」
と頭を下げた。
春貞と伊丹は顔を見合わせたが屈託のない幸江は
「嬉しいです」
と答え、伊丹と春貞は苦笑するしかなかった。
ただし箱膳には酒も用意されていたが、伊丹はまだ役務中だからと手をつけなか

った。

話しは昼餉の間も続けられた。

「まあすっかり商人になりきっていた喜市郎だ、武家のあれこれに詳しいとも思えん。例えば父親が紀州藩の藩士だとして江戸勤番のとき、どこかで新之助様とすれ違いお怒りに触れたという可能性だってないこともないな伊丹さん」

「そうなのだ。歴とした忍藩という大藩の用人たちからそう言われれば実直な喜市郎はそれを信じたかも知れんな」

春貞が応じると清右衛門も大きく頷いた。

幸江は、

「でもまだわからないことがあります。喜市郎さんはどこであの刺客と知り合ったのか、本当に喜市郎さんは得田新之助様が上様であると知っていたのか…」

伊丹は関心した風に幸江を見ながら、

「幸江さん、鋭いな。南町でもその辺をいろいろと追ってみたが喜市郎は間違いなく仏になっているだろうしそもそも一年も前の話だ、結局分からないのだ」

と呟いた。

清右衛門が、
「上様を暗殺されようとしたお侍様が書き残した文に『依頼主は相模屋主清右衛門』とあったわけでしたな」
春貞が頷き、
「そしてな、その刺客は己が切ろうとした得田新之助という男が実は将軍吉宗であることを知っていたんだ。養生所に寝かされていたときそう呟いたでな」
しばらく考えに落ちていた清右衛門は、
「春貞さま。そのお侍様ですが己が襲う相手が公方様だと知っていたとはいえ、それは喜市郎が知り得て教えたとは限りませんな」
「どういうことだ」
伊丹が箸を置いて座り直した。
「はい。これは事情を知らぬ商人風情が申すことですからお気に障ったらお許しください」
と断りながら言い出した。
まず喜市郎に親の敵として狙う人物が公方様とはいかにも不自然であると清右衛門はいう。

「もし手前が喜市郎の立場だとしてそうした話しをされたとしてもいくら市井に姿を変えてお歩きになっているとはいえ畏れ多くて実行できないと思います」
清右衛門は、忍藩の用人たちにしても喜市郎の親の敵を作り出すにしても現公方様というのは突飛すぎると主張した。
「ふむ、面白いな。続けてくれ」
伊丹が急かした。
忍藩としては得田新之助と名乗る侍が実は八代将軍吉宗であることは十分に知っていたしそもそも吉宗の命を奪うのが目的だった。だから得田新之助と名乗り時折市中を歩く男の正体を喜市郎に吹き込む際は、例えば紀州の殿様でも家老でもあるいは別の藩のお偉方でも誰でも良かったのではないか。
清右衛門はそう自説を語った。
「主人、お主は商人にしておくのは勿体ない人物かも知れんな」
伊丹が関心しながらも、
「確かにその方が現実的だし、先ほど話し合った喜市郎の家の没落時期に合わせていかようにも芝居を打つことができるわな。要は昔の敵は誰でも良かったわけだな」

とため息をついた。
「そうだとすると俺も一案浮かんだぜ、伊丹さん」
春貞がにやりとしながら言い出した。
「俺たちはあの刺客が得田新之助様を上様だと知ったのはお命を縮めようと金を出した喜市郎がそう話したからと思い込んでいたがな、清右衛門さんのいうとおりそうではなかったのかも知れないな」
「あの侍は腕も立ちましたが時代が時代ならひとかどの人物だったのかも知れません。春貞さま、あの刺客はお城を出た得田新之助様を追い、刃(やいば)を向けるときをずっと狙っていたはずです。もしかしたら、い組の頭のところに行かれた際にもずっと後をつけたのかも知れません。だとすればそうした追い、襲う機会を狙っている中で得田新之助様は、実は公方様だと初めて知ったのではありませんか」
そう言い切ったのは幸江だった。
「ううん、幸江さんも嫁にいかせるのは勿体ないな、八丁堀に欲しい人材だぞ春さん」
伊丹が関心しながら冗談をいったが、春貞にとっても伊丹にとっても納得がいく

話にまとまってきたことが察せられた。
「なるほど、あの侍は上様だと知らずに得田新之助様を追っていたが、その過程で正体を知った。しかし、律儀というか一端金で請け負ったからにはと機会を狙い続けていたのかも知れないな」
春貞の話しを受けてその場の三人が頷いた。
「では、最後の難問はどう解くかな幸江さん」
いたづらっぽく伊丹が、
「喜市郎があの浪人にことを依頼した経緯だ」
「それは至極簡単なのではありませんか。無論今となっては想像の域を出ませんが」
と断りつつ自説を話し出した。
「先ほど清右衛門さんのお話しから推察したことですが、最初はまったく偶然に主人様が組合の寄り合いでお留守のときに浪人が両替に現れた。侍だというので店先にいた大番頭さんが対応した。その人品卑しからぬ人柄に反していかにも懐具合が良くない風体を見て決断したのだと思います」
「この侍なら頼りになると思ったのかい」

伊丹の問いに幸江は臆することなく「はい」と応えた。
そのとき大番頭さんはいち使用人からの依頼では説得力に欠けると思い、侍を座敷に上げ、民さんでしたか…にお茶を出させ、自分が相模屋清右衛門だと名乗って手元にあった二百両を差し出したのではないか。勿論先に話題になったがその際、相手は得田新之助であると教えたもののその正体については明かさなかった。というより喜市郎は親の敵と吹き込まれていたものの、まさかそれが将軍吉宗であるとは知らなかった。
そして侍にしてみれば労咳で体が弱り、高価な朝鮮人参を服用することで命を繋ぐことを望むあまり、その二百両はあまりに魅力的なものだったということだ。
幸江の話が終わると一同はしばらくの間無言だった。
「ふうっ」と大きな息を吐いた伊丹は、
「やはり幸江さんは南町奉行所吟味方に欲しいな」
と真顔で言い切った。そして、
「その二度の襲撃が失敗した時点で忍藩としてはこのまま同じ事を繰り返しては足がつくと暗殺を取り急ぎ断念し、事情を知る喜市郎を始末したというわけか」
両手を膝の上に置き肩を落とした。

清右衛門は思わず両手を合わせていた。
「いまの話し、後でまとめて御奉行にご報告しておこう」
伊丹は自分に言い聞かせるように天井を睨みながらいった。

六

春貞にとって一連の騒動終結を最後に知らせるべき相手が小石川養生所の小川笙船だった。
日中は診療に忙しくとても込み入った話ができる状態ではないからと朝餉の時間に養生所の玄関を跨いだ。
ちょうど掃き掃除をしていた弥三郎が、
「おはようございます。春さん。どうやらあの件は片付きましたかな」
と聞きながら箒を置き一緒に玄関をすべった。
「とっっあんにも色々と苦労をかけたが、まあそんなところだ」

「相手が相手ですからな、町人を引っ捕らえるようにすっきりとは行きませんや春さん」
弥三郎がまだ春貞に納得がいかない点があることを察しそう言い切った。
「そうだな。俺たちがずるずると引きずっては浮かばれる者も浮かばれまいな」
春貞と弥三郎は顔を見合わせ頷きあった。

春貞の顔を見た笙船は、
「春さんや、今日は久しぶりにすっきりした顔をしてるな。あの騒動が方がついたかな」
と問うた。
「先生は八卦も見るんですか」
春貞が笑った。
いつものように朝餉の席には小川笙船と息子の丹治、そして当直の医師である岡丈庵、村山自伯そして笠原養瑚と弥三郎がいた。
ひととおり騒動の終幕を迎えたことを知らせると笙船は、
「春さんや、そろそろ他人のことよりお前さんの祝言の心準備をしないと幸江さ

んに嫌われるでな」
と笑った。
丹治が、
「そういえば春さん、お式にはお偉方がずらりと並ぶのですか」
と問うた。
苦笑いした春貞は、
「できるだけ簡素に気のおけない仲間たちだけで祝言をと考えているが、これば
かりは相手もいるしこんな俺でも世間様も関わってくる。なかなか思うようには
いかねえな」
そう伝法に応えた。
「あの大岡忠相様からは是非出席したいと文をいただいたでな、春さん承知して
くれないと困るぞ」
仲人の笙船に言われては承諾するしかなかった。
「しかし、春さんは尾張に縁のある人だし幸江様は尾張藩江戸家老の娘御です。
参勤で江戸におられる藩主継友様がご出席されたいと申されているのではありま
せんか」

本道の医師岡丈庵がいった。
「ああ、本人からそう言われたがな、皆に迷惑がかかるからと断ったよ」
春貞のいいように岡丈庵や外科医村山自伯らが唖然とした顔を向け合った。
「だってそうだろ。殿お一人で来られるわけではないぜ先生方。警護のためとはいえ籠や馬などずらずらと来られては廻りが迷惑よ」
それを聞いて笙船は声を上げて笑い出した。
「まあ、殿様の祝いを蹴るなど春さんしかできませんや」
弥三郎も笑い出した。

朝餉が終わり、春貞が裏庭に出ようとしたとき弥三郎が追ってきた。
「春さん、わっしも一連の騒動が終息されたことを聞き及んでますし、大概のお調べの中身は知ってるつもりですが、ひとつ分からねえことがありやして」
と春貞に聞きたいという。
「おう、俺が知ってることであればとっつぁんに隠すこたあねえから話しをするぜ」
春貞が上がり框に腰掛けると弥三郎も後ろを振り返りながら春貞の隣に座った。

「いえね、相模屋の大番頭ですが、長らく真面目に勤めた相模屋だけでなく清右衛門をも裏切るようなことを何故したんですかねぇ。わっしにはどうにもそこが腑に落ちませんな」
弥三郎はため息交じりにそう呟いた。
春貞は弥三郎の横顔を見ながら、
「主人の名を騙ったこと、それから忍藩の借用書を持ち出したことかい」
と問うと弥三郎は無言で頷いた。
腕組みした春貞は、推測だがと断りながらも思っている事を話し出した。
それは喜市郎としてはこれほど大事になるとは、その大事の一番は自身が始末されるとは思ってもみなかったこと。そして主人の名を騙ったのもその場限りのことで済むと思ったのではないか…。ましてや恩のある清右衛門を裏切るつもりはまったくなかったかも知れない。
「なるほど。それはそうだとしても春さん、借用書を持ち出したことはどう釈明するつもりだったんでしょうな」
弥三郎は拘った。
「そうだな。しかし俺たちの先入観かも知れねえぜ、とっつあん。借用書が御店

から持ち出されたと知った俺たちはすぐ、これは忍藩からの交換条件のひとつだろうと思ったことは確かだ」
「へえ、そうですな」
「しかし、そうだとは限らねえと思うんだ」
春貞は日が差してきた薬園を眺めながら言葉を紡いだ。
春貞の話しは弥三郎にとって疑問を解くひとつの場面を想像させるものだった。
ことは忍藩江戸下屋敷としようか、ある日のこと用人浅井半兵衛が呼びつけた喜市郎にいった。
「大番頭、我が藩の借財はかなりの額になっておる。いまや我らもお主ら商人の力なくして参勤交代もままならないことは承知のとおりじゃ。ただしこれだけ借財が大きくなるとな、利子の額も馬鹿にならずそれが我らの頭痛の種でもある。そこでじゃ…」
用人浅井半兵衛はせめても利子を軽減させたいと喜市郎を諭し二枚の借用書を持参させた。
喜市郎はそれなら利息だけお支払いいただければと申し出たが浅井半兵衛は
そもそも長い間借財し続けているという事実を多少でも払拭したいと借り直しを

提案したのではないか。
これまでの利子は支払うから二枚分の借用元金をこの場で返済したことにし、同時に同日同額を再び借用する形にしたいという策だった。したがって借用書すなわち証文は新たに書き直しとなるし古い証文は返す必要があるから持参せざるを得なかった。
利子は借用期間が長くなるほどに膨れあがるから、これはその対策でもあると用人は大番頭に説明した。
春貞の話しは弥三郎にとって意外だったが、喉に引っかかっていた小骨が取れたような気がした。
「なある。ただ利息を払ってくれるというだけでは証文を持ち出させることはできませんからな」
「このやりとりがあった時期がいつ頃なのかも不明だが、そのときすでに用人は喜市郎を始末するつもりだったに違いねえな」
「そうか。喜市郎はあくまで証文の書き直しのつもりで持ち出したとすれば春さんの言うとおり、主人を裏切るうんぬんとは違いますな」
弥三郎は深いため息をついた。

「喜市郎は主人から信頼されていた大番頭よ。明らかに御店の損害となる話しには乗れまいが、このような話しなら大番頭の一存で商いを進められたに違いあるまい」

春貞の話しはまだ続いた。

「いや、事実がどのようなものであったかは今となっては分からん。しかし大番頭の身になってみれば、不正はいずれ発覚することなど承知だったろうからそうした考えははなから考えてはいなかったのではないかと思ったのだ。例えば主人が用意してくれた暖簾分けの支度金の一部を刺客に渡してでも思いを、いや吹き込まれた偽りだったがな…仇討ちを遂げたかったのかも知れんが、俺は二百両もの大金をすべて刺客に渡したとはどうにも思えねえんだ」

「といいますと」

「うむ。もしあの刺客が上田新之助を斬ることを請け負ったとき、それが公方様だと知らなかったとすればだ。いや、そもそもとっつあんも聞いたろうが、喜市郎自身が得田新之助を公方様と承知していたとは思えんな。だとすれば二百両をそのまま差し出したとはこれまた思えん。殺しの相場があるのかないのか知らんが、大金過ぎると思ってな」

春貞は弥三郎に顔を向け、
「その金も用人らがなんだかんだと策を弄して喜市郎から巻き上げやがったのかも知れねえと俺は思っているんだがな」
「なるほど。喜市郎にしてみれば大願成就、いや、これは喜市郎側の気持ちですがな、事が済んだ暁にはすべてを清右衛門に打ち明けるつもりだったかも知れませんな」
二人はしばらく無言でその場に座していた。

第六章　祝言の夜

一

その日が来た。
永井幸江は白装束を身につけ、尾張江戸藩邸内にある私邸で父主水に暇乞いをしていた。
老いたとはいえいまだ江戸家老の職にある主水は涙を見せないようにと天井を睨んでいた。
「父上、長い間我が儘な娘をかくも慈しんでいただきありがとうございました」
白無垢の花嫁姿の幸江が三つ指突いて頭を下げた。
「うむ…うんうん」
主水は言葉を発することが出来ずに頷いてばかりいた。
幸江が腰を上げたとき、絞り出すような声で、

「幸江、幸せにな。その姿、母にも見せたかったぞ。いや、きっと草葉の陰で喜んでいるに違いない…」
と嗚咽し、
「春貞どのに可愛がってもらえ。また後で春貞どのの屋敷で会おうぞ」
それが別れの言葉だった。
幸江も化粧が崩れるからと涙を溜めていたが、守り袋を襟にかけてうつむいたとき、畳みに小さな音を立て一粒が落ちた。
それを気づかれまいと急ぎ輿が待っている玄関に向かった。
外はすでに闇が迫っていたが、私邸の外門には門火(かどび)が焚かれ、昼のような明るさだった。
江戸家老の一人娘の祝言だ。門内の左右には多くの正装した藩士たちが輿が通るのを待っていた。
近習頭の伊藤虎次郎、剣術道場師範代の酒井清之助、春貞と道場で手合わせしたことがある伊藤文也や金子基次郎の顔もあった。
幸江が乗った輿が烏帽子に十徳・白帯姿の輿舁(かごかき)き人夫たちに担がれしずしずと門

に向かって進むと両側に並んだ藩士たちが深々と頭を垂れた。
輿に寄り添っているのは露払い役のい組の頭政五郎、そして警護の責任者として尾張江戸藩邸剣術指南役堀田万之助が緊張した趣で輿の脇を固め、その後には従者の体で弥三郎もいた。
尾張江戸藩邸から春貞の屋敷まで婚礼の荷物と共に輿で幸江を運んだのはすべて「い組」の男衆だった。
総勢五十余名のはっぴを着た男衆が高張り提灯の灯りを先頭に木遣を歌いながらの行列は厳かで見事だった。

一方、春貞の屋敷門前にも煌々と門火が焚かれ、異例ではあったが春貞自身は勿論、母（乳母）沙代をはじめ金杉水道町の十手持ち、定吉親分や南町奉行所同心伊丹鉄太郎らが今か今かと輿の到着を待っていた。
また奥では定吉の女房お勢と娘の佳、い組の頭政五郎の女房お志津が春貞の屋敷付の女衆の手伝いとして立ち働いていた。
木遣りの歌に包まれた幸江の輿が闇夜の中、山谷堀から何艘もの舟に乗り込み向島三囲神社手前にある春貞の屋敷を目指すと大川の水藻に数々の明かりが映り込

み幻想的な一瞬一瞬を見せてくれた。
舟から上がった一行が陣を立て直し姿を見せると屋敷の内外から歓声があがった。そして煌々と焚かれた明かりの中、輿はそのまま玄関をあがり、奥の間まで運び込まれたが、庭では金次ら男衆による祝いの餅つきが始まっていた。
祝言の間には別途籠にて先回りした幸江の父永井主水、南町奉行大岡忠相、仲人の小石川養生所肝煎の小川笙船夫婦と非番だった息子の小川丹治、本道医師林良適、外科医師村山自伯、南町奉行所与力佐竹弥五郎そして太子堂長兵衛と相模屋清右衛門ら夫婦と長兵衛の一人娘夏穂が神妙な様子で待ち構えていた。
本来なら賄中間たち養生所の皆にも祝ってもらいたいと思ったが、養生所を休むわけには行かず仲人の小川笙船はともかく非番の医者たちが駆けつけてくれた。
さらに急遽、たっての願いが沙代に寄せられたこともあり、越後屋の隠居三井八郎右衛門こと三井高平の顔もあった。

二

幸江を迎えた春貞は半袴と熨斗目の小袖姿だったが、この祝言の日だけにと徳川葵の紋が光っていた。

普段は無紋の春貞だったが、昨年吉宗に謁見した際、

「そうそう、春貞。お主今日は無紋のようじゃがそれでは些か寂しい。今後は尾州三つ葵でも徳川葵でも好きなものを使え。余が許す」

と言われたからだ。

それにしても徳川葵では畏れ多いと思ったが、禄を食んでいない尾張の紋、尾州三つ葵では誤解を招くと徳川葵にした。

幸江が輿から静かに姿を見せたとき、春貞も思わず「おおっ」と小さな声を上げた。

幸江は練絹の白小袖の上に綾絹の白小袖を着て白の帯を締め、その上に真っ白な打ち掛けを着用していた。そして被衣(かづき)をかぶった純白の姿にうつむいた幸江の紅

が美しさを際立たせていた。
その幸江の花嫁衣裳を見立てたのは沙代と太子堂主長兵衛の女房お糸だった。
お糸は御店が襲われようとした事件以来小石川養生所に入所し小川笙船はじめ村山自伯、村山元格らの診察を受けた結果、労咳ではなく肺の腑に炎症を起こし、それが原因で食欲も落ち体力が低下していたと診断された。その後手厚い看護を受けて以来めきめきと顔色もよくなり気力が増し笙船から完治のお墨付きを得ていた。
祝言の間の床の間には昆布を乗せた三方が置かれたが、その床の間を正面にして左右に春貞と幸江が座した。そして新夫婦の間には洲浜の上に高砂の島台が置かれていた。
幸江の姿を認めた父主水は泣くことを知られたくないのかずっと下を向いたままだった。
春貞は簡素な式をと考えていたものの幸江の父は徳川御三家筆頭格尾張藩江戸家老だったし、春貞の母も略式でよいから徳川葵を身につけるに相応しい厳かな式にすべしとの希望だった。
その両者を取り持ち、何とか双方納得がいく祝言をと労をとったのが太子堂の長

兵衛と相模屋の主清右衛門だった。

この時代の婚姻、特に上級武家のそれは実に大変だった。
以前笙船が簡単に述べたように、祝言の前の吉日には嫁方で花嫁道具を披露する習わしになっていたし、両家の繁栄と存続を願うのは当然としても格式を重んじるため、祝言の前後も両家の親族間や仲人への挨拶、そして数多くの振る舞い膳の場が設けられた。
さらに現代の結婚式は両家が一堂に集まり一度で済ますのが一般的だが、江戸時代は最初の祝言は花婿方で行われた。しかしその時の宴には婿方の親族しか出席できず、花嫁方の両親や親族は列席しなかった。
婿方の祝言が終わった後に、婿やその両親、仲人などが花嫁方に出向き、ここでも三三九度と宴が催される。その場には嫁方の親族が列席する…といった具合であった。
この為祝言は三日ほどかかるのが通例だったのである。
春貞と幸江はやむなく形式と伝統は父母の願望を受け入れ重んじることを承知したものの、結納の略式化、花嫁道具の披露や宴が繰り返されることは止め、心を

許した人たちだけが一同に集まり披露の宴を行うことに拘った。
それには仲人の小川笙船や主水、沙代も反対しなかったし大店の主二人の手抜かりの無い準備もあって実に感動的な祝言となった。
いよいよ三三九度の盃となった。
本来なら酒改めの役である女房二人が床飾りの瓶子（へいし）を持ち下座に控えると同時に銚子や提（ひさげ）の女房も控えるのだが、春貞と幸江たっての願いで太子堂の十三歳になった娘夏穂が、そして定吉の女房お勢とい組の政五郎女房お志津が緊張しながら夏穂の補佐役を務めていた。
その三三九度も済み、幸江はお色直しのため中座した。
それまでの白装束から色物と呼ばれた赤い色の衣服に着替えるためだ。この色物は婿から花嫁へと送られたもので、紅色の地に幸菱（さいわいびし）の地文様が入った小袖と帯であった。
しばらくの後、幸江はお勢とお志津ら女房たちに手を取られて座に現れた。
「おおっ」
「これはまた美しい」

宴席に座している皆からため息とも歓喜とも思える様々な声が上がった。
春貞自身も幸江が宴の部屋に入って座するまでを感極まる様子で見入っていた。
そして宴たけなわとなった。

三

分限者である大店の主人たちだけでなく大岡忠相や永井主水も宴に列べられる式三献と饗の膳の見事さには目を見張っていた。
沙代が屋敷の料理人富四郎および近隣にある料亭の力を借り選んだ最高の食材を使い婚礼方式に則った盃事と膳が用意された。
饗の膳、すなわち本膳料理は魚鳥中心の料理で、三膳に汁かけ飯も付いていた。
本膳は、塩漬けの魚、削鱧（そぎはち）、蛸、焼鶏、香の物、えり切、鯛の厚作、鳴壺（しぎつぼ）、帯の饗。

二膳は、巻鯣（まきするめ）、海鼠腸（このわた）、削昆布、蒲鉾、椀に入れた貝。
三膳は、魚の串焼き、醤煎（ひしおいり）、差海月上（さしくらげ）にすり花鰹、腸煎（わたいり）、海老の船盛、汁かけ飯だった。
酒は尾張藩江戸上屋敷、というより徳川継友よりこれまた最高の酒が四斗樽で三樽も届いていた。
酒も入ったことでもあり、それぞれが春貞や幸江と出会った当時の思い出話に花が咲いた。
「しかし、僭越ながら手前も多くの祝言に参列いたしましたが、町奉行の大岡さまはもとより、与力同心の皆様と町方の皆さん、お医師の先生方、い組の頭、そして手前ども商人も列席させていただくという祝言は前代未聞ですな。ねえ相模屋さん」
太子堂の主長兵衛が隣に座った娘の夏穂に目をやりながらしみじみと呟いた。
夏穂の隣には長兵衛の女房お糸がこれまた隣の相模屋清右衛門と越後屋の三井高平の杯に酒を満たしていた。
「ありがとうございます。奥様。しかしまったくでございますな。これほど温か

な祝言は手前も経験したことがございません」
「長生きはするものですな」
清右衛門と三井高平はお糸に頭を下げながら酒を口に運んだ。
三井高平は、
「金杉町の親分は八丁堀つながりで春貞さまと古いお付き合いと伺いましたが、失礼ながら『い組』の頭はどのようなご縁で春貞さまとお知り合いになられましたのか」
すでに政五郎を良く知る三井高平に話しを振られた政五郎はすでに顔を赤くしながら、
「いえね。わっしが春さん…いや春貞さまと知り合ったのはそもそも大岡さまとのご縁が最初でした。ご承知のように大岡さまは町火消しをご苦労の末にお作りになられ、わっしらはその末端でお手伝いさせていただいてまさあ。そういえば春さん…春貞さまと…」
「頭、いつものとおり『春さん』で構わんよ」
春貞の一言で座が和み、気持ちが楽になったのか政五郎は春貞との縁を語り出した。

それは享保六年、養生所が開所となる一年前の話だった。
本町で火災が発生し、政五郎のい組は早速陣立てをして消火活動にと駆けつけたが、その辺は町屋と武家屋敷の狭間でもあり、大名火消の連中と乱闘になった。
大名火消たちは刀を抜き、政五郎たちは鳶口で応戦し消火どころでなくなったと政五郎が観念したとき、春貞が飛び込んできた。
その時の春貞はたまたま半袴姿だったが咄嗟に「我は御三家筆頭格尾張松平春貞である」と叫んだ。
「そのとき、春さんは『双方とも争いを止め、まずは火を消せ』と叫んだんで。いや町人のわっしらは松平様とか尾張様と聞いてもあまりぴんときませんや。しかし大名火消しの連中は体面が第一でもあり、春さんの一声で怯み、消火活動が捗りましてな、大火にならずに済み、組の者たちの命も救っていただいたというわけでして…。あのまま乱闘が続いていたらこのわっしも斬り殺されていたに違いねえんで」
政五郎はその時を思い出したのか、涙ぐんでいた。
「いや、頭。とっさの浅知恵よ。いま振り返ると冷や汗が噴き出るぜ」
春貞の物言いに笑いが起こった。

自身の名が出たからか、大岡忠相が隣に座っている沙代に、
「奥様、春貞どのはどのようなお子でしたかな」
と問うた。
沙代は思わず春貞と視線を合わしたが、春貞は、
「母上、そればかりはご勘弁を」
と止めようとしたが、
「やはり春どのは尾張三代藩主徳川綱誠様のお子。曲がったことが大嫌いなだけに孤独な子供時代を長くお過ごしになられました。わたしが申し上げるのも変でしょうが、いまこうして皆様方に温かく接していただいておるのを見て春どのは人生一番の幸せを満喫されていると思います。あらためて皆様に御礼を申し上げつつ、今後もご鞭撻くださいますよう切に願い上げます」
沙代はそういい最後は涙声となっていた。
「ごほん」
と咳払いが聞こえ、幸江の父、尾張藩江戸家老永井主水が背筋を伸ばしていった。
「率爾ながら幸江の父として一言ご一同に御礼を申し上げたい」

一同が姿勢を正すと主水は幸江と春貞をしばし直視していたが、
「おかげをもってそれがし一番の気がかりが片付き申した。すでにご一同さまにはご承知と思われるが昨年末、思いあまって春貞どの直々に娘を貰ってほしいと迫った次第。いや親馬鹿とお笑いめさるな。無骨者のわしから見ても娘は春貞どのを好いていることが隠せないほどでな、わしと二人になるとやつの口から出るのは春貞どののことばかりじゃった」
一同に静かな笑いが聞こえ、幸江は赤くなってうつむいた。
「娘はお江戸一番の幸せ者でござる。どうかご一同、これからも春貞どのと幸江の二人をよろしゅう頼む」
徳川御三家筆頭格、尾張藩江戸家老が手前に置かれていた膳を脇にどけ、両手をついた。
「御家老さま、お手を上げてくだされ。それはここにお集まりの全ての方々が等しく願っていることですじゃ。ご安心めされ」
仲人の小石川養生所肝煎小川笙船が永井主水の手をとった。

四

そのとき廊下に足音が聞こえ金次が慌てた声で、
「は、は、春さん。尾張の殿様がっ…」
その声が終わらぬ内に尾張六代藩主その人である徳川継友が笑顔で座敷に入ってきた。
永井主水はこれまた慌ててどもりながら、
「と、と、殿。急にいかがなされました…」
やっとなことに口に出し床の間を背にした上座に誘った。それに合わせて継友を知っている大岡忠相も「これは」と席を空けて平伏した。
「邪魔して済まぬ。春貞どのは余がいては座がしらける故祝言の宴には出てくれるなと申していたがな、幸い参勤でこうして江戸におる身。どうしても一言祝いをいいたくてまいった。春貞どのそしてご一同許せ」
磊落に宴席を見回し座しながらいった。
「聞きお呼びのことと思うがのう、余と春貞どのは腹違いの兄弟でな。お家の事

情もあったもののこの御仁は我らの堅苦しい暮らし向きを嫌い家を出たが、世が世なら尾張藩主にもなりうる器量の男ぞ。その春貞どのが、此度尾張藩江戸家老の娘幸江と結ばれるという。余としてもこれほど嬉しいことがあろうか…。察してもらえるかのう」

春貞と幸江は勿論、一同は平伏して継友の祝いの言葉を聞いた。

「さて、表にはうるさ方が多々待っておるのでな、長居は出来ぬから邪魔者はこれにて失礼するが、余からもこの二人のことをな、皆の者よろしく頼む」

と腰を上げたとき、

「殿」

と春貞が声をあげた。

「おう、なんじゃな春貞どの」

「酒樽、ありがとう存じました」

その物言いを愉快そうに聞きながら徳川継友は、

「こういう御仁じゃて我が兄弟は。わっはははは」

そう笑いながら継友は滑るように祝いの席から姿を消した。

「いやはや、凄い祝言となりましたな」

い組の頭政五郎は深呼吸をして言った。
「いかにも、いかにも」
小川笙船も驚いたようであらためて座り直した。
これまた座に座り直した大岡越前は、
「それだけ春貞どの幸江どのが好かれ信頼されている証しですな」
と言い切った。
大岡とも親しいい組の政五郎は、
「そもそも南町のお奉行、大岡さまがご出席なされる祝言それ自体が我々下々の者にとっては普通ではございませんや」
興奮冷めやらぬ顔でいった。

末席に友として連なっている伊丹鉄太郎は今更ながらに春貞の交友の広さ深さに驚きいっていた。
普段は「春さん」と気楽に呼び合っている自分より年下の男の祝言に、町奉行大岡が出席し、尾張藩当主まで現れるとは夢でも見ているのか、酔っているのかと思うほど奇異なことだった。

小石川養生所が開設と同時に伊丹鉄太郎は養生所見廻り役も命じられたため、そこで春貞と出会った。
いつも首巻きをし、にこにこしている男を当初養生所肝煎小川笙船の息子かそうでなければ小間使いかと思っていた。事実廻りで春貞は小川笙船の隠し子だという噂がまことしやかに語られていたほどだ。
その男が尾張柳生新陰流免許皆伝で自分より腕が立つと知ったとき、春貞を見直すことになった。また奉行所内でもなぜか大岡までが「あの御仁」と一目置いた物言いをしていることに気づき興味を持った。
そして数々の修羅場を春貞と一緒にくぐり抜けてきたいま、深い友情で結ばれていたが、その男が御三家筆頭の尾張藩主にまで物言える男だとは思っても見なかった。
春貞の魅力は権力を自ら行使することを嫌っていることだ。その気なら尾張藩の上席に座り込むこともできるはずだ。しかし自らは市井の男として笙船のため養生所のために駆けずり回ってきた。
面白いのは権力側の方から、そう…大岡忠相はもとより徳川継友や将軍吉宗までもが時に春貞の力を借りようとし、かつその身を案じていることだ。

「なんと不思議な男なのか」
伊丹はそう思いながら新郎として笑顔で座っている春貞を見つめていたが、その視線を感じたのか春貞が伊丹に向かって破顔した。

仲人の小川笙船とて春貞がこれほどの男とは知らなかった。
すでに三年以上も前のこと、日が落ちた往診帰りの途中、麹町の長屋近くまで戻ってきたとき、血を滴らせて蹲っている若者を見つけた。
男は侍のようにも思えたが着流しで腰には寸鉄も帯びてはいなかった。
医者として放っておけるはずもなく長屋の診療所に運び込んで治療をはじめた。
首の傷は深くはないが範囲が広く一部の皮膚はそげ落ちていたし右胸の傷は深かった。
小川笙船は本道（内科）の医師であったが、ともかくは消毒した上で傷口を縫うことが求められた。
男は治療中の激しい痛みにも耐えていたが、笙船の対処に感謝したのか聞きもしない傷を負った顛末を話し出した。
これだけの傷を負わせた相手のことだ。このまま忘れてくれるとは考えなかった

笙船は傷を縫い合わせ容体が落ち着いたとき奉行所に届けることを勧め、男を南町奉行所に連れて行った。
それまで笙船は男の名も聞かないでいたが、奉行所としてはどこの誰であるかを知らなければ対応ができない。
覚悟したのか男は賢明にも尾張藩に縁がある松平春貞だと本名を名乗った。
たまたま在所していた南町奉行大岡越前守忠相が思い当たることがあると丁重に対応してくれたおかげでことが納まったが、傷が治っても春貞と名乗った男は悪びれず笙船の診療所に出入りして雑務を手伝うようになった。
その過程でぽつりぽつりと自分の出目を話し始めたが、次第に笙船は春貞を自分の息子のように思い始めた。
なぜなら、春貞という男は素直で正義感に強く人のために働くのことに喜びを覚えていたからで、長屋の連中ともすぐに親しくなった。
そんな折り、笙船が目安箱に市井の人たちの暮らし、特に目を背けるような医療環境の劣悪なことを訴えたことが将軍吉宗の目に止まり養生所が開所される運びとなった。さらに自身が養生所の肝煎職を命じられたとき誰よりも春貞が喜んでくれた。

きっかけはともあれ、ここまで養生所肝煎を続けてこられたのは春貞がいつも側にいたからだと改めて気づかされた。
その男の祝言に仲人としてこの場に座している縁を、不思議を感じながら目の前にいる春貞の横顔を眺めていた。
そのとき、
「先生、一献いかがでございますか」
太子堂の女房お糸の声で笙船は我に返った。

末席に座していた金杉の十手持ち定吉も感慨深く新郎新婦を見つめていた。
定吉が春貞と会ったのは笙船が南町奉行所に連れて行ったときだが、なにか遠く昔の事のようにも思えた。
首と肩から胸までを晒しでぐるぐる巻きにされた男は大岡の前で松平春貞と名乗ったという。
定吉にとってそんな大層な身分の人間とはこれまで縁がなかったし、伊丹同心のため奉行所のために走り回る自分のような最下層の人間と繋がりができるとも考えていなかった。

享保七年二月だったか、小石川薬園内に庶民たちを無料で診るという「施設院」ができると聞いた。しかし開所の見通しが出来た頃には「養生所」とその名は変えられた。

定吉が噂として聞いたところによれば、公方様は常に座右に医書を置いていることでもあり、貝原益軒の「養生訓」を熟読していたからだという。

その頃、春貞がいきなり小石川養生所肝煎の代理として近所の定吉へ挨拶に来た。

あれっきり縁が切れたと忘れていた男が近隣の薬園にできる養生所についてあれこれと目を配って欲しいと頼みにきたのだ。

「あなたさまは、松平春貞さまでしたな。こんなわっしらのところまで足をお運びいただき恐縮です」

定吉は畏れ多いと畳みに頭を付けた。

春貞は人の良い笑顔を向けながら、

「親分、手を上げてくれ。俺は故あっていつもこんな恰好の風来坊よ。これからは春と呼んで気楽に付き合ってはくれめいか」

その伝法な物言いに引き込まれて定吉は思わずこくりと頭を下げた。

岡っ引きは正規の捕り方ではない。定吉も南町奉行所与力の伊丹鉄太郎から十手を預かっているものの、奉行所の正門から入ることすらできない身分だった。しかし春貞は旧知の友のようにというか、年上の定吉を兄のように真摯な付き合いをしてくれただけでなく幾多の捕り物やもめ事を手伝ってくれた。
そんな風来坊の男が尾張藩六代藩主徳川継友の腹違いの兄弟であるとか、大岡越前と一緒に将軍吉宗に謁見できる男だとは思いもしなかった。
しかしその男がいま、床の間の前で新郎として座していることに、いやなによりもその祝言の席に自分が座している不思議を感じていた。
ふと視線を感じて隣にいる女房お勢と目が合った。
お勢は目頭を押さえていた。
「お勢、お前が泣くことはあるめいに」
と笑うとお勢は、
「お前さん、春さんってさ、なんて男前なんだろうねぇ」
と照れ隠しに呟いた。

五

何といっても今日のこの日を待ちに待っていたのは春貞の乳母沙代だったに違いない。

二十余年前のこと、川田久保松平家の奥女中だった北山沙代は当主の松平友著から呼ばれ、今日から尾張より預かりとなった春貞という幼児の乳母をせよとの命を受けた。

その五年前に沙代は最愛の夫、北山庄左エ門との間に遅い子供を授かったものの死産であった。それだけでなく沙代の運命は過酷を極め、その一年後に今度は夫が病死してしまった。

生きる気力を失った沙代は辛うじて奥女中という任を滞りなく行う日々に心の空虚を埋めるよう努力していた。

藩主松平友著は沙代の才気を買っていただけに、尾張から押しつけられた春貞という赤子の養育を沙代に命じたのかも知れない。

藩主から、

「沙代、この子は徳川綱誠殿からの預かりものじゃ。大切に育てなければならんが仔細あってな、尾張の家に属するわけにはいかないのだという。お前に乳母としての全権を任す。春貞の母じゃと思って守り慈しんではくれまいか。そしてな、物心ついたら市井の者として一緒に暮らしてくれ」

と命じられたあの日が昨日のことのように思えた。

沙代は自分に子供が授かったかのように春貞を慈しんだ。

春貞が麻疹にかかったとき沙代は三日三晩一睡もせずに看病し、神仏に回復を願い添い寝し続けた。

しかし春貞は物心がつき自分の立場がわかってくるにつけ「俺は父に捨てられた」と大藩やその権力などを憎むようになり、屋敷を飛び出しては何日も戻ってこない日が続いた。

悪い仲間と遊び暮らしているのではないかと心配したこともあったが、ふらっと笑顔で戻ってきてはその数日間のことを話してくれたりもした。

やはり血筋なのか、言葉は乱暴でも弱い者の見方として立ち振る舞っている姿を見て沙代は心から喜んだ。そしてこれまた血筋なのだろう…剣術の稽古は幼少の頃から熱心に取り組んだ。

ただし沙代の心配は尽きるところがなかった。
元服した春貞にはやらねばならない、やってみたいという人生の目的がなかったからだ。それが大怪我して舞い戻ってきてから春貞はどこか吹っ切れたようで、今度は小石川養生所を手伝うといいながら目をきらきらさせていた。
「養生所とはあの公方様がお命じになり開所が進むというあの小石川養生所ですか、春どの」
「そうだ。俺のこの傷を手当てしてくれた命の恩人が上様に認められてな、養生所の肝煎となるのだ」
「春どの。貴方はお医師になるのですか」
「いや、今から医師になるのは遅いだろうよ。また俺には医の知識も巧みさもないから無理だが、本当のところ医術の勉学をしておけばよかったと思っているよ」
「では貴方は養生所でなにをなさるのですか」
「沙代。養生所がどのような場所になるか、それは俺たちの働きによるんだと小川笙船先生がいわれた。何しろ初めての試みだからな。やること、やらねばならないことが山ほどあるんだ。だから俺はしばらく養生所の仮設小屋に泊まり込む

が心配しないでくれ」
沙代は養生所が具体的にどのような施設なのかについては瓦版などで読んだ以上の知識はなかったが、春貞が意欲を持ってことに当たろうとしている姿が嬉しかった。
「わかりました春どの。婆はこの屋敷をお守りしてますでな、心置きなく務めなされ」
そういって送り出したのはいつの事だったか。
その春貞がさまざまな縁で尾張の現当主に認められただけでなく町奉行大岡越前守忠相と交友があるという。そして公方様にも拝謁したと聞き我が事のように心が躍った。
それだけでなく様々な立場のさまざまな人たちに愛され、いまこうして美しい娘と祝言の日を迎えた。
自分の役目、乳母という役目がこの日で終わるであろう寂しさもあったが、春貞は母と呼んでくれていた。
「夢でなければよいが、どうか夢なら醒めないでくだされ」
沙代は滲んだ春貞と幸江の姿を眺めながら心の中で神仏に祈っていた。

座がまたまた馴染んできた。
「先般相模屋の清右衛門さん、太子堂の長兵衛さんに伺いましたところ、お二人も春貞さま幸江様にお命を助けていただいたとのこと。手前もこちらのお屋敷のすぐ奥にございます三囲神社で二人組の男に殺されかけましたとき幸江さまにお助けいただきました口で…」
と三井八郎右衛門が語り出した。
「さようでございましたか。三囲神社は三井越後屋さんの守護社でございましたな」
長兵衛がいうと三井八郎右衛門こと三井高平は、
「ご承知のように三囲神社の御祭神は宇迦御魂之命と聞き及んでおりますがな、手前どもの本当の守護神は春貞どの幸江さまでございますよ」
というと大店の主人二人も大きく頷いた。

そのとき、馬の嘶きが聞こえて門前がざわついた様子が伺えた。
何ごとかと末席に座していた伊丹同心が様子を見に腰を上げたとき、軽快な足音

が近づき上背のある男が一陣の風と共に姿を現した。
大岡忠相と春貞が慌てた…。
「松平春貞、永井幸江、めでたいのう。余は祝言に呼んでもらえなかったのでな、押しかけたわ」
男は磊落に笑いながら春貞と幸江の間にある高砂の島台横にどかりと座り込んだ。
それは八代将軍徳川吉宗その人だった。
「上様、これは…」
春貞は平伏しながらも上座を空けて吉宗を誘った。
永井主水はなにかをいいかけたが、言葉が出なかった。
「よいよい。余はすぐに消えるでな」
一同はただただ驚愕し平伏するしかなかった。
祝言の間にいた人々の中で将軍吉宗の顔を知っているのは永井主水は勿論として
も大岡と春貞そして笙船であり、幸江や「い組」の政五郎は得田新之助の姿とし
てしか知らなかった。
そういえば末席に連なっていた政五郎の女房志津や外科医師村山自伯らも顔を上

げればそれが得田新之助だと分かったかも知れないが、志津や村山はもとより十手持ちの定吉や相模屋清右衛門、太子堂長兵衛、三井八郎右衛門ら町人たちは顔を上げることができなかったし、顔を上げたとしても末席からでは吉宗の背しか見えなかったろう。

吉宗は後から入ってきた近習に、

「あれを持て」

と命じた。

近習が春貞にしずしずと手渡したのは一振りの刀だった。

「めでたい祝言の席に刀とは無粋じゃがな、余には祝いの品としてこれしか思い浮かばなかったのだ。春貞、幸江許せ。それは無名だが余も気に入っている一振りよ。徳川紋があるがお主なら普段使いができるだろう。好きに使え」

吉宗は饒舌だった。

「春貞、この目出度い席にこれまたそぐわないとは承知だが余の願いを聞いてはくれまいか」

吉宗が珍しく春貞に向かって願った。

「ははっ、承りますが上様この場は祝言の場、お人払いはご容赦くださいませ」

春貞が冗談まじりに願うと吉宗は、
「今日この日この場にいる者たちはすべてお主が心を許している者らだと聞く。それに相違ないか」
春貞が平伏するのを見つめながら吉宗は、
「春貞、そこに忠相もおるで隠し事をするつもりはないが皆の者、余がこれから申すことは他言無用じゃ。といっても秘密ごととは些か違うが瓦版などに書かれぬよう注意をしてくれ。分かったか」
座に平伏している全員が「ははっ」と畏まった。
「先般春貞は忠相や奉行所の者たちと力を合わせ、余が市井で命を狙われた騒動に決着をつけてくれた。それは余が市井の生活がどのようなものであるかをこの目で見たいと時に城から抜け出したことが原因でもあった。いや、余は今後もな、余自身の目でこの江戸の町を見て歩くつもりじゃが毎日とはいかん」
「御意。僭越ながら御身の安全のためお控えいただきとう存じます」
町奉行大岡忠相が声をあげた。
「このとおり、五月蠅い御仁は城中にも多々おってな、余の思うとおりにはいかんのだ。いやこれは忠相らの責務の綻びを探し責めるためではないが、与力は南

北奉行所に二十五名ずつ、同心は一〇〇名ずつおるが江戸五〇万人の治安維持や行政、防災を図るには力不足と承知している。しかし財政の問題もあって思うようにはいかんのじゃ。その過激な任務を忠相は真摯に努めてくれているし忠相は余の政権にとって耳の痛い問題も区別なく余に伝えてくれる唯一無二の男ぞ」

大岡が再び平伏する姿を見ながら吉宗は、

「そこでじゃ。この場で春貞、そちに余の目と耳の代わりをせよと命じる」

「お待ち下さりませ。恐れながら上様、先ほどは願いと申しておりませなんだか」

春貞はことの重大性を案じ抵抗した。

「細かいことを申すな。言葉の綾じゃ」

吉宗は笑いながら春貞に向かい、

「春貞、これは余の命と知れ。本日この日よりお主は余の目、耳となり江戸の庶民がより安全に暮らせるよう忠相と共に目を光らせてくれ。そしてな、もし目に余る、手に余ると春貞…お主が判断したときは相手が旗本であろうと老中であろうと切り捨ててかまわん。そのときは先の刀を使え。春貞の判断は余の判断、春

貞の命(めい)は余の命であると重臣らにも伝えておこうぞ」
その場は咳払いひとつ聞こえず一同の呼吸が止まったかに思えた。
「忠相。お主は町奉行の責務としてそうした思い切った判断は出来ぬ。したがって春貞、これからも忠相を助けてくれ。また肝心なことだからこの場で口に出すが、動くには金がいろう。ただ働きはさせぬで安心せい」
と微笑んだが、春貞はそれでも固辞しようと、
「上様、畏れ多いことですが上様の目と耳にと動かれているご重臣たちなら他にもおいでのことと存じますが、いかに」
と素直な疑問を呈した。
「確かにそちの申すとおりだ。しかしその者たちに春貞、お主に与えたような生殺与奪の命は授けておらん。お主だけぞ」
春貞は次の言葉を思い浮かべることができなかった。
平伏している一同はあらためて吉宗がいかに春貞を信頼しているかを思い知らされた。
「本来ならこの場で皆としばし祝いたいがそうもいかん。両名共に幸せにな。ま

た会おうぞ」
吉宗は来たときと同じように一陣の風を残して祝言の間から消え、しばらくすると馬の嘶きが聞こえた。
しばらくして弥三郎が祝言の間に続く廊下に片膝付き、
「上様がお帰りになりました」
と告げた。
祝言の間と庭先に唖然とした沈黙が流れ、その刹那誰からともなく「わあっ」と歓声があがった。
えらいことになったと春貞と大岡忠相は顔を見合わせて大きなため息をついた。
しかし幸江は困った顔、驚いた顔、喜びの顔、そうした春貞の顔を見ていれば幸せだった。
祝いの宴はまだまだ続きそうであった。

主な参考文献

安藤優一郎「江戸の養生所」
ディアゴスティーニ「週刊江戸　小石川養生所の開設」
酒井シヅ「まるわかり　江戸の医学」
青木歳幸「江戸時代の医学　名医たちの三〇〇年」
菊池ひと美「江戸衣裳図鑑」
菊池ひと美「江戸の暮らし図鑑」
菊池ひと美「江戸おしゃれ図絵」
菊池ひと美「お江戸の結婚」
森田健司「江戸の瓦版　庶民を熱狂させたメディアの正体」
江戸人文研究会「イラスト・図説でよくわかる江戸の用語辞典」
江戸人文研究会「絵で見る江戸の人物辞典」
野火迅「使ってみたい　武士の日本語」
山田順子「江戸の暮らしがわかる本」
稲垣史生「江戸時代大全」

大森洋平「考証要集　秘伝！ＮＨＫ時代考証資料」
人文社「切絵図・現代図で歩く　江戸東京散歩」
立川博章「大江戸鳥瞰図」
柳生宗矩／渡辺一郎「兵法家伝書　付・新陰流兵法目録事」
柳生耕一平厳信「負けない奥義　柳生新陰流宗家が教える最強の心身術」
村山知義「無刀の伝　柳生新陰流極意」
新人物往来社「剣の達人一一一人　データファイル」
人文社「江戸庶民の食風景　江戸の台所」
松下幸子、榎木伊太郎「再現江戸時代料理」
大野恵造「江戸小唄総覧」

本書の無断複写・配布は著作権法上での例外を除き禁じられています。

首巻き春貞（くびまはるさだ）　祝言（しゅうげん）（決定版）
松平春貞一代記（二）

2017年9月9日　第一刷
2017年10月28日　第二刷
2017年12月24日　第三刷
2018年3月31日　第四刷
2019年4月19日　第五刷
2020年5月12日　第六刷　（決定版）

著者：松田純一（まつだ　じゅんいち）
http://www.mactechlab.jp

表紙デザイン：Junichi Matsuda